

2015 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2015)

目次

| | |
|------------------------------|-----|
| 1. 各科目についての報告 | 2 |
| 2. 2015年度 Placement Test実施報告 | 97 |
| 3. 2015年度日本語相談室実施報告 | 101 |
| 4. 2015年度立教大学漢字検定試験実施報告 | 107 |
| 5. 2015年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告 | 109 |
| 6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告 | 111 |
| 7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告 | 111 |
| 8. 日本語教育センターニュースレター発行報告 | 112 |
| 9. センター員活動報告 | 113 |
| 10. 2015年度FD記録 | 118 |

2015年度日本語教育センター運営体制

2015年度日本語教育センター会議開催記録

1. 各科目についての報告

2015 年度 J0 授業記録

コース概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞平山紫帆、御子神佳奈、長谷川孝子

＜秋学期＞a クラス=保坂明香、神元愛美子、佐々木藍子 b クラス=平山紫帆、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ

受講者数：春学期 7 名、秋学期 a クラス 13 名、b クラス 14 名

使用教材：プリント他

目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

| 場面 | キーセンテンス |
|------------|---|
| 挨拶 自己紹介 | おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/ (私は) ~です/~人です/専門は~です/どうぞよろしく/ ~さんは~ですか?/はい、いいえ/~さんは?/お仕事は?/お住まいは? /お国は?/N が好きです、好きじゃありません |
| 場所を尋ねる | この辺に~、ありますか/~はどこですか/~に行きたいんですが… |
| 買い物 | ~ありますか/いくらですか/~円です/~ください |

| | |
|-------------|---|
| レストラン | ～、お願いします/Nで |
| 許可を得る | Nでいいですか/Vでもいいですか |
| 依頼する | Vてください |
| 予定・行動について話す | ～に行きます/行きましょう/V ます・ました/何をしますか・何をしましたか/Vたいです |
| 感想を言う | ～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形 |

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

結果と課題

<春学期>

J0クラスでは、ひらがなやカタカナすら定着しない学生がいることも珍しくないが、今学期はやる気がある学生が多く参加し、仮名はもちろんのこと、文法もきちんと勉強することができた。テキストで学習した内容は、学生の生活に身近なことが多く、学生も楽しんで取り組んでいたが、それに加えて何度も繰り返し授業で扱うことで、徐々に定着へとつながっていったように思う。今後も学習者の理解度を常に把握し、楽しみながら少しずつ語彙や文法を増やしていくように心がけたい。また、J0クラスでは今学期も日本人学生と話をする機会を数回設けた。実践の場として学生からも好評であったが、学習していない日本語に接しても、日本語学習のモチベーションが下がらないよう配慮する必要性も感じた。今後はもう少し会話全体や聞き返しのストラテジーを練習した後で難しすぎない場面を選ぶなど、工夫していきたい。

<秋学期>

(aクラス)

学期前半は、積極的にクラスに参加する学生が多かった。学生からの質問も多く、質問に答える形でクラスを進めていくことが可能であった。また、実際に授業で習った内容を学校外で使用するなど、授業外でも日本語を意欲的に学ぼうとする姿勢が見られた。そうした高い学習意欲を学期後半まで維持できた学生は、ファイナルスピーチでも学んだことを十分に活かして、とてもよい発表ができていた。質疑応答も日本語で行っており、学習した表現の定着が見られた。

しかし、その一方で、学期後半になり、意欲が低下し、欠席する学生が増加した。その理由には、日本語の授業の優先順位が低くなったことや、学生自身が日本語能力の向上を感じられなかったことがあるのではないかと推測する。ひらがなカタカナが定着しなかった学生もおり、既習事項も忘れがちであ

った。J0a クラスでは学生の語彙及び文型の習得度を評価しないが、そのために学生は覚える努力をしなかったのかもしれない。今後の対策としては、文型及び語彙の習得を深めるために、学生が日本で6ヶ月過ごすために必要な日本語を再考し、内容をスリム化し、それらが確実に身に付くように、ビデオ学習、音声教材等を通して、徹底的に繰り返し練習を行うという方法もある。また、サバイバル日本語の到達点は、聞いて理解できること、伝えられることであると考えられるので、それを測るためにパフォーマンスをチェックする課題を取り入れてもよいかもしれない。

(b クラス)

学期末まで出席していた学生は、全員、日本と日本語への関心が高く、日本語学習を楽しんでいた。文字への関心も高く、学期末には多くの学生が、ひらがなとカタカナの読み書きがスムーズに行えるようになった。

学生は、カリキュラムの内容が日本での留学生活に有用なものであると捉えており、積極的に授業活動に参加していた。学習した内容を敷衍させて新しい語彙の意味やルールを推測したり、既習項目を組み合わせて表現を発展させたりすることができる学生も多く、学生たちは、毎回非常に意欲的に学習を行っていた。

J0 は、日本での留学生活のためのサバイバル日本語を学習するコースであり、帰国後の継続学習を想定していないが、帰国後も引き続き日本語を学習したいと言う学生もおり、J0 は日本語学習継続の動機づけとしての役割も果たしていることが示唆された。

一方で、一部の学生が履修を途中でとりやめてしまったことが残念である。このような学生に対して、学習の動機を継続させることが今後の課題である。

2015 年度 J1 授業記録

コース概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週5日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：<春学期>小森由里（文法1）、栗田奈美（文法2）、小森由里（聴解会話）、
神元愛子（読解・作文）、藤田恵（総合スキル）
<秋学期>藤田恵（文法1）、栗田奈美（文法2）、小森由里（聴解会話）、
神元愛美子（読解・作文）、西内沙恵（総合スキル）

授業コマ数：週5コマ（文法1、聴解会話、文法2、総合スキル、読解・作文）

受講者数：春学期8名、秋学期10名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の利き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

| 課 | 文法項目 |
|-------|--|
| プレッスン | <ul style="list-style-type: none">• Exchanging greetings• Learning some survival expressions• Learning the writing system of Japanese language• Learning basic numbers• Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence)• Learning basic words(Date、 Time expressions) |
| 1 | <ul style="list-style-type: none">• Noun sentence ～は～です• Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど• Noun modification(kinking nouns) ～の• Particle “also、 too” ～も• Particle(question marker) ～か• Interrogatives なに・だれ・どこ• Pronominal “one” ～の• ”please give me ---“ ～をください• Counterword ① ～円、個、才、ひとつ• Sentence ending particles ～よ、ね |

| | |
|---|---|
| 2 | <ul style="list-style-type: none"> • Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj. です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう |
| 3 | <ul style="list-style-type: none"> • Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj. です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から |
| 4 | <ul style="list-style-type: none"> • Verb groups、 dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating、 drinking |
| 5 | <ul style="list-style-type: none"> • Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching、 seeing、 speaking |
| 6 | <ul style="list-style-type: none"> • ～は Object に V sentence • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ～から～まで • Duration on time ～間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、これから |

| | |
|----|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・～と思う ・～だろう／だろうと思う ・Mimetic words ③ Condition of the body |
| 7 | <ul style="list-style-type: none"> ・Sentence of existence and locatives いる、ある ・Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 ・だけ／しか ・N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、 neither) ・N1 は A、 N2 は B(Contrast は) ・Noun と／や、 Noun/adjective/verb て form、 V-たり V-たり Adjective/verb し ・～かもしれない |
| 8 | <ul style="list-style-type: none"> ・V-ている(Continuous action、 state) ・Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する ・が used to describe a condition、 scene before one's eyes ・～中(during、 while、 through) ・もう／まだ ・～ませんか、～ましょう ・Questions word + か／も ・～んです ① |
| 9 | <ul style="list-style-type: none"> ・Giving advice ～たほうがいい ・Particle に(amount of frequency per time unit) ・Adverbial usage of adjectives ・Noun になる ・Conditional ① : と ・Chang of state、 condition(adjective + なる) ・Mimetic words ④ Pain |
| 10 | <ul style="list-style-type: none"> ・に(final destination)／を(point of departure) ・V-たことがある(experience) ・Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain ・Third person's emotion/feeling/pain/desire ・Conditional ② : たら ・Even if ～ても |

授業の方法

J1は週5日のコースであり、文法1、聴解会話、文法2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

文法2：文法1で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法1で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って400字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

文法1：出席率、宿題の提出率が高く、全体的に真面目な学生ばかりだったが、コースが進むにつれて学生間の力の差が開いていった。自律学習できているかどうかの影響したとみられる。授業には、教科書を読んで予習してから臨むことになっているが、それができなかった学生が多く、新しい語彙や文型・文法項目の導入に時間がとられ、定着をはかるための練習が十分にできなかった。今後は、自律学習を徹底させ、学生の習熟度に差があるクラスを効率よく運営する方法を工夫していきたい。

文法2：授業態度、理解度ともにモデルとなるような学習者がクラスを引っ張る一方、定着に時間がかかる学習者たちも真面目に努力を続ける姿勢を崩さなかったため、学期を通して、円滑にクラス活動を進めることができた。一方で、このクラスでは新しい文法事項を用いてそれぞれが短文を書く練習を行うが、学習者によって書くスピードにかなりの差があり、また、必要最小限の練習で済ませようとする学習者も見られた。こうした学習者への対応が、今後の課題である。

聴解会話：学生たちは意欲的に取り組んではいたが、コース後半になって導入される語彙や文型の量が増えると、新しい項目の理解と定着に時間がかかり、会話練習は実践的なものより形式を定着させるものが主になってしまった。聴解練習は、新しい文型が消化しきれていない段階で、未習語が含まれるダイアログについては聞き取りに苦労している学生が多かった。今後は、時間配分に留意し、ターゲットの文型・文法項目を定着させたいうえで、実際のコミュニケーション

の場面に適用する練習を充実させる必要があると思われる。

読解作文：読解は、文構造が分からず、一人で読み進めることが困難な学生がいたため、授業の後半は教師が個別対応することが多かった。学生同士よく助け合うクラスだったが、中間層の学生をフォローしきれないことがあった。学生のレベル差異への対応が今後の課題である。作文は、テキストの質問に答えながら、内容を考え、必要な語句を導入、モデル文を読み、構成を確認するところまでクラスで行った。実際に作文を書くことは宿題になることが多く、学生が宿題を提出しない場合、文構成や原稿用紙の使用方法を教師が確認することなく終わってしまった。遅れて提出する学生もあり、頑張りが成績に反映されなかったことも残念である。多かった間違いやいい文は作文を返却する際に全体で共有した。最終試験ではそれぞれが学期に学習した文法や表現を使用し、宿題以上の量を書くことができた。読解、作文共に宿題を提出しない場合、学ぶ機会が著しく損なわれた。如何に宿題を徹底させるかが今後の課題である。

総合スキル：このクラスは、日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用したスピーチや日本人へのインタビューといった活動を中心に授業を組み立てていった。しかし、学期が進むにつれて、文法項目が消化しきれずにいる学生が出てきたため、活動に移る前の文法項目の復習に、多くの時間を割かなければならないこともあった。よって、単調な練習を繰り返し行う場面があり、学生の学習意欲がやや下がってしまうこともあった。クラス活動は、学生の興味をひき、学習意欲の向上につながる様子が見られたため、今後は文法項目の定着をはかりつつ、活動の時間も取り入れられるように、時間配分にも注意していきたい。

<秋学期>

文法 1：全体的に日本語学習への意欲が高く、10名中9名が無遅刻無欠席で出席していた。新規語彙、文法項目の習得にも積極的で、授業内で実施している語彙クイズへの準備を毎回欠かさずに行っている様子が見られた。文法 1 の授業は、当該課の文法項目を予習してくることを期待し進めているが、今学期の学生は予習よりも文法 1 の授業後の復習に力を入れる学習スタイルを持っていた。そのため、文法 1 では、授業進度に影響が出ることもあったが、学期を通してみると、多くの学生が新規項目の獲得に成功していたように思われる。よって、今後は学生の多様な学習スタイルに合った授業となるように検討と改善を重ねていきたい。

文法 2：全般的に勤怠状況、課題の提出状況ともに良好で、真面目に学習に取り組むクラスであった。学習者同士の仲もよく、和やかな雰囲気の中でクラス活動を進めることができた。開講当初は文字の習熟度により、授業内での書くタスクにスピードの差が見られたが、コース後半にはその差もだいぶ縮まって来た。しかし、最後まで自分のペースを崩さずに、かなり時間をかけて文字を書く学習者も見られた。丁寧に書くことは評価すべきではあるが、今後は適切なスピードを意識させる練習方法を検討したい。

聴解会話：非常に真面目な学生ばかりで、出席率、宿題の提出率が高く、クラス全体で協力しながら日本語を学習しようとする態度がみられた。会話練習では、学生同士でできるだけ日本語を使って

コミュニケーションをとろうとしており意欲的に取り組んでいた。一方、聞き取りには苦手意識をもつ学生が多く、聴解練習には消極的だった。教師の反省点としても、毎回練習する文法項目が多いため、会話練習が中心となり、聴解練習に十分な時間が確保できなかったことがあげられる。今後は、会話と聴解練習との時間配分を工夫していきたい。

読解作文：クラスの雰囲気もよく熱心なクラスで、授業にも宿題にも意欲的に取り組んでいた。作文の授業は前半では文字の正確性と原稿用紙の使い方と段落構成を徹底し、後半では個別に目標設定をした。新出文法を使用する、漢字で書く、書く量を増やす、自分のことばで書く等各自がよく努力し、力をつけることができた。読解の授業は習熟度の差が出てしまった。授業ではピアで教え合う、教師が個別対応する等読解の苦手な学生をサポートできたが、宿題は読めないと途中で諦めてしまうことがあった。宿題とその出し方の工夫が今後の課題である。

総合スキル：ペア及びグループ活動を通した発話練習によって、導入項目の定着を図った。加えて、ワークシートへの書き込みから書く活動も取り入れ、綴りへの関心を喚起できたように思われる。その他、日本語母語話者に参加してもらい、実践的なやりとりを体験する活動も実施した。日本人学生が未習の表現で話すことがあっても、既習の日本語を懸命に用いてコミュニケーションを楽しんでいた。日本語を楽しめる活動をさらに取り入れていきたい。

2015 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名： <春学期> 藤田恵、御子神佳奈、東平福美

<秋学期> 藤田恵、保坂明香、東平福美

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

受講者数：春学期 9 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標

にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、使えるようになること。

また、習った文型や語彙の運用能力を高め、実際の日常生活でも適宜使えるようになること。

読解・作文：文法で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

J1S は週 3 日のコースであり、J1 で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J1S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

春学期のクラスは、ペアやグループでの活動には、積極的に参加する姿勢であったものの、新規の文法項目の習得には、やや消極的で、予復習をほとんどせずに出席する学生が多くなってしまった。また、授業中に母国語での会話が多く、日本語学習の場であるという自覚が足りない学生もいた。そのため、クラスで学習した項目を日常生活で活かそうとしている学生と、同じ進度で進めることが困難な場面が多かった。入門レベルのクラスでは、履修学生の学習の動機や目的に、差があることが多い。したがって、履修学生の日本語学習の意欲が高められるような内容となるように、授業運営をしていくことが必

要であると考え。

<秋学期>

今学期の J1S は、研究者 1 名を含む 6 名のクラスであった。年代の異なる受講者がいるクラスであったが、クラスの雰囲気はとてもよく、助け合いも多く行われていた。学生全員が日本語を学びたいという積極的な姿勢で授業に参加しており、予復習も欠かさず行っている様子が見られた。これにより、新規項目の導入を予定していた時間から、学生の質問に答える形で導入し、既有知識をもとに練習を行うことが可能であった。学生の学習意欲は、学期末まで継続され、期末テストではそれぞれが実力を発揮できたように思う。一方で、表記の面では問題が見られる学生がおり、学期末まであまり改善が見られなかった。また、カジュアルな表現を授業中に使用することが度々あった。今後の課題としては、学習進度や獲得している項目数にややばらつきのある S クラスの学生に合った授業方法の検討を挙げる。既習項目や定着がスムーズに進んだ場合には、導入のための時間を応用練習や発展練習に切り替えたり、読解や聴解練習に時間を増やしたり等、更なる運用力の向上を目指し、学生の進度に合わせた授業運営を行うようにしていきたい。

2015 年度 J2 授業記録

コースの概要

J2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。週 5 日、毎日スキル別（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法 1 で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：<春学期>神元愛美子（文法 1）、栗田奈美（文法 2）、山辺真理子（聴解会話）、
御子神佳奈（読解作文、総合スキル）

<秋学期>小森由里（文法 1）、栗田奈美（文法 2）、神元愛美子（聴解会話）、
保坂明香（読解作文）、西内沙恵（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）

履修者数：春学期 4 名、秋学期 11 名

使用教材：独自教材

目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法 1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で

使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法 2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

| 課 | 文法項目 |
|---|---|
| 1 | 1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger |
| 2 | 1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が／けど、ても |

| | |
|---|---|
| | 7. Mimetic words ⑥ Feelings |
| 3 | <ol style="list-style-type: none"> 1. V-方 How to V 2. Vながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、 possession、 own ～がある 4. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない／なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather |
| 4 | <ol style="list-style-type: none"> 1. When～: ～とき～ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・～のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せつかく ちゃんと 一応 |
| 5 | <ol style="list-style-type: none"> 1. Try doing something and see: ～てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature |
| 6 | <ol style="list-style-type: none"> 1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. Vてある 3. Intransitive Vている vs Transitive Vである 4. Mimetic words⑨ : Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける |
| 7 | <ol style="list-style-type: none"> 1. Vておく 2. ～が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favours、 some acts) ～てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい 5. ～が・けど (けれども) 6. Imitative words : Caught a Cold ? |
| 8 | <ol style="list-style-type: none"> 1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs Vにくい／Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける |

| | |
|----|---|
| 9 | 1. 伝聞 Hearsay、 Conveying information getting from another person、 media ~そうだ・ということだ・とのことだ 2. V てしまう 3. Review: V ている、V である、V してみる、V おく、V てしまう 4. [Question words] か / ~かどうか 5. V1 ないで V2 without doing V1、 do V2 6. Imitative words : Hitting、 Breaking 7. Compound Verbs ③V なおす・V かえす |
| 10 | 1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ~ことにする・~ことになる 3. Rules: ~ことにしている / Customs: ~ことになっている 4. 比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ~ようだ・ みたいだ 5. V-て いく・くる do V and come/go 6. Imitative words : Animals、 Birds |

授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。

毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。

また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を

正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解

度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行っ

た。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、

当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行っ

た。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シート II」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカシ

ョンを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文

法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、

隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロールプレイ、スピーチ等を行った。また、毎回授業のはじめに、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：学生の習熟度に差はあったが、お互い助け合い知識を身につけていくクラスだった。学生によっては動詞の活用等基本が定着していない学生もあり、1回の授業で新しい文法を複数導入し定着させることは非常に難しかった。いかに予習を徹底させるか、そしてどこまで復習し、新しい文法導入と練習にどれだけ時間を取るか、クラスに最適なタイムマネジメントが今後の課題である。

文法 2：通常、このクラスでは短作文を書く練習に大半の時間をあてるが、今学期は文法 1 の授業で学習項目を十分消化しきれなかった学習者や、勤怠状況が芳しくなく、1の授業を遅刻、欠席した学習者がいたりすることも多かったため、復習から始めることが常であった。全般的な学習者の習熟度を考慮すると、適切な進め方であったと思われる一方、正確に文を書く力をつけさせる時間が十分には取れなかったため、その点は改善していきたい。

聴解会話：聴解は、語彙不足のために聞き取りが困難になるという傾向が見られたが、コンテキストから意味を推測し、概要を聞き取る練習をした結果、一部の学生には効果が見られた。ただ、全体的には、語彙補強のための学習がさらに必要であろう。会話は、課ごとに学生が感じる学習項目数や難易度に違いがあり、文法項目や文型の定着を図る練習中心になる場合もあった。今後は、日常生活で、学習した文法項目が運用できるよう、より実践的な練習を増やしていきたい。

読解作文：作文クラスでも読解クラスでも、今学期は辞書を使わないということが徹底できたのがよかった。それにより、作文では学生のレベルに合わない難しすぎる言葉の使用が避けられ、自分の知っている知識を上手く使って作文が書けていた。読解でも、わからない言葉が出てくるたびに意味を調べるということをしなかったため、文の前後から言葉の意味を推測したり、全部が理解できなくても上手くポイントを探し出したりする練習ができたと思う。今後も辞書を使わないという指導を徹底させたい。また、今学期の学生は、作文を書くときに、自分の意見や考え、経験などを書きたいという意欲が高く、わからない表現があれば積極的に教師に質問をしていた。課題だから書くという姿勢ではなく、積極的に取り組む姿勢が見られ、個性的な作文に仕上がっていたのがよかった。

総合スキル：今学期はクラス内で学生間にレベル差があまりなく、全体で足並みを揃えて授業を行うことができた。Total Skills のクラスはその課のまとめのようなクラスで、応用も取り入れたアクティビティー等行うのが理想ではあるが、今学期はまずは文法の確認から始めなければならない状況で、そのためのメカニカルな問題を解いた後で、授業の最後に少し応用を取り入れるように

していた。それにより、うまくクラス運営はできていたように思う。しかし、クラスをなかなかリードしてくれる学生がいない状況で、教師が学生の学習意欲を高め、もっと高いレベルへと導くことができなかつたのが反省点である。

<秋学期>

文法 1：真面目なクラスで、習得しにくいと通常は問題になるオノマトペの学習にも積極的に取り組んでいた。一方で、コースが進むにつれ、後れを取る学生が出て、十分に理解できる学生と理解に時間がかかる学生とにクラスが分かれてしまった。学生間の文法力の差を最後まで埋めることができなかつたことが反省点である。今後は、文法項目の理解や定着に問題のある学生に対する指導方法を工夫する必要がある。

文法 2：11名と比較的サイズの大きいクラスであったが、学習者同士の仲もよく、和やかにクラス活動に参加していた。しかし、非常に熱心に学習に取り組む学習者と、専門の勉強に忙しく、なかなか日本語学習の時間が確保できない学習者とがおり、定着の度合いにかなり大きい差が出た。今後は、学習意欲を持ちながらも、専門と日本語学習との両立に苦勞している学習者への継続的なケアを検討したい。

聴解会話：聴解は各課の新出文法定着のための聴解練習と日本語能力試験レベルの難易度の高い聴解練習を行った。聴解の苦手な学生には大きなチャレンジになってしまったが、聴解のストラテジーを学び、意欲的に取り組む姿勢が見られた。会話は文法の定着練習とオリジナル会話作りを行った。学生によっては文法の理解が不十分で会話練習の時間が文法練習になってしまうことが度々あった。早く終わった学生は会話をさらに発展させる、もう一つダイアログを作成する等して自発的に練習できた。ただ残念なことに授業前後の学生同士の会話は英語で行っていた。常に日本語で話そうとする環境作りが課題である。

読解作文：(読解) 学生の日本語能力に差が大きく見られ、テキストの内容を理解できない学生が多くいた。そのために、語彙や文構成の説明に時間が取られ、通常の J2 読解クラスに比べるとクラス内で扱う内容に限られ、クラスで扱えなかつた部分を宿題とすることも多かつた。クラスでは質問が多く、授業に積極的に取り組んでいたが、スピードは常に課題であった。学生間のレベル差の対応として、問題の答えを書く形式でも内容確認を行ったが、口頭質問に答えるトレーニングもまだ必要だと考えられる。

(作文) 作文課題の提出が授業の1週間後であるため、提出が忘れられがちであった。そのため、課題を提出しない学生が多く、段階的に作文能力を伸ばすことが困難だった。特に、表記、活用の面での正確性を高めることができなかつたことは課題として残る。また、全体的な構成は意識していると思われるものの、文と文、段落と段落の接続が良くない作文も多く見られた。接続詞の意味を誤って理解していると思われるものもあつたため、接続詞を用いて文を繋げる練習や一段落だけを書く練習を行ってもよかつたかもしれない。授業では、全体を通して、作文の書き直しを一度しか行えなかつたが、初級レベルにおける正確性は重要であるため、書き直しの時間と

個別フィードバックの時間をもう少し持てると良いと思われる。

総合スキル:ペア・グループ活動を中心とした会話形式の発話練習によって、導入項目の定着を図った。

またワークシートの読み取りや記入から四技能全てが活用されるよう構成した。ある商品のプレゼンテーションや日本語母語話者に参加してもらう活動などを通して、導入項目だけでなく、実践的なやりとりの体験を目指した。学習項目の説明以外の場面で学生同士が英語で話すことがあったため、今後は日本語で話すことが楽しめるような活動を提示したい。

2015 年度 J2S 授業記録

コースの概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞平山紫帆、猪口綾奈、神元愛美子

＜秋学期＞平山紫帆、神元愛美子、佐々木藍子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、聴解会話、読解作文）

履修者数：春学期 2 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材（J2 と同じもの）

目標

接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1000 に増やすことを目指す。また、J2 で習う文法項目を理解すると同時に、実際のコミュニケーション場面を意識し、運用能力の向上をはかることも目指す。

授業の方法

語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。

具体的には、文法テキストの各課を 2 回のクラスで学習するペースで進めた。まず、1 回目のクラスでは、パターンプラクティスを中心とした口頭練習を行い、2 回目には聴解練習、会話練習、短文作成などを行った。

読解作文については、J2 と同様、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、適宜、授業では扱わなかったジャンルの読み物を宿題とした。

結果と課題

<春学期>

クラスの雰囲気は非常に落ち着いていて、学生同士が助け合う良い環境だった。自分が分からないポイントがあると、教師やクラスメートに聞くなど意欲的に学ぶ姿勢が見られたのは良かったと思う。

しかし、春学期の学生は、全体的に英語に頼る傾向が強かった。授業開始時から英語を使用し、授業中のアクティビティーでは日本語を使用するも、日本語の語彙力が足りないために活動が中断したり、ちょっとした会話でも英語を使用したりすることがあった。日本語で話そうとするクラスの雰囲気作りが課題である。

また、今学期は文法の初回の授業でその課の文法項目をすべて扱う方針を取ったが、1日で全てを導入しきれなかったこともあった。学習項目の難度も考慮に入れながら、時間配分を見直していきたいと考える。

<秋学期>

学期の始まりは出席率もよく、雰囲気も穏やかなクラスだった。学生は自宅で宿題と予習を行い、授業中も発言や質問が多く、集中して意欲的に学習できていた。

しかし、1限目の授業ということもあり、遅刻が見られることもあった。また、体調不良等で欠席が続き、その結果、授業についてくるのが困難になりその後も欠席を繰り返す学生がでてしまったのが残念である。

今後は、学生の体調や精神状態により一層目を配り、学習のサポートをするとともに、実際に日本人とコミュニケーションを行うアクティビティーを積極的に取り入れるなど、学生の学習意欲を維持させる工夫をしていきたい。

2015年度 J3 授業記録

コースの概要

J3は日本語の基礎を習得している者(1,000語程度の語彙及び初級前半の文法等)、日常生活の基本的活動(買い物や依頼など)が日本語のできる者を対象とした初級後半のコースである。週5日授業が展開され、スキル別(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)に学習を行う。

担当者名：<春学期>小森由里(文法)、長谷川孝子(聴解会話、作文)、保坂明香(読解)、

金庭久美子(総合スキル)

<秋学期>栗田奈美(文法)、長谷川孝子(聴解会話、作文)、嶋原耕一(読解)、

金庭久美子(総合スキル)

授業コマ数：週5コマ(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)

受講者数：春学期2名、秋学期9名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

| 課 | 文法項目 |
|---|--|
| 1 | Sentence patterns you should know for this level |
| 2 | 1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation |
| 3 | 1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は |

| | |
|----|--|
| 4 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う/V-ようにする 3. V-ようにしたができなかった、V-ようにしてもできない 4. Fraction 三分の一、五分之一 5. Review : 条件 Conditional |
| 5 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ~の多く 4. ~以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ~について、~にもとづいて 6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに |
| 6 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 受身 Passive Verbs 2. Direct Passive Sentences 直接受身 3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ~によって 6. Sentence ending particles 終助詞 |
| 7 | <ol style="list-style-type: none"> 1. Giving an Instruction ~なさい・ないでください・てはいけない 2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative : ~ように 言う/伝える/頼む 4. Review : Expression for Cause、 Reason 5. Compound Particle ③ ~のかわりに、~にくらべて |
| 8 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 使役 : Causative Sentences 2. Causative Verbs VS V-てもらう/くれる 3. ~のは~です (emphasizing) |
| 9 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう/くれる/あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらう/くれる/あげる 4. ~ことに one's feeling、 emotion 5. Noun のこと VS Noun |
| 10 | <ol style="list-style-type: none"> 1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう/くれる/あげる 使役-てもらう/くれる/あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions) |

授業の方法

J3は週5日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合タスクの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法：学生数が2名と小さいクラスだったが、2名とも非常に真面目で熱心だった。学生たちは丁寧にノートを取り、また理解力があつたので、1回のクラスで数多くの文法項目を導入する場合でも難なくクラスを運営することができた。2名のうち1名は、コース開始時に活用の不正確さなど既習文法が正確に身につけていない点が心配されたが、徐々に改善されコース後半には既習項目も新しい文法項目も確実に習得できるようになった。2名とも期末試験の結果が良く、導入した文法項目が概ね理解できてはいたが、「受身」「使役」に関しては十分に定着したとは認められなかった。今後は、「受身」「使役」が混乱なく理解させられるよう導入・定着の方法を工夫したい。

聴解会話：聴解はほとんど問題がなく、様々な教材を使いながら無理なく進めることができたと思う。会話では、会話の始め方、終わり方、リアクションなどを入れた実践的な会話練習を初めから取り入れた。練習を通し、学生は単なる暗記でなく状況に合わせて会話ができる力をつけていった。しかし、日本語が順調に定着した理由の一つとして、教室外での日本語使用の多さがあるようであった。今後、授業外で日本語をあまり使う機会がない学生を担当した場合、どのような工夫をするかが課題となるだろう。

読解：予習した読み物の内容確認を授業の主としたが、初見の読み物も読ませ速読練習を行なった。テキストの内容は、教科書の問い、教師からの口頭質問、記述式の質問等で確認し、また、内容だけでなく文型、助詞、語彙の使い方や意味も確認した。

学生は授業に対し大変熱心で、授業内外の課題に意欲的に取り組み、自己の学習に責任を持って学んでいたと思われる。そのため、授業開始時に比べると音読、黙読ともに読むスピードが非

常に速くなり、問題を解くスピードや問いに対する反応も速くなった。解答も正確性を増していたが、細部は理解できても要点を捉えることができない、書かれていることには答えられるが文脈から類推されることが読み取れないということがあり、期末試験でもその点が難しかったようである。今後は以上の点がより強化されるよう、文脈を捉える練習を多く取り入れていきたいと考える。また、目的に合った読み方ができるように、様々な読み方をクラス内活動として行なうことが肝要であると考え。

作文：意見交換を通じて、どう自分の意見をまとめるかを繰り返し練習しながら、毎回のフィードバックも丁寧に行った。1名は初めから作文を得意とする学生で大きな問題はなかったが、意見をまとめるのはテーマによっては難しかったようだ。もう1名は全く作文の経験がなく、適切な文型や語彙の選択、話し言葉と書き言葉の違い、構成とあらゆる面でサポートが必要な学生であった。2名とも課題に真剣に取り組み弱点を着実に克服していった結果、自分たちの力を飛躍的に伸ばすことができたと思う。次回も個人の違いに注目しながら、指導をしていきたい。

総合スキル：2名ということもあって、話す機会が十分に設けられた。その結果、1名ははじめは十分な発話ができずレベル差もあったが、後半にはもう1名と同様に話すことができるようになった。そして、ロールプレイやメールタスクなど、現実に近い状況を設定し、さまざまな活動を通常より多く行うことができた。また、複数にわたる発表においてもしっかりと準備し、発表に対しお互いにコメントを言うなどして成長が見られた。性格的な差はあるものの、お互いに協力し合いよきクラスメートだったと思われる。今後の課題としては、さらに活動の種類や数を事前に準備し、人数やレベルに応じて対応していけるようにしたい。

<秋学期>

文法：基本的な学習習慣が身につけている学習者と、そうでない学習者との差が大きいクラスであった。

しっかり授業準備をし、わからないところは教師に確認し、自分のペースで日本語学習に取り組んでいた学習者は大きく伸びた。一方で、勤怠状況や宿題の提出状況にかなり問題のある学習者もあり、度重なる教師の指導もなかなか届かなかった。そうした学習者の存在がクラスの雰囲気にも影響を与えることもあったため、そのような場合にも、他の学習者の学習意欲を保ったまま、クラス活動を円滑に進めていく工夫を検討したい。

聴解会話：真面目に出席をしている学生は聴解会話とも順調に力を付けることができた。一方で、遅刻欠席が多い学生はなかなか力を付けられなかった。宿題や語彙クイズの勉強をしていない学生、実生活で日本語に触れる機会が少ない学生は、聴解ではかなり困難を伴った。それに対し会話では、自分のレベルや興味に合わせた会話を作りながら練習をすることができた。想像力が豊かな学生達だったので、楽しんで参加をしていたと思う。今後は、欠席や遅刻が多い学生の指導をどうするかが、大きな課題となる。

読解：文型・語彙の理解度も高く、文章全体の意味を捉えるのに優れている学生がいる一方で、知らない文型・語彙があると止まってしまう学生もいた。前者の学生には、もう少し難しい文章に挑戦

させることができればよかったと思う。今後の課題にしたい。後者の学生には、意味を予測することを意識させながら、練習に取り組みさせていきたい。

作文：他の科目と同じように、まず、遅刻欠席が多い学生が問題となった。しかし、少しずつ自分の作文の間違いが減ってきたことを「うれしい」と語り始めたころから、状況が変わっていったと思う。遅刻が減り宿題を提出するようになって、徐々にできなかったことができるようになった結果、授業に参加した学生は全員、初めに書いたものより格段に良い作文を仕上げることができた。今後も、各学生のレベルや状況に合わせた指導を心がけていきたい。また、遅刻欠席が多い学生にも注意して指導をしていこうと思う。

総合スキル：ロールプレイやメールタスクなど現実に近い状況を設定した活動を行った。人数は9名であったがその中にはさまざまなタイプの学生がいた。動機付けの高い学生、順調に伸びている学生にとって、いろいろな活動が用意できたのはよかったと思われる。しかしながらそうではない学生とペアにすると、十分に課題をこなせなかったり、時間がかかったりして、全体にバランスよく指導することが非常に難しかった。発表ではそれぞれの興味を持っていることについて多く語る事ができたが、十分に準備できなかった者がいたのは少し残念である。全員が同じ目標に向かって取り組めるような工夫を考えていきたい。

2015 年度 J3S 授業記録

コース概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名： <春学期>藤田恵、小森由里、嶋原耕一

<秋学期>小森由里、高嶋幸太、嶋原耕一

授業コマ数：週 3 コマ（文法、運用練習、読解・作文）

受講者数：春学期 2 名、秋学期 8 名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中

で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

J3S は週 3 日のコースであり、J3 で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J3S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、4 コマで 1 課の場合は (9 課以降)、文法の時間を 2 コマに増やした。

1. 文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを中心とした練習を行った。
2. 運用練習：文法で扱った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。
3. 読解・作文：読解では、様々な長さやジャンルの文章を読み、内容理解のほか、自分の意見を述べ合う練習を行った。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。また、2 課に 1 度のペースで漢字クイズを実施した (希望制)。

結果と課題

<春学期>

春学期は、履修者 2 名と少人数であったが、共に過ごす時間を多くとって、刺激し合い、互いの得意な面を伸ばし、苦手な点を補い合うという姿勢で日本語学習に取り組んでいた。2 名ともさまざまな形で日本語を学習しようと試みており、スピーチコンテストへの出場や、日本人学生との交流を積極的に行い、さらに電車内やテレビからも漢字や日本語を学ぶようにしている様子が見られた。授業にも積極的に参加しており、最後まで学習意欲が落ちずに臨んでいた。一方で、読解と作文の宿題の提出状況はよかったとは言えず、未提出のままであることも多かった。このような学生に対しては、授業への参加、自律学習、さらに課題の提出を行うことで、より効果的に日本語能力が向上することを自覚させる必要があると考える。よって、これらを実践させるための指導方法を考えることを今後の課題とした

い。

<秋学期>

今学期の J3S は 8 名のクラスで、学生は積極的に質問したり、ロールプレイ等のクラス活動に意欲的に参加したりする姿勢が見られ、さらに教師からの問いかけにもよく応答し、雰囲気よく授業を進めることができた。しかし、学期が進むにつれ、半数の学生が、クイズの準備や授業の予復習をきちんとしてくるのに対し、残りの半数が、準備なく授業に臨むようになり、習熟度や運用力に大きく差が開くようになってしまった。予復習の大切さや学習方法について、より強く伝える必要があったように思われる。その他に、教員側の反省点として、新規項目の導入や練習に時間がかかり、聴解練習に時間がさけなかったことが挙げられる。今後は、各課の項目数、授業の進め方等、コース全体の進め方を再検討し、学生の日本語力がより向上するものとなるようにしていきたい。

2015 年度 J4 授業記録

コースの概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の 4 クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名：<春学期> 小森由里、<秋学期> 栗田奈美

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 8 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

初級で学習した文法事項、文型を復習しながら、それらが正しく、流暢に使えるようになることを目指す。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目標とする。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

| 課 | Part1 | Part2 |
|---|--------------------------|------------|
| 1 | ・～は～つつある ・～は～（で／に）さえ～ | ・受身 ・自発 |

| | | |
|----------|---|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・Vさえすれば/Aさえあ(い)れば/Nさえ～ば～ ・～とすれば、～(こと)になる ・(たとえ/仮に/もし)～としても～ | |
| 2 | <ul style="list-style-type: none"> ・～にもまして～ ・(たとえ/仮に)～にしても～ ・いくら～にしても～ | <ul style="list-style-type: none"> ・使役 ・使役受身 |
| 3 | <ul style="list-style-type: none"> ・(Vた/A/Nの)まま、～ ・Vつつ～ ・～はVなり～ | <ul style="list-style-type: none"> ・尊敬語 |
| 4 | <ul style="list-style-type: none"> ・Vことにしている/Vことになっている ・～は～ことから～ ・～は～こととなると～ ・～は～ことなく～ | <ul style="list-style-type: none"> ・謙讓語 |
| 5 | <ul style="list-style-type: none"> ・～して、(考えさ/思い知ら)せられた ・(無生物主語)が～を～させる ・～は～だけではなく、～の問題だ | <ul style="list-style-type: none"> ・～ようにV ・～ようにする ・～ようになっている |
| 6 | <ul style="list-style-type: none"> ・～からといって、～が必ずしも～わけではない ・～ずに～ ・～のか(どうか)については～ | <ul style="list-style-type: none"> ・Vたばかり/Vばかり/Vでばかりいる ・Nばかり/Aばかり ・Numberばかり |
| 7 (1) | <ul style="list-style-type: none"> ・～原因は～ことにある/～のは～からだ ・～と～では～が異なるので～ ・～や～は～のだから、たとえ～でも～ことはない ～や～は～のだから、もし～たら～ | <ul style="list-style-type: none"> ・～が限られている/～を～に限っている ・限りがある/ない ・V(ない)限り/Nの限り ・V(た)限りでは/Nの限りでは |
| 7 (2) | <ul style="list-style-type: none"> ・～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ～は～から、～のに、～と、どうしても～てしま ・(無生物主語)が～に～を生じさせる ・～たり～たりするだけでは～ ・～は～が～であることを利用して～ | <ul style="list-style-type: none"> ・Nに限って(はずがない) ・Nに限り ・V(ない)/Nに限る ・Nに限らず |
| 8 | <ul style="list-style-type: none"> ・～時に、～と/ても～ ・私は～て、～ことに気が付いた ・～(こと)は～(のだ)から、もし～なら～ | <ul style="list-style-type: none"> ・Vよう(か) ・Vようと思う/Vようとする ・Vようがない ・Vようとしている ・Vようとししない |
| 9 | <ul style="list-style-type: none"> ・～すると、～は～が～は～ ・～する時に重要なことは、～か(どうか)という | <ul style="list-style-type: none"> ・N (clause) というN ・NというN/Number とい |

| | | |
|--|--|-------------|
| | ことではなく（よりは）、～か（どうか）という こと（点）である ・～ものとして（しまう） | う Number |
|--|--|-------------|

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進行した。各課は、既習文法を複数組み合わせた比較的長い文型を扱う Part 1 と、初級文法を機能別、形式別に取り上げる Part 2 から構成されている。Part 1 も Part 2 も、ターゲットとなる文型・文法項目を説明後、文を完成させる練習などを通して、文型・文法項目が理解でき運用できるか確認した。また、各課の Comprehension check と学習した文型・文法を用いた短文作成を毎回宿題にした。コース後半は、教科書の文法項目に加え、学生たちが苦手とする「敬語」「使役」「受身」「使役受身」を復習する時間も設けた。

<秋学期>

毎回、事前に教材を配布し、未習語彙を調べてくることを課題とした。授業では、初級文法を機能・形式別に扱った Part2 を中心に練習を行い、文型を扱う Part1 からは学習者の習熟度に合ったものを抜粋して練習した。教材内の Comprehension check ならびに短文作成を毎回の宿題として定着を確認し、返却時には個別フィードバックを行った。

結果と課題

<春学期>

全体的に、出席率・宿題の提出率のよいクラスだった。授業中も真面目に取り組んではいたが、質問が少ないことが気になった。新しい文型の導入時にも宿題の返却時にも、学生からの反応がほとんどなく、教師は、学生がどの程度まで理解できているのか把握するのが容易ではなかった。コース後半には、中間テストで誤りが多かった「敬語」「使役」「受身」「使役受身」を復習したため、期末テストでは間違いが少なくなったものの、問題なく運用できるレベルにまで確実に身に着けさせることはできなかった。教科書で扱う文型の数が多いため、学生たちの理解が追いついていないように思われる。学生が導入された文型・文法項目が十分に理解でき運用できるように、主要学習項目を絞って授業を進めていく必要があると考えられる。

<秋学期>

3名の受講生のうち2名は、初級文法のあやふやな部分を確認する作業に加えて、中級レベルの新しい語彙を含む例文を理解していくことを、やや困難に感じていたようである。学習意欲を持ちながら、十分には消化しきれずに学期末を迎えてしまった点は残念である。

今年度から文法項目の提示順を変え、初級文法の復習、確認がより徹底できる流れとし、ある程度の成果が見られた。しかしながら、授業で扱う文型の取捨選択には、学習者の習熟度を考慮する等、さらに検討が必要であり、今後の課題である。

<J4 読解>

担当者名：<春学期> 栗田奈美、<秋学期>保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 5 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

<春学期>

毎回、事前に使用教材を配布し、各自テキストを読み、わからない語彙を調べてリストにまとめてくことを課題とした。授業では、クラス全体で内容に関する導入をした上で、ペアワークで音読をし、さらに全体で詳細を確認しながら読み解いていく方法をとった。最後に内容に関する意見交換を行い、語彙定着のための活動を行った。また、新出語彙を含む短作文を宿題とし、翌週、語彙クイズを実施した。

<秋学期>

プレレッスンを含む全 12 レッソンを教科書に沿って進めた。教科書は 1 週間に 1 課のペースで進め、予習として、テキストの読解と内容質問の解答、短文作成を課し、文意が理解できない部分がある場合は、線を引くよう指示した。また、クラスで読解授業を行った翌週に語彙クイズを実施した。

授業は予習型であったため、学生の質問に答えることから始め、教師からの口頭質問やペア活動、書いて答える問題等で内容の確認をし、理解を深められるよう努めた。テキストの音読は毎回させた。

また、語彙習得も J4 読解クラスの課題の 1 つであったため、クロスリーディングを行い、授業の最後にその課の語彙を用いて、当該のテーマについて意見を述べる練習を行った。

結果と課題

<春学期>

教材に使われている語彙の難易度が今学期の履修者にはやや高かったようで、事前課題である語彙リスト作成では、語彙が用紙に書ききれなくなることもあった。そのため、語彙の定着はなかなか難しかったが、学習者自身は嫌がることなく課題に臨んでおり、学期後半には学習のペースができ、楽しむ余裕が出てきたようである。

内容把握に際しては、比喩的表現が多用されているもの等、やや理解が困難と思われるものについては視覚資料を提示し、理解が進むよう促した。その結果、特定の表現や語彙に引っ掛かることなく、読解文全体の理解に集中することができたようである。

今学期は従来の期末テストを改定し、アチーブメントテストの色合いを強めたテストを実施した。概ね、それぞれの学習者の習熟度や学習状況を反映した結果となったが、難易度等の課題も残っているため、引き続き検討していきたい。

<秋学期>

学生数4名の小規模クラスで大人しい学生が多く、自ら発言することはあまりなかった。クラス活動に対しても消極的であったが、教師からの質問には適切に答えようと努めていた。

テキストの難易度は、課によって異なるが、概ね学生のレベルに合っていたと思う。予習の段階で、細部までの理解に至らなくても、大意を把握していたため、クラスでは段落ごとに読み進め、細かい点まで理解できるように説明し、文型や語彙などにも注意させることもあった。学生は教師の説明やパワーポイントの情報等をよくメモしていた。

期末テストの結果を振り返ると、クラスで読んだ読み物については一通り理解できたようであるが、初見の読み物の成績が芳しくなかった。授業には未習語彙を推測しながら読む練習も取り入れたが、十分ではなかったのかもしれない。推測をしながら読むトレーニングが今後必要だと考える。

学生よりテキストの漢字語彙に振ってあるルビが見にくいとの指摘を受けた。

<J4 聴解・会話>

担当者名： <春学期>御子神佳奈、<秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期5名、秋学期4名

使用教材：『新・毎日の聞きとり 50日（上）（下）』凡人社、『新装版 なめらか日本語会話』アルク『ロールプレイで学ぶ 中級から上級への日本語会話』アルク

目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

聴解、会話、スピーチの3部構成で授業を行った。聴解は、その日の聴解テーマに関連する事柄について学生と教師間で話し合った後に、CDを聴いて問題を解き、最後はスクリプトを見ながらもう一度聞かせ、内容や語彙の確認を行った。会話もテーマに関連する事柄について全体で話し合った後に、ペ

アで会話練習を行い、クラスで発表させた。スピーチはスピーチの仕方やテーマをクラスで導入後、各自事前課題としてスピーチ準備、クラスで発表、Q&Aという流れで行った。発表後に原稿を提出させ、原稿チェックも行った。

<秋学期>

本授業は主に3つの学習項目で構成されている。第一に、スピーチである。ここではショートスピーチやプレゼンテーションの準備・発表を行った。第二に、会話である。会話では、テキストを用いて、ロールプレイを行いつつ表現を学習した。最後に、聴解である。テキストの聴解問題を解いた後に、シャドーイング練習なども行った。

結果と課題

<春学期>

聴解は、苦手な学生が多かったように思う。選択式の問題は比較的できていたが、記述式の問題は苦戦していた。大まかな内容理解はできていても、細部まで聞き取ることや、聞いたことを書き表すことは難しかったようである。学生の語彙量が少なかったのも大きく影響していたように思う。会話やスピーチは、なかなか話し方の癖が抜けない学生が多かった。例えば、普段からカジュアルスピーチに慣れてしまっている学生は、スピーチでもカジュアルスピーチの出現が多く、「あー」などのフィラーを使う学生も、やはりその出現回数が多かった。しかし、毎回注意することで学生も意識するようになり、徐々に修正されていったように思う。また、今学期は学生間にレベル差が顕著に見られ、遅れ気味の学生はクラスでの積極的な発言が見られなかった。このクラスでは毎回当日に教材プリントを渡すことになっているが、今後はこのような学生がいる場合には、前もって教材を渡して予習をさせておくなど、もう少し臨機応変にそれぞれの学生に対応できるようにしたい。

<秋学期>

スピーチでは、短いものから長いものまで多岐にわたって練習を行うことができた。ただ自身の担当回でも無断欠席する学生がいたため、今後は意識化を図っていく必要があるであろう。会話では、学生はロールプレイに活発に取り組んでいた。特に、日常生活でのトピックの場合は、盛んにインターアクションを行っていた。聴解では、時間が多くある場合は、きちんと問題を行えるのだが、先の2つの項目で時間を取ってしまい、残り時間が少ない場合は駆け足気味になってしまうこともあった。全体的に3つの項目の時間配分が重要になると考えられる。

<J4 作文>

担当者名： <春学期>保坂明香、<秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期5名、秋学期4名

使用教材：独自教材

目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

<春学期>

授業は教科書に沿って進めた。新出表現についてその意味や活用、共起しやすい語彙などを説明し導入を行ったうえで、口頭ドリルやペア練習、文型を書く練習等で運用練習をさせ、表現の定着を図った。授業の前半はこのように表現の習得を目指し、その後でパラグラフィティングを行った。段落を書く前には、まずその段落がどのように構成されているか説明し、1つの文が段落の中でどのような役割を果たしているか考えさせた。可能な限り、授業内で段落を書き終わるように指導したが、課によっては時間が足りず宿題とすることもあった。学生が作成した作文は個別にフィードバックを与えた。また、文型理解の確認と定着のためにクイズを実施した。

<秋学期>

授業は、前半はテキストを用いて、作文を行う上で重要な表現の確認および例文の作成を行っていった。後半はその表現を用いてあるトピックに関して自身の意見を述べていってもらった。本学期の場合、少人数ということもあり、授業時間内で作文の執筆が終わり、クラスメート間で共有するところまで行った。

| | |
|------------|--|
| pre-Lesson | 初級文型確認の短文完成問題。 |
| Lesson 1 | ① <u>留学とは</u> 、一定期間外国へ行き、その国の学校などで <u>学ぶことだ</u> 。 ②私が会社を辞めた <u>こと</u> で、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人を <u>人間的に成長させる</u> 。 |
| Lesson 2 | ①最近、日本の大学生を見ていて <u>気づいたことがある</u> 。 ②日本の経済が悪くなった <u>のは</u> 、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」 <u>という考え方が</u> 、子供を非行に <u>走らせたのだろう</u> 。 |
| Lesson 3 | ①私は、医者という職業を目指している人は、その目的の <u>点から2つのグループに分類される</u> と思う。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれている <u>ため</u> 、服用すると <u>眠くなる</u> 。 ③留学という貴重な <u>経験をその後の人生に役立てたい</u> と思う。 |
| Lesson 4 | ①日本とタイとは <u>どちらも米を食べる国だが</u> 、日本とタイとでは、その食べ方や食べている種類が <u>大変に異なっている</u> 。 |

| | |
|-----------|--|
| | <p>②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において対照的である。</p> <p>③東京の生活は便利だがストレスが多い。一方、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。</p> |
| Lesson 5 | <p>①日本人は、間違っ<u>た</u>平等主義の方向に進もうとしている。</p> <p>②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった経済的な問題に取り組んでいる。</p> <p>③自分の能力や適性がいかせるなら、転職してもいいと思う。</p> |
| Lesson 6 | <p>①運動をせずに、食べてばかりいると、太りますよ。</p> <p>②もしあなたが、自分さえよければいいと考えているとするなら、それはとてもいけないことだ。</p> <p>③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かうことこそ、弁護士の役割である。</p> |
| Lesson 7 | <p>①速さという点では、飛行機は船とは比べものにならない。</p> <p>②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。</p> <p>③現代人の生活にとって、クレジットカードは必要不可欠なものである。</p> |
| Lesson 8 | <p>①その会社は給料がいい。しかも、残業がほとんどない。そのため、その会社で働きたい若者は多い。</p> <p>②私は、親が子どもをしつけるのは当然だと思う。</p> <p>③両親や先生とよく相談した上で、日本への留学を決めた。</p> |
| Lesson 9 | 「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」 |
| Lesson 10 | <p>①私は、安定した給料よりも、むしろ自由な時間が多いほうがいい。</p> <p>②いつもは節約のために自炊しているが、時には外でおいしいものを食べることもある。</p> <p>③一度約束した以上、守らなければならない。</p> |
| Lesson 11 | <p>①そのニュースは、韓国をはじめ、アメリカやヨーロッパ諸国など、世界中に伝えられた。</p> <p>②お金がなくても、あなたさえいれば、私は幸せだ。</p> <p>③日本のことわざ</p> |

結果と課題

<春学期>

全体的に授業に意欲的に臨んでおり、授業内外の課題に熱心に取り組んでいたが、授業後半から欠席、

遅刻が増える学生が 1 名いた。

学生の日本語学習歴が様々であったため、日本語の文法に対する知識、語彙力、運用力も大きく異なりを見せていた。2 名の学生は基礎力があつたため、新出文型や段落の構成をよく理解し、学期後半には正確性を高めていた。一方で、活用、助詞など基礎的な初級文型の理解がされていない学生には、学期を通して初級文法の指導をしたが、なかなか改善が見られなかった。また、別の学生は全体的に日本語の運用力が弱く、授業内活動や課題の指示などが理解できないことがあつた。文型を習得するまでの時間も他の学生と比べると時間を要し、段落の構成以前に文型を理解することが難しかったようである。

教科書にある文は比較的語彙の難度が高く、学生が新出の文型を理解するうえで語彙の難しさが障害になることがあつたようである。教科書の文を理解することを目的としながらも、導入の段階では学生が知っている語彙を使用し、理解に繋がるよう、より多くの例文を示すべきだったと考える。

期末テストの問題Ⅱには、接続詞を補完する問題の中に学生にとって未習の語彙が多く含まれていた。今学期は語彙リストを作り試験を実施したが、既知の語彙でなければ十分に文意を理解することが困難で適当な接続詞を入れるのも難しいため、今後改訂を加えてもよいかもしれない。

<秋学期>

最初の方に比べ、作文の内容・分量いずれも豊かになっていった。これは毎週書き続けるという習慣が書くことへの抵抗を低減させていったためだと考えられる。ただ、自身の言いたいことをそのまま母語から転用して述べようとする場合は、不自然な日本語になってしまうことがあつたので、適宜教師が既習項目で言い換え、フィードバックをした。今後の課題としては、既に学んだ語彙と表現を用いて、いかに自身の意見を伝えられるかという点だと思われる。

2015 年度 「J5～J7 文法・文型」授業記録

概要

J5～J7 の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週 1 回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2 レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2、N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7 のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名：<春・秋学期>平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 15 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

| 課 | 助詞相当語 | 文型 |
|----|--|-----------------------|
| 1 | ～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて | こ・そ・あ・ど Expressions |
| 2 | ～に関して、～を問わず、～に応じて | と／ば／たら／なら Expressions |
| 3 | ～に反して、～に対して、～において | こと Expression1 |
| 4 | ～に従って、～に沿って | こと Expression2 |
| 5 | ～に際して、～につれて | もの Expression1 |
| 6 | ～にとって、～に先立って | もの Expression2 |
| 7 | ～に渡って、～に代わって | Time Expressions |
| 8 | ～にあたって、～に伴って | わけ Expressions |
| 9 | Adverbs used in daily conversations せめて、さすが (に)、やはり (やっぱり)、どうせ、つくづく | |
| 10 | 「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方 | |

授業の方法

毎週 1 課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、絵や写真をふんだんに取り入れ、文型の意味や使い方をわかり

やすく示すことを心がけた。また、練習も単調にならないよう、ペアワークなどを適宜行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

結果と課題

<春学期>

今学期も熱心な学生が多く、クラスの雰囲気はとても良かった。今学期は、分かりやすい授業を特に心掛け、毎回の授業終了時にコメントシートを書いてもらったが、学生の授業評価は概ね高評価であった。

一方で、課題も見られた。文型を導入する際は、実際に使えるようになるために、「意味—形—機能」の3点をセットにして提示するように注意して進めたつもりであったが、活用等の知識が十分に定着しない学生も見られた。J5は扱う項目が多いが、学生が理解しやすく、かつ実際の場面で使えるようにするためにはどうすればいいのか、さらに模索し、授業を改善していきたい。

<秋学期>

明るく前向きな学生ばかりで、学生同士の仲が大変良かったため、常にリラックスした、一体感のある雰囲気の中で授業を行うことができた。J5の文法は毎回の学習項目が多いため、毎回の予習が欠かせないが、今学期は全員がきちんと予習を行ってから授業に臨んでいたため、授業中はポイントを絞って説明することができた。そのため、練習の時間を確保することができ、これまでよりも練習にバリエーションをもたせることができたのは定着を図る上でも良かったと考えている。今後も、学習した文法項目を実際の場面で使えるようにするために、授業の進め方や練習を工夫していきたい。

<J6 文法・文型>

担当者名： <春学期>神元愛美子、<秋学期>小森由里

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期17名、秋学期17名

使用教材：独自教材

目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型の理解を目的とする。

文型リスト

J6で扱った文法項目は以下の通りである。

| 課 | 文型 |
|---|--|
| 1 | 「理由の表現」 ために、ばかりに、からといって/だからといって、あまり |

| | |
|---|---|
| | <p>「目的の表現」 V さんがため (に)、V-Volitional と</p> |
| 2 | <p>「感情・心情・評価の文型」 ～てしようがない／～てしかたがない／～てならない、～てたまらない、～限りだ、～ といたらない (～ったらない)、～ずにはいられない／～ないではいられない、～ず にはおかない／～ないではおかない、～てやまない、～極まる／～極まりない／～の極み だ、～の至りだ</p> <p>「評価の文型」 ～だけに、～だけあって、～にしては／それにしては、～のわりに (は)／～わりに (は) ／そのわりに (は)</p> |
| 3 | <p>「不快を表す文型」 ～だらけ、～まみれ、～がましい、～たらしい (～ったらしい)、～にもほどがある、～ にたえない</p> <p>「非難・軽蔑を表す文型」 ～ぶる、～じみた、～っぽい、～くせに (くせして)、～なんか／～なんて、～ごとき、 ～ときたら、～にひきかえ／それにひきかえ、じゃあるまいし (ではあるまいし)、Noun +に (として) あるまじき+Noun</p> |
| 4 | <p>「判断を表す文型」 ～までもない／までのこともない、～には及ばない、～にはあたらない、～ほどのこと (もの) ではない、～かねる、～っこない、～にすぎない、～ないことはない、～まで だ／までのことだ、～如何だ／～如何で・によって V、～次第だ／～次第で V、</p> <p>「理性的評価を表す文型」 ～に足る／値する、～に恥じない</p> |
| 5 | <p>「推察・推量を表す文型」 ～にほかならない／～にほかならぬ+Noun (人)、～にかたくない、～がたい、～か ねない、～恐れがある、～ないとも限らない、～まい、～と見える、～げ</p> |
| 6 | <p>「人や物の状態・性質を表す文型」 ～のきらいがある、～がちだ、～気味だ、～つつある、～たてだ、～かけだ、～っぱな し、～まま、A かわら B、A がてら B、A かがた B、A ついでに B</p> |
| 7 | <p>「人や物の状態・性質を表す文型 2」 ～向きな、～向けな、～ごろ、～盛り、～めく、～つく、～たつ、～放題、～なり、～ さ、～み</p> |
| 8 | <p>「義務・当然を表す文型」 ～べきだ、～べきだった／～べきではなかった、～べく～、～べくして～、～てしかる</p> |

| | |
|----|---|
| | べきだ、～（ない）わけにはいかない、～しかない、～（より）ほか（は）ない／～（より）ほか～ない、～ざるをえない、～ないではすまない／～ずにはすまない／～なしにはすまない～を余儀なくされる／余儀なくさせる |
| 9 | 「その他の文型 1」 ～かいがある／～がい、～きつての、～ぐるみ、～こそ、～からこそ／～ばこそ ～んです、～てこそ、～こそすれ、～ずじまい、～たりとも～ない／～な（禁止）、～ふりをする、～たことにする／～たことになる |
| 10 | 「その他の文型 2」 ～だに～ない、A くらいならむしろ B 方がいい／方がましだ／～なさい、A（という）よりむしろ B、せめて～だけでも（いいから）～、～つ～つ、～つける、～こなす、～慣れる、～抜く、～通す、～切る、～尽くす、～終わる、～終わる、～やむ、～始める、～出す |

授業の方法

<春学期>

授業はテキストに沿って、基本 1 週間に 1 課のペースで進めた。授業では例文を挙げながら文型の導入をした後、必要に応じて短文作成や簡単な文法確認問題を行った。その後、テキストにある Comprehension check の答え合わせをした。毎回、学習した文型・文法を用いた短文作成と次週の予習と Comprehension check を宿題にした。

<秋学期>

授業は 1 回に 1 課のペースで進行した。各課は、機能別に既習文法・文型の発展を扱う 1 部と、新しい文法・文型を導入する 2 部から構成されている。毎回多数の文法項目・文型を扱うので、テキスト以外に、形式・意味・用法・運用上の注意点をまとめたハンドアウトを配布した。ハンドアウトを用いて文型の意味や用法を説明し、テキストの例文を通して文型の運用方法の理解を深め、類似する文型との違いを確認させた。毎回、テキストの練習問題と導入した文型・表現を用いた短文作成を宿題にした。テキストの練習問題は、学生同士で答えをチェックさせた上で、クラス全体で答え合わせをした。また短文作成の宿題は個別にフィードバックし、誤りの多い項目についてはクラス全体で補足説明をし、その用法を再確認した。

結果と課題

<春学期>

授業では意味や使い方の似通った類似表現の使い分けがうまくできない学生がいたため、例文を多く提示し、練習問題を行った。ポイントを絞った解説と練習は学生の助けになったが、扱う文法が多く、全てに対応はできなかった。今学期は語彙力、漢字力が弱い学生も見られ、語彙の確認に時間を取られ

てしまい、練習が減ったことも反省点である。

宿題の短文作成ではチャレンジがみられた。しかし、学生によっては定着していない文法もあるため全文を書かせるより前文を提示し、後半を書かせる等も工夫も必要だと考えた。

<秋学期>

真面目なクラスで、総じて出席率も宿題の提出率も高かった。各課で取り扱う文型、文法項目はかなりの数で、類似表現の使い分けを習得するのは容易ではないと思われるが、学生たちは熱心に取り組んでいた。テキストの例文には、ターゲットの文法項目だけではなく、身に付けてもらいたい表現や語彙が数多く含まれているが、文法項目の導入に時間がとられ、表現や語彙までクラスで扱うことができなかつたことが反省点である。今後は、文型だけではなく、語彙、表現、諺などにも説明を加えることができるよう時間配分を工夫したい。

<J7 文法・文型>

担当者名： <春・秋学期>長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 14 名、秋学期 10 名

使用教材：独自教材

目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

| 課 | 文型 |
|---|--|
| 1 | ①いつも <u>ながら</u> 鮮やかなお手並みですね。 ②みんなに「へたくそ」と馬鹿に <u>されながら</u> も彼は頑張り続けた。 ③この肉は生の <u>まま</u> で食べられます。 ④彼女は <u>いくつになっても</u> 美しい <u>ままだ</u> 。 ⑤命令される <u>まま</u> に動く。 ⑥悪いと知り <u>つつ</u> 、つい落とし物の財布を自分のポケットにしまい込んだ。 ⑦地球人口は年々増え <u>つつある</u> 。 |
| 2 | 意向形 ①彼に相談し <u>ようかすまいか</u> 、さてどうしたものだろう。 ②何が <u>あるうと</u> 、決して驚いてはいけないよ。 |

| | |
|---|---|
| | <p>③行こうが行くまいが、参加費はもらうよ。</p> <p>語彙とニュアンスの似ている表現</p> <p>迂闊な、機嫌、体裁</p> |
| 3 | <p>「ところ」</p> <p>①喉が痛くて、食事<u>どころ</u>か水を飲むのも辛いんだ。</p> <p>②あっ、危ない！危うく車にひかれる<u>ところ</u>だった。</p> <p>③私から連絡を取ろうと思っている<u>ところに</u>、ちょうど当人から電話がかかってきた。</p> <p>④今朝のニュースで聞いた<u>ところ</u>によると、内閣は総辞職するとのことでした。</p> <p>⑤敬語が使える<u>ところ</u>まで来れば、もう日本語も上級だ。</p> <p>語彙とニュアンスの似ている表現</p> <p>苦情／不平不満／文句／クレーム／愚痴</p> |
| 4 | <p>「まで」</p> <p>①喉元<u>まで</u>出かかった言葉だったが、思いとどまった。</p> <p>②家に帰って<u>まで</u>、会社の仕事はしないでほしいわ。</p> <p>③あなたがやれと言ったから、やった<u>までの</u>ことです。</p> <p>④これは簡単な漢字だから、辞書を引く<u>までも</u>ない。</p> <p>とりたての助詞</p> <p>こそ、も、とか</p> |
| 5 | <p>「時」を表す文型 1</p> <p>①歳を取ると物覚えが悪くなり、聞く<u>そば</u>から忘れてしまう。</p> <p>②ベルが鳴る<u>が早い</u>か、彼は教室を飛び出した。</p> <p>③彼女は私の顔を見る<u>や否や</u>、涙を浮かべて駆け寄った。</p> <p>似ている意味の使い分け</p> <p>空き／空（から）、あたかも／いかにも</p> <p>色々な意味を持つ動詞</p> |
| 6 | <p>「時」を表す文型 2</p> <p>①ホームに着く<u>か着かないかのうちに</u>、発車のベルが鳴り出した。</p> <p>②その手紙を読む<u>なり</u>彼は顔面蒼白になった。</p> <p>③彼女は私の顔を見た<u>とたん</u>に泣き出した。</p> <p>④転んだ<u>弾みに</u>頭を壁にぶつけて、たんこぶができた。</p> <p>まとまりで覚えたほうが良い表現</p> <p>①給料が安くても、この会社で働く<u>よりほかに</u>、家族を養う<u>方法</u>はない。</p> <p>②ずっとたばこを吸い続けている<u>と</u>、周りの人に迷惑をかける<u>ばかり</u>でなく、ひいて</p> |

| | |
|---|--|
| | <p>は死につながりますよ。</p> <p>③心を込めて謝ったので、それほど叱られないで済んだ。</p> <p>④こんなに天気が悪かったら、誰だって外に出たくなくなる。</p> <p>⑤こんなに古い傘だが、どんなぼろぼろの傘でもないよりはずっとましだ。</p> <p>⑥授業中にあくびをするのは、やる気のなさの現れだと解釈できる。</p> |
| 7 | <p>「時」を表す文型 3</p> <p>①調査結果がわかり次第、そちらにご報告いたします。</p> <p>②この写真を眺める度に、昔のことが思い出される。</p> <p>③不景気のニュースを聞くにつけ、バブルの頃が懐かしく思い出される。</p> <p>④良きにつけ悪きにつけ、親は巣立っていく子どもを見守ることしかできない。</p> <p>⑤上京の折にはご一報ください。</p> <p>⑥非常の際には、このドアから避難してください。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①彼は教科書を読みもしないで、授業が難しいと文句ばかり言っている。</p> <p>②彼はその車をととても大切にしている、誰かが少しでも触ろうものなら、すぐ怒る。</p> <p>③今度の失敗も、考えようによっては彼にとっていい薬になったはずだ。</p> <p>④このカバンが偽物であることは、誰の目にも明らかだ。</p> <p>⑤休みがあるのはうれしいが、何もすることがなくて、暇をもてあましている。</p> |
| 8 | <p>「時」を表す文型 4</p> <p>①やりかけたことは最後までやり通せ。～かけだ／～かける／～かけの</p> <p>②近くを通りしなに、ちょっとなじみの飲み屋に寄った。</p> <p>③そのマラソン選手は、ゴール間際で倒れた。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①経済的に許されるなら、仕事なんかしないで家で遊んでいるに越したことはない。</p> <p>②先生がやさしいのをいいことに、全然宿題を出さない学生がいる。</p> <p>③彼女のがさがさの手は、これまでの彼女の苦労を物語っている。</p> |
| 9 | <p>複合動詞</p> <p>①寝坊して、いつもの電車に乗り損なってしまった。</p> <p>②私はあなたの発言の意味を取り違えていました。</p> <p>③うーん、食べ過ぎた。お腹がパンクしそうだ。</p> <p>④彼女はカラオケで日本の歌を歌いまくった。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①静かなので勉強しているのかと思いきや、ぐうぐう寝ていた。</p> <p>②必要とあれば、いかなる援助もいたしましょう。</p> |

| | |
|----|--|
| | <p>③東京公演を皮切りに、そのグループは全国各地でコンサートを開くらしい。</p> <p>④警察の取り調べは厳しく、現在の給料から過去の借金の額に至るまで調べられた。</p> <p>⑤今年を限りに社長職を退き、後進に道を譲ろうと思う。</p> <p>⑥後日、書面をもって連絡いたします。</p> |
| 10 | <p>副詞の呼応</p> <p>①たとえ冗談でも、言っていることと悪いことがある。</p> <p>②もし失敗したら失敗したで、その時また考えればいいさ。</p> <p>③誰であれ、欠点の一つや二つは持っています。</p> <p>④専門家ならいざ知らず、素人ではこの機会を修理することはできないよ。</p> <p>⑤注意されて謝るならまだしも、逆に開き直っている。</p> <p>覚えたほうがいい文型</p> <p>①こんな成績では進学はおろか、卒業だって危ないよ。</p> <p>②商いの成否は料金もさることながら、サービス如何で決まる。</p> <p>③山の多い地形と島国という環境が相まって、日本人の性格を形成している。</p> <p>④集めたデータを踏まえて、レポートの内容を考える。</p> <p>⑤借金に借金を重ねたあげく、ついには夜逃げまでしてかす始末だ。</p> |

授業の方法

授業は1回に1課のペースで進めた。まずプリントに沿って、例文を挙げながら文型の意味、注意点、似ている文型・表現との違いなどを説明した。5課～8課の「時を表す文型」には類似表現の文型が多く出ているので、その違いを詳しく説明した。何人かの学生は、J6までの文法事項で忘れてしまったものもあったので、それらも合わせて復習した。その後、学習した文型を使って、簡単な文を作らせた。毎回、学習した課の文型を使った短作文を宿題にし、翌週提出時にペアで相手の作文について気づいたことを話し合わせた。フィードバックは全体または個別に行った。

結果と課題

<春学期>

学生は学習意欲が高く、宿題の提出率もよかったため、授業は円滑に行うことができた。習った文型を使って文を作る宿題では、コースの初めのころは、文法的に正しい文を産出することのみに注意を向けていた学生も多かったが、回が進むにつれて、いろいろな語彙や表現を使って文を作ってくるようになった。今後は類義表現の使い分けをしっかりと理解させるとともに、内容のある文が作れるよう、授業を行っていきたい。

<秋学期>

学生は学習意欲が高く、毎回熱心に授業に臨んでいた。欠席も宿題の提出遅れもなく、授業は円滑に

行うことができた。宿題の短作文では、コース開始時は、宿題の短作文に初・中級文法の活用や使い方に間違いが若干見られた。また、文法的に正しい文を産出することのみに注意を向け、簡単な文を作る学生が多かった。しかし、回が進むにつれて、いろいろな語彙や表現を使って文を作るようになり、よく考えるようになったことが窺えた。今後は類義表現の使い分けを理解させるとともに、内容のある文が作れるよう、授業を行っていきたい。

2015 年度「J5～J7 読解」授業記録

コースの概要

J5～J7 の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5 では読解教材、J6 では時事的な記事・小説などを取り上げ、様々なスタイルの文章を読むと同時に読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、ディスカッションを行なう。J7 では、新聞記事、社説、論説、小説などを取り上げ、内容理解をした上で要約することを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

<J5 読解>

担当者名：<春・秋学期>神元愛美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 12 名、秋学期 8 名

使用教材：独自教材

目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。また、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに様々な読むスキルを学ぶ。

授業の方法

授業は、1 週間にテキスト 1 課を行い、時間があれば、内容に沿ったディスカッションやリーダーズシアター等のアクティビティーを行った。基本的には宿題として本文理解のためのリーディングワークシートを配布し、自宅で本文を読み、授業で答え合わせを行った。スキミングや速読等のリーディングストラテジーを導入する際には読み方を指導し、授業中に本文を読んだ。また、毎回テキストの中から未習の語彙を調べ、語句リストを作成する宿題を課し、授業開始時に学生の語彙リストから選んだ語句を使用し短文作成するクイズを実施した。

結果と課題

<春学期>

全体的に語彙力・漢字力が弱く、テキストが難しいと感じる学生が多かった。そのため内容理解ではわからない語彙に足を取られていたので、常に未知の語句は文脈から推測するよう毎回指導する必要がある。内容理解が最優先になり、ストラテジーの練習や本文を使用したアクティビティーまでは扱えないことが多かった。一方、小説文はよく理解し、楽しむ余裕があった。

どの学生も語彙力がついたと言っていたが、辞書なしで文の内容により読み方を工夫できるよう読解力がつくよう工夫していきたい。

<秋学期>

今学期のクラスは真面目な学生が多く、宿題の提出率が良いだけでなく、自宅学習を十分に行ったうえで授業に臨んでいた。そのため、授業ではピア活動を通して学生同士が学び合う機会を多く持つことができた。本文の内容把握だけではなく、要約練習、リーディングストラテジー練習、意見や感想の交換等様々な活動に十分時間をかけ、読解力をつけることができた。様々な分野のテキストに触れ、日本人の文章に慣れることができたのも結果の一つだ。語彙も意味を覚えるだけではなく、実際に使用できるよう意識して語彙リストを作成し、語彙クイズをしっかりと見直したため語彙力がついた学生が多かった。

学生の意欲が高く、難易度が高めのニュースや論文にも挑戦したいという声があった。今後は追加の読み物とそのレベルも考えていきたい。

<J6 読解>

担当者名：<春学期>金庭久美子、<秋学期>藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 7 名、秋学期 11 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの読解教材を取り上げ、読みのスキルの学習、内容把握などを行う。読んだ内容に基づいた話し合いや、内容を他の人に伝える練習も行う。また、文章の要約を授業で扱い、宿題として課す。さらに、語彙を増やすために、指定された語彙の小テストを

毎回行う。

結果と課題

<春学期>

前の週に次の読み物を配布と言う形で授業を行った。その際、毎回語彙リストを事前に配布していたので、各自読み方の確認を行い、予習をすることができた。その結果、毎回のグループワークが活発になったようである。授業では2、3のグループに分かれ、輪読やピアリーディングを行い、与えられたタスクの答えについて話し合い、理解を深めた。ピア活動を行うことでお互いに読み解けなかったところを確認することができ、十分理解した上でタスクを行うことができた。毎回の語彙クイズはしっかり準備しており、この学期中に何度も繰り返し触れることができたので、点数はもとより確実に語彙の力を伸ばしている様子が窺えた。今後も読解を通して使用語彙、理解語彙を増やす活動を続けていきたい。

<秋学期>

秋学期のJ6読解は11名のクラスであった。授業では、読み物の中にある語彙の導入や内容確認問題の他に、読み物を素材として、話し合いやディスカッションを積極的に取り入れるようにした。しかし、受講者全員が授業開始時間に揃わないことが多く、当初予定していた授業活動を変更しなければならないことが多々あった。授業の出席率は、課題の提出率や読解能力の伸びに直接的に影響が見られたため、この点を改善するようにしていきたい。そのために、学生の興味をひく読み物を取り入れたり、授業活動に工夫をしたりして、授業への出席が自身の日本語能力の向上にもつながることを気づかせるようにしたい。

<J7 読解>

担当者名：<春・秋学期>東平福美

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期10名、秋学期9名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解することができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

<春学期>

授業は、前半は読解テキスト、後半は論説文を扱った読解テキストを用いた。また、最後3回の授業

では芥川龍之介や宮沢賢治の短編小説を読み、星新一の小説『夜のかくれんぼ』を扱った。テキストは、基本的に1週間に1課のペースで進めた。新聞記事は、まず見出しなどを使ってプレリーディング活動を行い、次にスキミングのスキルを養うために、段落ごとに要点を箇条書きでまとめる練習をした。スキミングが慣れてきたら、先に設問を読ませて文章読解を行うスキヤニングをさせ、ピア・ワークによって精読を行い、記事の構成を把握するために段落の組み合わせを図式化する練習も行った。1回の授業につき3～6つの記事を扱った。論説文の読解では、日本の社会構造の変容、グローバル化時代、日本企業の社会的役割など、多様なテーマを取扱い、背景知識などの説明を加えながら、内容把握の練習問題をした。その後、日本社会と自国との対比を行い、各自の考えを紹介し、皆と共有することで内容理解を深めた。小説については、タスクシートを通して、内容理解の確認を行いつつ、作者の主張や作品の意図を読み取る練習を行った。さらに毎回、新聞記事を100～200字程度に要約することを宿題とし、授業冒頭で宿題の要約についてフィードバックを行った。

<秋学期>

授業では新聞記事や論説文を扱った読解テキストを用いた。また、毎回できる限り実際の新聞記事やコラムを読むことを心がけ、今世の中で何が起きているのかを日本語で読んで考えるように促した。後半には宮沢賢治や星新一の短編小説、俵万智の短歌やエッセイ等、趣向の異なる文章も扱った。

テキストは、基本的に1週間に1課のペースで進めた。新聞記事は、まず見出しなどを使ってプレリーディング活動を行い、次にスキミングのスキルを養うために、段落ごとに要点を箇条書きでまとめる練習をした。スキミングに慣れてきたら、先に設問を読ませて文章読解を行うスキヤニングをさせ、ピア・ワークによって精読を行い、記事の構成を把握するために段落の組み合わせを図式化する練習を行った。その際に注意すべき接続詞などにはマークをするように指示した。

論説文の読解では、日本の社会構造の変容、グローバル化時代、日本企業の社会的役割など、多様なテーマを取扱い、背景知識などの説明を加えながら、内容把握の練習問題をした。その後、日本社会と自国との対比を行い、各自の考えを紹介し、皆と共有することで内容理解を深めた。今回は一つの記事をペアや数人のグループに分かれて読んで紹介するという作業も行い、学生同士で教え学びあうという作業もできた。

小説については、タスクシートを通して、内容理解の確認を行いつつ、作者の主張や作品の意図を読み取る練習を行った。授業中に感想を書かせて、それをリレーで回して、読んだ後に各自コメントを書いていく作業も行った。さらに毎回、新聞記事を100字程度に要約することを宿題とし、授業冒頭で宿題の要約についてフィードバックを行った。

結果と課題

<春学期>

学生間で語彙力・漢字力に差があり、テキストの読解や内容理解の問題を解く速度に差が出たものの、学生同士で教え合うことを通じて、できる学生はわかりやすいように説明する力を養い、助けを必要と

する学生はできるだけ急いで正確に読む力を身に付けるようにと相乗効果が見られたように思う。また、毎回授業の1週間前にテキストを渡して、予習を前提として授業を行うことで、授業ではより深い読解ができた。今後の課題としては、新聞の要約だけでなく、感想や問題提起などの意見交換も活発に行い、皆の考えを共有できるようにしたい。

<秋学期>

ほぼ全員が出席率100%であり、宿題も毎回きちんと提出し、少しおとなしいクラスではあったものの、皆が一つの目標に向かってまじめに取り組む良いクラスだった。

今学期は漢字圏の留学生が多く、漢字圏以外の留学生2名は語彙や内容理解で苦勞していたが、授業で扱うテキストを前もって配布することで、毎回きちんと予習してくるなどの努力が見られた。また、学生同士で教え合うことを通じて、できる学生はわかりやすいように説明する力を養い、助けを必要とする学生はできるだけ急いで正確に読む力を身に付けるようにと相乗効果が見られたように思う。また、要約するだけでなく、感想を書かせて共有することで、自分とは異なる意見や考え方を知ることができたと思う。一方、課題は、できるだけたくさんの文章を読ませたいと思うがあまりに、一つ一つの語彙を丁寧に教えることができなかつたところである。実際の新聞記事や小説であれば、なおのこと語彙リストなどを配布し、深い読解ができるようにしていきたい。

2015年度 「J5～J7 作文」 授業記録

コースの概要

作文は、J5は中級、J6は中上級、J7は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6では毎週、J7では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

<J5 作文>

担当者名：<春学期>金庭久美子 <秋学期>保坂明香

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期18名、秋学期10名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

授業は10課からなるテキストに沿って行った。テキストは1コマ1課のペースで進めた。予習としてテキストを読んでくることを課題とし、授業では、要約、構成、よく使われる表現など、各課のポイントとなることを考えさせ、意見を言わせるようにした。宿題として、毎回各課の課題の作文（800～1000字程度）を書かせた。何度か作文を書いた後、授業の初めに、全体フィードバックを行い、構成など間違いが多い部分の確認を繰り返し行った。そのほか、学期中2コマでは、間違いが多かった部分にポイントを絞り、自力で間違いを訂正させる時間も取った。

<秋学期>

全10レッスンを教科書の流れに沿って進めた。教科書は1週間に1課のペースで進め、作文課題を毎週与えた。学期中、フィードバックの機会を2回設け、口頭・紙面の両面から作文の構成、表現、修辞等について指導をし、そのうえで書き直しもさせた。また、学生は書き直した作文の中から自信作を選び、タイプし、ピアリーディングをするという活動も行った。授業では、視野や思考を広げ、論拠を深めるために、ブレインストーミングとして当該トピックについての話し合いの活動を設けた。期末試験は、課題文を読解し、要約、同テーマについて意見文を作成することを課した。

結果と課題

<春学期>

毎回作文を書く前にテーマについてペアやグループでの活動を行い、自分たちの書きたい内容について考えを深めた。その結果、考えを整理しながら構成を組み立てていく様子がうかがえた。毎週800字程度の課題が出されるが、回を追うごとに学生の伸びが感じられた。文法や語彙の間違いが多少見られるものの、学期終了時には全員が原稿用紙の使い方や全体の構成に留意して作文が書けるようになった。18名クラスで個々のフィードバックの時間が十分に取れなかったため、今後は効果的なフィードバックができるように方法を考えたい。

<秋学期>

教科書は、作文の基本ルールから始まり、最終的には意見文を構成できるようになることが目標とされていたため、学生にはその課で学んだことを特に意識し、作文を書くように伝えた。熱心な学生が多く、学んだことを生かそうと努めていた。

授業内では、ピアリーディングを行ったが、教師には理解できても学生同士だと理解できないこともあったようで、学生は不明瞭な点を互いに尋ね、説明していた。この活動を通し、自分の作文の不十分な点を考え、考えを深めることができ、一定の効果はあったものと振り返る。

一方で、論の拠りどころが弱い作文に対しては、その点を指導したが、書き直しをしても論拠を深められないことがあった。また、論を展開できない、または、根拠ではなく感想を書く等も見られたが、これらは今後の課題であると考えられる。

学期中は2回のフィードバックを与え、学生と個人的に話す時間も設けたが、最後まで文章を正しく構成できない学生もいた。その学生が作文能力を向上するために何が最も重要かを早い段階で見極め、指導する必要があったと思う。

継承語として日本語を学んだ学生が1名おり、当初は漢字語彙力が十分ではないため、J5作文クラスを履修することを懸念していた。そのため、コーディネーターの先生に相談し、教科書を1週早く渡すことで対処した。必要があれば学習サポートをするように伝えたが、自分の力だけで学習し、努力を重ね、作文力・漢字語彙力を伸ばそうと取り組んでいた。

<J6 作文>

担当者名：<春学期>aクラス=長谷川孝子、bクラス=金庭久美子 <秋学期>長谷川孝子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期 aクラス=6名、bクラス=6名、秋学期 13名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。

授業の方法

テキストに沿って、1回1課を基本に進めていった。授業ではまず基本文型や語彙の復習をし、次に各課の学習項目の確認、テーマに沿った文章の読解へと進めた。全体を通して、要約、図表情報の取り入れ方と書き方、引用の書き方、構成の考え方、などを中心に扱った。授業内では、新聞記事なども適宜取り入れ、ペアやグループで意見や構成を話し合うタスクも取り入れた。そして、授業でまとめた意見や構成をもとに作文を書くことを各課の宿題とした。書いた作文内容は、全体と個人のフィードバックを組み合わせながら苦手な部分を克服できるようにした。

結果と課題

<春学期>

(aクラス)

非漢字圏中心のクラスであったため、漢字語彙が原因となり読解にかなり時間がかかる学生が何人もいた。未習の漢字語彙が多すぎて予習も追い付かず、表情が暗くなる日もあった。他の授業での課題も重なり、結果、残念ながら最後まで続けられない学生もでてしまった。しかし、最後まで続けられた学生は毎回真剣に課題に取り組み、文章力もつけることができたと思う。特に構成力については繰り返し行った練習とフィードバックで、考え方をまとめる方法を身につけたようだ。ただ、引用ではまだ理解

不足の点も見られた。今後、限られた時間の中での効果的な指導方を課題としたい。

(b クラス)

学期初めには原稿用紙の使い方や書き言葉の表現など基本的な作文の知識・技術に差が見られたが、何度も文章作成の練習を重ねた結果、学期後半にはほとんどの学生が各課の課題に合ったまとまりのある文章が書けるようになった。クラスでは、毎回課題文についてペアまたはグループワークで内容を確認し合い、それについての話し合いを行ったが、非漢字圏の学生が多かったため、課題文を理解するまで時間を必要とした。内容が理解できたのちはそれを生かして自分の意見が述べられるようになった。このクラスの問題点は、引用に関する記述がうまく書けない学生がいたことである。本文中の引用や参考文献の書き方については改めて指導方法を考えていきたい。

<秋学期>

欠席も少なく真面目なクラスだったので、大きな問題はなかった。図の説明や引用表現においては、少しずつ練習を繰り返し、書き方を定着させていった。構成力についても、繰り返し行った練習とフィードバックで、考え方をまとめる方法を身につけたようだ。特に、自分ができなかった部分を納得するまで理解しようとした学生は、文章力と構成力の両面で著しく上達した。しかしながら、最終試験では、文章の読み取りと構成に時間がかかり、文章が仕上げられず実力が出せない学生が何人かいた。今後はスピードにも焦点をあてて指導ができればと思っている。

<J7 作文>

担当者名：<春学期>保坂明香 <秋学期>金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 11 名、秋学期 10 名

使用教材：独自教材

目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

授業は 2 コマで 1 課が終了するペースで進めた。各課にはトピックに伴う 1200 字程度の文章作成の課題があり、学期を通して 5 本のレポート・小論文を書いた。各課の前半ではテキストの課題文を読み、新聞記事やクラスでの意見交換を通してテーマに関する考えを深めた。後半では前半のクラス活動を踏まえて各自が資料を集め、文章作成をする上での論点・問題提起・構成を考え、クラスで発表した。その後で更に構成と論の展開の推敲を重ね文章を作成した。なお、春学期においてはテキストの短文作成練習は授業で扱ったが、秋学期は提出課題とし、その時間を小論文作成に当てた。

結果と課題

<春学期>

授業や課題に対し真剣に取り組んでおり、課題提出の遅延もほとんどなく、出席率も高かった。学生の多くは、これまで受けた日本語の授業で作文を書いてきたようであったが、J7 作文クラスで求められる論文執筆の経験はほとんどなかったため、「大学生と留学生のための論文ワークブック」を部分的に用い、論文執筆に必要な知識を導入した。今学期、特に授業で指導した点は、論文の構成、よく用いられる表現、表記規則、意見と事実及び引用の書き分け、引用文献と参考文献の記し方についてである。また、学生の論文に主観的な表現や根拠づけが見られたため、客観的な記述の仕方や客観性についてもクラスで話し合う時間を設けた。

上記の中で、構成、表記規則及び、引用文献と参考文献の記述は、回を重ねるごとに理解を深め、上達が見られたが、意見と事実及び引用の書き分け、書き言葉の表現、客観的な記述については、理解はしているものの適切な表現を知らないため、算出できないということがあった。算出できない学生の多くが今までに日本語の論文を読んだことがなかったことを考慮すると、モデルとなる論文を早い段階で提示し、明確なゴールを示す必要があったように思う。また、表現に着目し論文を読むという課題を与えてもよかったかもしれない。正確な産出にはインプット量が大きく関わるため、読む活動と連動させて授業を進めてもよかったと振り返っている。

授業では、教師から学生にフィードバックを与えることが多かったが、課題文 5 の構成チェックは学生間でも行わせた。学生はこの活動を通し、自分の論文に欠けているものを理解したようである。今学期はこの活動を 1 度しか行えなかったが、今後は回数を増やしていきたい。

また、架空のトピックを学生に与え、この場合にどのように論拠を構築すべきか、どのような文献を探せばよいかということを授業内で話し合う時間を持った。これまで客観的に論拠が構築できず、文献探しに悩んでいた学生は、この活動からヒントを得られたようであった。一定の効果があったものと考えられる。

<秋学期>

1 週目はテーマについての話し合いを行い、2 週目はテーマに関する文献を持ってきて意見交換をし、内容について自分たちの考えを深めるという活動を行っている。文献の探し方についての指導の後には、テーマにふさわしい文献を探ことができ、話し合いが活発に行われた。全員がほぼ休まず参加し、1 名課題提出が遅れることがあったが、全員が全課題を提出した。また、学期の初めは、内容はよくかけていても、参考文献の書き方や本文中の引用の仕方、構成や見出しの付け方等、体裁に問題がある者が多くみられたが、毎回フィードバックのたびに指摘し、徐々に形式的な面では改善が見られた。文体のコントロールについて、文末の処理には問題はなかったが、文中に用いる語彙で、書き言葉の語彙と話し言葉の語彙の区別がつかず、指導が必要だった。今後の課題としたい。

2015 年度「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コースの概要

聴解・会話は、J5 は初中級、J6 は中級前半、J7 は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週 1 回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<春学期> a クラス=嶋原耕一、b クラス=平山紫帆

<秋学期> a クラス=高嶋幸太、b クラス=栗田奈美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<春学期>a クラス 4 名、b クラス 7 名 <秋学期>a クラス 6 名、b クラス 6 名

使用教材：梶本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版
宮城幸枝他『毎日の聞き取り plus40』凡人社

目標

J5 は初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

毎回の授業では、前半にスピーチに関する活動を、後半に聴解と会話を行った。

スピーチは、図表の説明と時事ニュースの説明を課題とし、1 日に 2 人のペースで順番に発表を行った。毎回の発表のあとには、そのテーマに関するディスカッションを行った。

後半の聴解・会話は、聴解教材を基に日本語話者の会話を聞き、場面や相手に応じた様々な表現を学んでいった。そして発展練習として、様々な相手や場面を設定したロールプレイを行った。また、毎回のクラスでは、正確な聞き取りのための練習としてディクテーションを行った。

<秋学期>

本授業は、主に 2 段構成である。最初に、あるトピックに関するスピーチを行い、その後、教材を用いて、聴解練習やロールプレイ練習などを行った。また、授業の初めには前の週の復習としてディクテーションのクイズを行った。その他、各課の終わりには、総合練習として、クラスメートとペアになってミニドラマを作成、発表する機会も作った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

a クラスの学生は大変真面目だったが、比較的静かな学生が多かった。会話の表現については、色々自分でアレンジしていくというよりは、教科書の表現をそのまま用いていることが多かった。そのため表現を使う上での正確さは身に付いたといえるが、それを各文脈で応用するには、もう少し練習が必要である。聞き取りの力については、毎回のディクテーションの効果もあり、学期後半には一音一音正確に聞き取ることができるようになっていた。

今後の課題としては、学生が何でも発言できるような雰囲気作りと、学習した表現の応用力まで伸ばすような活動を挙げたい。

(b クラス)

今学期のbクラスは、熱心な学生が多く、すべての活動に積極的に取り組んでいた。その中で、会話の苦手な学生がディスカッションでは自分の意見を積極的に述べたり、普段は少しおとなしい学生がロールプレイではユニークな会話を発表してクラスを盛り上げたりと、それぞれの学生が個性を出しながら力を発揮していた点が印象的であった。

回を重ねるごとに聞き取りの力も、会話力も上達していく姿が観察され、全体としてコースの目標は達成できたと思われるが、学習した会話表現がまだ消化できていない学生も見られた。

今後は、相手や場面に応じた様々な表現が実際の場で使えるように、練習の仕方を工夫していきたい。

<秋学期>

(a クラス)

聴解練習、会話練習の機会をそれぞれ豊富に提供する授業であったと思う。また、授業の方法にあるように多くの項目を行い進めていく必要があるため、時間調整が非常に重要であった。例えば、聴解問題を多くこなさなければならない場合は、インプット過多となってしまう、少し学習者が聞き疲れているときもあった。そのため、毎回の授業で、どのタスクをどこに配置するのかということも大切であるように感じた。しかし全体的には、学習者も聞くこと、話すことを積極的に行っており、クラスの雰囲気もよく、効果的に進められたと思う。

(b クラス)

聞き取り、発話の正確さ、流暢さ、発音等、それぞれが持つ課題は異なるものの、どの学習者も積極的にクラスワークに取り組んでいた。使用した教材は、母語話者の日常会話に近い表現、スピードを持つもので、実際の場面で遭遇するような豊富な情報を処理する良い練習となった。一方で、スピーチ、聴解、会話練習とかなり密度の濃い授業だったこともあり、重要表現等を十分に定着させる時間が取れないこともあった。今後は、教材のより適切な扱い方を検討し、しっかり産出ができるところまでいくようにしたい。

<J6 聴解会話>

担当者名：<春学期> aクラス=嶋原耕一、bクラス=栗田奈美

<秋学期> aクラス=猪口綾奈、bクラス=金庭久美子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期>aクラス6名、bクラス4名 <秋学期>aクラス6名、bクラス3名

使用教材：瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク

萩原稚佳子・斉藤真理子・増田真佐子・伊藤とく美『日本語上級話者への道—きちんと

伝える技術と表現』スリーエーネットワークなど

生教材（テレビニュース）

目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話やスピーチでは、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、ディベートにおいては、資料を用いて根拠のある意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

授業では、2週ごとに聴解と口頭表現を交互に扱った。聴解は、学期前半は『ニュースの日本語聴解 50』を使用し、ニュースに使用される語彙や構成、スピードに慣れさせた。後半は生教材を使用し、スキミングやスキニングの練習を行った。口頭表現では、会話は『日本語上級話者への道』を使用し、場面や目的に応じた会話練習を行った。また、今年度からコース後半に口頭表現の一環としてディベート練習を取り入れた。導入、準備を経て、実技を期末タスクとして評価した。

<秋学期>

学期前半は、聴解、会話を行い、後半はディベートを中心に行った。聴解は、『ニュースの日本語聴解 50』や生教材を使用し、ニュースに使用される語彙や構成、スピードに慣れさせた。会話では、あいづちのうち方や言い換えなどの方法を確認し、場面や目的に応じたロールプレイを行った。ロールプレイの後には個別にフィードバックを与えた。ディベートでは、2回の導入、準備に続き、期末テストとしてディベート実技を行った。

結果と課題

<春学期>

(aクラス)

積極的な学生が多く、クラスの雰囲気がとてもよかった。各課の発表や学期末のディベートにも、一

一つ一つ熱心に取り組んでいた。そのような学生の姿勢もあり、授業で扱った表現を次々に身につけていく様子が印象的だった。ただ学習の進度には当然個人差もあり、吸収が速く授業中も積極的に発言する学生がいる一方で、こちらから指名しなければあまり発言しない学生もいた。クラスの雰囲気重視のため、あまりこちらで統制して指名することは少なかったが、もう少し発言の機会が均等になるよう、工夫できればよかったと思う。また学んだ表現にはアカデミックな場面での使用が想定されているものが多かったが、それらが使える日常場面の提示や、日常場面で使える同様の表現が提示できると、もっと良かったかと思う。今後の課題としたい。

(b クラス)

4名というサイズの小さいクラスであることに加え、うち1名が専門の勉強が忙しく休みがちであったため、やや活気には欠けたが、その分それぞれの学習者の発話量を増やすことができた。ニュースの聴解では、一つ一つの教材を丁寧に扱っていったため、生教材にも無理なく移行することができた。会話では、語彙や表現の導入に時間がかかり、応用会話等の練習に十分な時間が取れなくなってしまうことがあった。この点は改善したい。ディベートは、実施前は難易度が高すぎるのではないかと危惧していたが、学習者はグループごとに綿密に準備をし、教師が予想していた以上の議論を見せてくれた。日本語で社会問題についてのディベートを行うことは、学習者にとっても自信につながったものと思われる。

<秋学期>

(a クラス)

履修者が6名だったので、意見交換や発表がしやすいクラスだった。全体におとなしい学生が多くコース前半は議論をリードするのに多少時間がかかったが、後半になると慣れもあるのか徐々に活発になっていった。ペアワークなどのクラス活動、課題・クイズへの取り組みは非常に熱心だった。

聴解練習では、数名の学生がスピードについていけなかったものの、仲間同士で教え合い、上手に乗っ切っていた。語彙がやや難解な聞き取りトピックの場合は、丁寧な導入が必要だと思われる。

あいづち練習は、学生にとって初めての経験だったようで、初回に多少の戸惑いが見られた。しかし回を重ねるごとにその意図を理解し、3回行った発表ではあいづち表現を駆使できていた。一方で、語彙や内容理解に時間がかかってしまい、あいづち表現の練習に集中できない学生も数名いた。会話内容を易しめにしてあいづち導入を促す方法を探ってもよいかもしれない。

ディベートは、学生の貢献度が高く特に最終発表は完成度が非常に高かった。事前準備がしっかりしていたのでディベート中の意見交換が明瞭で、とても興味深い内容のディベートとなった。今後の改善点としては、自分の意見を言う時にメモに頼りすぎないようにできればより良いと思われる。

(b クラス)

ニュースの際には語彙クイズを実施し、報道で使われる語彙の定着を図った。その結果、毎回ニュースを聞く際に、語彙に注意が向くようになり、ニュースについて語るときにその語を使って話すようになった。会話では、自分の経験談として料理の話やアルバイトの話を、自分の国と比較しながら、展開

がわかるように語る練習を行った。その際に聞き手としての相槌の練習も行ったのでスムーズな会話ができるようになった。さらに、ディベートでは2回の導入・準備に時間をかけたため、ディベートのよさを理解したうえで、取り組むことができた。ディベート実技では、自分たちの意見をサポートするために必要な新聞記事などを用いて意見を述べることができた。3名だったこともあり、毎回出席し、着実に能力を上げることができたのではないかと思われる。ニュースは学生が関心を示し、時事問題について話し合いができたので、もう少し回数や1日に聞かせる量を増やしてもよいかもしれない。

<J7 聴解会話>

担当者名：<春学期>aクラス=猪口綾奈、bクラス=藤田恵

<秋学期>長谷川孝子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期>aクラス6名、bクラス7名 <秋学期>10名

使用教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子『日本語超級話者へのかけはし—きちんと伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク
生教材（テレビ番組の録画およびDVD）

目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

(aクラス)

1. 「DVDの視聴」と、2. 「テーマ毎の会話」の二段階で授業を進めた。

1. DVD 視聴

DVDは4種類あり、1つを3回の授業で終了した。1-2回目で視聴し、最後の3回目で要旨・意見の発表と、クラス全体での討議を行った。最後に、要旨・意見をレポートとして提出させた。

2. 会話

使用教科書は「日本語超級話者へのかけはし」で、3種類のテーマを扱った。1つのテーマは3-4回の授業で終了した。授業では、語彙の確認・表現の練習・小テーマに分けた学生同士の話し合い・小スピーチなどを行い、適宜、調査やレポート課題も与えた。そして、テーマ毎の最終授業には、日本人学生にボランティアとして来てもらい（全部で3回）、最終討議に参加してもらった。討議の際、3つのグ

グループに分け、それぞれのグループの司会役を決め、討議内容の事前確認を行い、学生が効率よく話し合いを行えるようにした。討議では、視聴した DVD の内容についても話し合った。

(b クラス)

毎回の授業は、聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解は、「ガイアの夜明け」「カンブリア宮殿」等のテレビ番組を使用し、1つのテーマを2回に分けて視聴した。視聴後、番組内容の要約に自分の意見や感想を加えたまとめレポートを提出させ、さらに、番組で取り上げられていたテーマについて、ディスカッションを行った。会話は、『日本語超級話者へのかけはし』を使用し、1つの課を3～4回に分けて進めた。各回の最後にタスクの達成度をみるための発表と、新出表現のクイズを行った。

<秋学期>

授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解では、「ガイアの夜明け」「カンブリア宮殿」等の DVD を視聴し、内容把握と語彙や表現の確認を行った。毎回、内容を正しく把握するためのヒントを与え、聴解力を上げるための練習も取り入れた。DVD 視聴後、テーマである社会問題についてグループでディスカッションを行い、各グループの意見を発表させた。その後、要約と意見をレポートとして提出することを課題とした。会話は『日本語超級話者へのかけはし』を使用し、異なる場面を例に「意見を相手にどう伝えるか」を考えながら進めていった。途中、2 回のミニスピーチを課題とし、相手にわかりやすく意見を伝える練習をした。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

全体的には、クラス仲が良くお互いが助け合えるとてもよい雰囲気だった。あまり発言しない学生に対して意見を促したり、間違いを直しあったり、情報を補足してあげたり、協同するので相互効果が大きかったと思われる。一方で、つい調子に乗ってディスカッションが脱線してしまうこともあった。特に日本人学生が参加した授業では、気持ちが盛り上がってしまう学生もいたので、介入し過ぎない程度に注意をする必要があった。

DVD 視聴後の話し合いの活動では、口の重い学生をどのように促すかが課題だった。クラスの雰囲気が良いのでそれなりの参加はあるが、意見をはっきり主張する学生におされ気味の傾向があった。また、学生の話し合いの内容を、どのように効果的にファシリテートし、考えを深められるのかについても、まだ試行錯誤の余地があると感じている。

「日本語超級話者へのかけはし」を使用した会話活動では、表現が難しすぎて文法や作文の授業のようになってしまう時があった。難しい、時間がかかると思われるセクションは宿題にして事前準備を徹底することで、できるだけ授業内で「話す」活動を増やした。

(b クラス)

春学期の b クラスは、履修者が 7 名であったが、6 名で授業を行うことが多かった。聴解で使用した

テレビ番組は、レベル、内容ともに J7 の学生に合ったものであった。番組の中に登場する未習語彙に対しては、語彙リストを配付し対応した。学生はこの語彙リストを活用しており、視聴後のまとめレポートやディスカッションにおいて積極的に新出語彙を使用している様子が見られた。会話は、既有知識を思いつくままに述べるだけでなく、新たに知ったことを構成立てて話すタスクも多く、こちらも J7 にあったものであったように思う。今学期は 3 つの課を扱ったが、最終タスクがモノログであることが多かったため、授業での練習過程においては、ピア活動を積極的に取り入れるようにした。ピア活動において、日本語力に差のある学生がペアとなった場合、能力の高い学生がタスクを進め、もう一方の学生がそこに甘えてしまうということがあった。この点について、授業の進め方を再度見直し、改善したい。

<秋学期>

欠席遅刻がほとんどなく、非常にまじめなクラスであった。個々の学生を見ると、得意不得意はそれぞれ違っていたが、全員が聴解(DVD)内容を十分把握することができしかりとした意見を持っていた。ディスカッションも活発に行われ、お互い意見交換をしながら学習意欲も高めることができたと思う。また、指示したことを必ず課題に反映させ、常に積極的に授業に参加していた。全体的に問題はなかったが、ディスカッションでの発言の練習、発表の練習をする時間がもう少し必要だったように思う。今後の課題として、限られた授業内で何をどう効果的に教えるかを考えていきたい。

2015 年度 J8 授業記録

コース概要

J8 は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8 で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の文化・社会 A>

担当者名：<春学期>丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 春学期 5 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後のまとめとしてレポートを提出する。

結果と課題

正規学部生が3名、大学院生が2名履修した。日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。視聴覚教材を主として展開するテーマと、読解教材を主として展開するテーマをそれぞれ2テーマ用意し、ディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行った。

トピックはいくつかの候補の中から学生の希望を反映させて選定した結果、インフラ開発、流通業界の革新劇、国際共通語、フリーターとなった。最終プレゼンテーションとレポートは日本社会に関するトピックを各自選び、課題に取り組んだ。授業開始時に、いいプレゼンとは、いいレジュメとはという活動を行い、日本語力の点でこの授業で期待することを伝えた結果、履修者は全体的に個々の授業活動の目的を理解した上で積極的に活動に取り組めたと思う。

授業で取り上げた各トピックについて、DVD や読解資料などの複数の教材を使用して、各自が毎回欠かさず課題を行い、高度経済成長期から現在にいたるまでの日本事情について理解を深めることができた。

<日本の文化・社会 B>

担当者名：<秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週1コマ

履修者数：(池袋) 秋学期2名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

履修者が興味を持っている「日本のモノづくり」「就職活動」「日本の観光業」「高齢化社会」をトピックとして選び、映像教材、読解教材をもとに授業を進めていった。映像教材ではタスクシートを渡し、重要箇所の聞き取りを行い、読解教材では、公的文書や新聞記事などを読んでいった。そして、授業の最後には毎回、自身の意見や感想などをコメントし合った。

さらに、キャリア・アドバイザーの方を招き、留学生の就職活動に関して説明を聞く機会を設け、就職活動全体の流れを学んだ。

結果と課題

履修者が興味を持っているトピックをもとにし、授業を進めることができた。今回の授業では、多くのトピックを扱い、情報量が多い映像教材を積極的に使ったため、発表や読解の時間は、映像のそれと比べるとやや少なくなってしまう感が否めない。今後は、それらの配分に十分注意したいと思う。ただ履修者はさまざまなトピックについて学べたと話していたので、内容としては多くの事項を提供できたと思う。

<日本の文化・社会 C>

担当者名：<秋学期>丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 秋学期 12 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して日本社会や文化に関するテーマの中から、受講生の興味・関心に沿うものを選び、そのテーマに沿って授業を進める。

授業の方法

「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

2014 年度にひきつづき J6~8 の 3 レベルの学生を対象として開講し TA を配置した。ゲストスピーカーによる講義の前の事前学習、後の事後学習は基本的にグループディスカッションや、分担読解の課題を行い、履修者の主体的な学習を促した。履修者は非常に学習意欲が高く、学期末まで学習動機を下げることなく、積極的に取り組んだ。

<日本語の諸相>

担当者名：長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 8 名、秋学期 13 名

使用教材：独自教材

目標

一つの言語としての日本語を取り上げ、他の言語と比較した場合に特徴的な日本語の側面を理解する。擬音語・擬態語、様々な感情表現、微妙なニュアンスを表す副詞、位相や役割語など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、それについての論文を読んだり、調査したりする。

授業の方法

<春学期>

初めの2回は敬語と配慮表現を取り上げ、相手に配慮した依頼のメールの書き方を扱った。残りの12回は日本語の擬音語・擬態語を取り上げ、小説・ドラマ・広告・料理・病気などいろいろな分野で、実際にどんな擬音語・擬態語がどのように使われているか分析させた。その後学習した擬音語・擬態語を使って、文章を書かせた。また、擬音語・擬態語の特徴などについて書かれた本の内容について、発表及びディスカッションを、最後に日本語の擬音語・擬態語に関して調べ、分析したことについて発表させた。

<秋学期>

今学期は若者言葉、人の呼称（主に家族内の呼称、自称詞、対称詞）、役割語を取り上げた。このうち、役割語に一番多くの時間を割き、小説、アニメ、漫画、ドラマ、映画に見られる役割語を取り上げた。授業ではそれぞれのテーマについて講義したのち、文献を読んで内容について発表させたり、いくつかのテーマについて調査・発表をさせたりした。発表後、質問や意見交換をした。最終プレゼンテーションでは授業で扱ったテーマの中から、各自が興味・関心を持ったテーマについて調査・分析し、発表させた。

結果と課題

<春学期>

真面目に取り組み、課題もきちんとやってきたので、円滑に授業が進められた。全体におとなしめのクラスだったが、グループでは積極的に意見交換していた。敬語・配慮表現については、尊敬語、謙讓語や敬意表現をよく知っており、メールも伝えたい内容を適切な表現を使って伝えられていた。コースの初めのころは擬音語・擬態語の語彙量は多くなかったが、授業を受けて、擬音語・擬態語に対して興味や理解が増し、理解語彙も増えたように思われる。今後は擬音語・擬態語が適切に使えるよう運用力を伸ばすようにしていきたい。

<秋学期>

若者言葉は全体的にあまり積極的に使おうと思っていないようで、若者言葉に詳しい学生は少なかった。人の呼称は各自の友人・知人に調査したが、日本語の呼称が自分の母語に比べて複雑だと実感し、初めて知ったことも多かったようである。役割語は、学生は日本のドラマ、映画、アニメをよく見てお

り、興味を持って参加していた。最終プレゼンテーションではよく準備をしたことが窺える発表が多かった。

今学期は、学部生が多いこともあり、プレゼンテーションに使うレジュメやスライド、プレゼンテーションのしかたなどにはあまり時間を割かなかったが、出来具合はかなり個人差があった。今後はこの点にもう少し時間を割いて指導したい。また、活発な意見交換ができるように授業を工夫したいと考えている。

<日本語論文読解>

担当者名：丸山千歌（池袋）、谷啓子（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）春学期 7 名 （新座）春学期 2 名

使用教材：独自教材

目標

日本語で書かれた学術論文の内容が読めることを目指し、日本語論文の構成語彙などについて学ぶ。

授業の方法

前半は、教師から提示されたサンプル論文や、個々の専門分野で探した論文を素材に「論文の構成」を把握する。その中で、論文特有の表現を随時確認し、分野による論文の違いを共有した。後半は担当論文をデータの種類、調査方法などの面からさらに分析し、また参考文献の扱いについても分析を重ねた上で、発表した。最終課題として、担当論文についての詳細なレジュメを作成し、ゼミ形式での口頭発表とディスカッションを行った。

また論文読解に関連して、「参考文献や引用のルール」「調査方法」、最終発表に必要な「レジュメ作成」や「口頭発表上の注意」などを練習とともに内容に組み込んだ。

結果と課題

<池袋>

履修者は学部生 3 名（うち 1 名は 1 回も出席せず）、大学院生 2 名、特別外国人学生 2、名であった。担当論文は、各自が専門に関連するものを数点選んだ中から 1 点ずつ選定し、共通論文は昨年同様、社会言語学系のものを使用した。担当論文のトピックが言語学、社会学、美術史と多様であったことから、分野によってスタイルが異なること、またトピックやスタイルが異なっても、一定のスキルを持っていれば大筋を読み取ることができることを確認した。全体的に出席率がよく、課題にも積極的に取り組んだが、引用文献にあたるといった姿勢を身につけることは今後の課題であると感じた。

<新座>

履修者は学部生 2 名（異文化 1、映像身体 1）であった。担当論文は、専門に関するものを選んだ。2 名とも 4 年生であったため、卒業論文の準備にも役立つものを選んだようである。共通論文は昨年同様、社会言語学系のものを配布した。また、履修者が少ないため、教師の方から学会誌や論文集などを提示し、執筆要綱を確認して分野によってスタイルが異なることを確認した。

2 つの論文が全く違うタイプのものであったので、各論の分析でも発見するところが多かったようである。2 名とも 4 年生ということで就職活動などによる欠席が多く、共に見て話し合う機会が思うようにとれなかったのは残念である。最終発表は分かりやすく準備されていたが、内容面では key となる概念が不勉強であったり、レジュメでは事例のまとめが分かりにくかったりしたのでコメントをした。特に前者について発表指示の際に強調することが反省点である。

<日本語論文作成法>

担当者名：東平福美（池袋）、谷啓子（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）秋学期 8 名 （新座）秋学期 2 名

使用教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

北原保雄監修（独）日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計画作成法』
凡人社、2009

目標

卒業論文や学術的な論文作成に必要なとされる語彙・文型・スキルについて学び、高度な日本語論文作成能力を身につけることを目指す。日本語の論文の構成、スタイル、使用される語彙や接続表現、文型の特徴について学び、自らそれらを用いて構成の組み立てや短文作成などを行う。その後実際の論文作成を行い、実践力をつける。

授業の方法

前半は論文の探し方の指導後、各自の専門分野に関する論文を探し、1 本担当論文を決めて分析し、論文の大まかな構成を把握した。専門や関心の異なる分野の論文に触れることで、論文にも様々なパターンがあることが確認できた。

その上で後半は、テキストで研究計画書の書き方、論文に必要な表現等を学びながら、各自が取り組みたい論文の準備を行った。テーマ探しから始まり、研究課題を検討、並行して先行研究の収集と整理を行った。それぞれの作業に関してはワークシートにまとめ、適宜 OHC で発表した。全員学部生であったので、最終課題は「卒業論文の準備」とし、各自の研究計画書、文献リスト、文献メモを作成、発表した。

結果と課題

<池袋>

履修者は学部1年生から大学院生まで学部や専攻も様々であったが、皆非常によく頑張っていた。履修の理由としては、卒業論文、修士論文に向けての準備という学生がいる一方、日本語の文章やレポートの正しい書き方を学ぶためという学生も多く見られた。そのため、具体的に文献調査やアンケート調査を始める学生もいれば、自身の研究テーマを見つけるまでに苦労している学生も多かった。しかし、皆興味関心もテーマも異なる中で、授業での教師と学生のやり取り、学生同士のやり取りを通して、周りから良いものを吸収して各自の文章を推敲させ、最終的に全員が研究計画書を書き上げることができた。

授業では、初めから各自研究テーマの設定を意識させ、テキストの問題（選択肢や穴埋め）を解くと同時に、各自の研究テーマに合う先行研究では、どのような論文スタイルで、どのようなことが書かれているかということを毎回確認する作業を行った。最初はテキストの論文と実際の論文の形態が異なることに驚いていたが、様々なジャンルの論文に触れることで徐々に慣れていき、学部生でも論文の読み書きへ抵抗がなくなったように思う。また、興味関心の異なる学生同士が発表し、意見を言い合う中で、自身の考えを切磋琢磨することができた。

一方、課題としては、最終目標である研究計画書を書いて発表するという作業の書くほうに重きを置いたために、口頭発表の準備に時間がかけられなかったことである。書くだけでなく、口頭で説明するというほうもきちんと教える時間を取るべきだったと反省している。

<新座>

履修者は正規学部生の1年生と2年生であった。履修の理由としては、「これまでのレポートを、なんとなくこんな感じかな、とやってきたので、もっと論理的な構成で論文を作成したい」「文章構成力を上げ、論文にふさわしい語彙を選べるようになりたい」とのことであった。小人数ながら真面目に取り組み、論文の構成を学び、それにふさわしい表現、論文の準備の仕方が学べたと思う。

授業では、テキストの問題（選択肢や穴埋め）はスピーディーにこなすが、見つけた研究課題を一から自分の言葉で書くのはハードルが高かったようで、研究課題文を何度も修正した。

テキストを参考にするだけでは不十分であったので、お互いに赤入れ前のものをコメントし合い、初見の人にはどこが分かりにくいのか、指摘し合う等して自分の文章を客観的に見る機会を作った。

学部の1年生と2年生なので、論文のために必要なスキル（例：何が論拠として必要か、考えて探す）がまだ不十分であり、履修者の中にレベルの高いプロダクツを見せてくれる上級生の刺激が少なかった。次期は早い段階でプロダクツの例を見せてゴール設定を意識してもらおう工夫をしたい。

<キャリアジャパニーズA>

担当者名：<春学期>平山紫帆（池袋）、佐々木藍子（新座）、<秋学期>平山紫帆（池袋）

授業コマ数：週1コマ

履修者数：(池袋) 春学期 10 名、秋学期 1 名、(新座) 春学期 12 名

使用教材：独自教材 (参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』

『外国人留学生のための就職ブック 2015』)

目標

日本での就職活動に必要な日本語やビジネスマナー、様々なスキルを学び、それを使えるようになることである。そのために、就職活動の際に必要とされる日本語に関連する事柄を、大きく「作文スキル」「発話スキル」「ビジネスマナー」に分類し、それぞれについて実践的に学んでいく。

授業の方法

<春学期：池袋>

就職活動で必要とされるスキルのうち、「作文スキル」に関しては、エントリーシートを実際に書く活動を行った。「発話スキル」については、実際の就職活動を想定した個人面接や集団面接、グループディスカッションの練習を行った。「ビジネスマナー」に関しては、ビジネス上で必要とされる服装や態度について考えたり、手紙やメールのマナーについても学習したりした。

さらに、学期中に 1 回、ゲストスピーカーの講師を招き、就職活動の概要に関する説明を聞き、就職活動への取り組み方や心構えを学んだ。

<春学期：新座>

「ビジネスマナー」として、就職活動の流れ、活動に関わるマナー、履歴書の書き方、書類送付の仕方、ビジネス敬語などを 1 つひとつ丁寧に押さえ、日本での就職活動におけるビジネスマナーの重要性を認識させた。また、学期途中では、ゲストスピーカーとしてランスタッド株式会社の野澤和世氏をお招きし、就職活動への意識を高めた。それと並行して、「作文スキル」「発話スキル」のスキルアップを目指したが、まず準備段階として、自己分析を深めることにより、エントリーシートや面接での応答内容を検討した。その後、実践練習へと移行し、教師からのフィードバックを参考に、何度も書き直しや練習重ねることで、内容を推敲していった。

本科目では、就職活動に関する基礎知識や提出書類の作成方法などの情報を提示する内容が多いものであったが、それらをただ教師から提示するだけでは、まず学生に考えさせ、その背景にある理由についてもしっかりと押さえることで、その重要性を強化していった。

<秋学期：池袋>

1 名が履修登録をしたが、一度も出席しなかったため、授業が行われなかった。

結果と課題

<春学期：池袋>

毎回の授業では、自分が書いた課題をペアやグループで検討したり、面接練習をグループで行ったりするなど、学生同士で活動する時間が多かったが、どの学生も非常に熱心に、主体的に取り組んでいた。

だが、今学期の受講者は、入学したばかりの学部1年生がいる一方で、就職活動中の4年生もいるなど、受講の目的も既有知識の量もばらばらで、授業の進め方が難しいこともあった。クラス全体で同じ活動を行うことが多かったが、置かれている状況や知識に応じて、もう少し柔軟な授業運営をする方法もあったかもしれない。今後の課題としたい。

<春学期：新座>

本授業の履修者は1名で、まさに就職活動中の4年生の学生であったため、学生の就職活動の進行状況に合わせてシラバスの範囲内で変更を加えながら授業を進めた。特に学生が実際に就職活動を進めていく中で自分の苦手な部分を認識しており、希望があったためエントリーシートと面接の練習に時間を割いた。また、活動を進めて行く中で、希望する業種への迷いも多少出てきたようであるが、ゲストスピーカーの先生の話聞き、特定の業種にも業務内容の幅があることや最近の動向がわかり、考えも定まったようである。就職活動中ということもあり、半ば少し疲れが見られることもあったが、幸い活動と授業が重なることもなく、きちんと授業に参加していた。

今期は履修者が1名であったため、教師と学生の1対1の授業であった。教師が丁寧に指導できるというメリットもあるが、その反面、学生同士の学び合いの場が持てなかったのは残念であった。

<秋学期：池袋>

授業が行われなかったため、省略。

<キャリアジャパニーズB>

担当者名：<春学期>藤田恵（池袋）、<秋学期>藤田恵（池袋）、佐々木藍子（新座）

授業コマ数：週1コマ

受講者数：（池袋）春学期4名、秋学期3名、（新座）秋学期0名

使用教材：独自教材

目標

日本企業への就職を希望する者を対象に、日本独特の就職試験（主として国語分野）を突破するために必要な知識とスキルを身につけることを目標とする。就職試験に出題される国語分野、常識分野の問題を数多く解き、それらについての知識を身につけると同時に、試験対策を行う。

授業の方法

日本国内で実施されている就職試験（SPI）の国語分野を中心に扱った。出題範囲から毎週1～3つの項目を扱い、傾向と対策を導入した。また、毎回授業開始時に前週に扱った内容の小テストを行った。実際に多くの問題を解くことで、就職試験に必要な知識を身につけさせた。

結果と課題

<春学期：池袋>

春学期の履修者は、学部1名、特外3名であった。4名の履修の目的は、新たな日本語の知識を身につけたいというものであり、就職活動中の学生はいなかった。そのため、授業では、SPIの試験項目を扱いつつも、知識をより深める内容になるように心がけた。具体的には、文学作品のブックレポートや四字熟語の意味調べ等の課題を課し、試験範囲の暗記のみにならないようにした。結果として、これまでの暗記中心の内容よりも好評であった。また、今学期は、以前より課題として挙げていたスピードテストの対策を数回取り入れることができた。スピードテストの速度を体感することで、より具体的にSPIのイメージ作りができたものと思われる。今後も履修学生の動機づけにつながるような授業となるように内容を改善していきたい。

<秋学期：池袋>

秋学期は、受講者3名で、全員学部生であった。3名のうち日本での就職を考えている学生は1名で、他の2名は就職については具体的に考えておらず、自身の日本語能力向上を目標に挙げていた。そのため、春学期と同様に、テスト対策の他に、ブックレポートや調べ学習を行うようにした。3名とも日本語能力は高かったが、SPIなどの就職試験における知識はほとんどなく、毎回新しい知識を授業で得ることとなり、意欲は高かった。一方で、試験範囲の広さから暗記しなければならない項目が多く、負担が大きいと感じている様子も見受けられた。このような就職試験の知識を一からつける留学生に対しての授業の進め方について、検討することが必要であると考え。

<秋学期：新座>

履修者がいなかったため開講されなかった。

<J8 ビジネス日本語口頭1>

担当者名：<春学期>猪口綾奈（池袋）、佐々木藍子（新座）<秋学期>猪口綾奈（池袋）

授業コマ数：週1コマ

履修者数：（池袋）春学期10名、秋学期7名（新座）春学期3名

使用教材：独自教材

目標

ビジネスで必要とされる構文レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

<春学期：池袋>

特定のビジネスシーン(自己紹介・電話応対・依頼・提案/申し出・説明・プレゼンテーション)におけ

る活動を、「聴解練習」と「口頭練習」を中心に行った。「聴解練習」についてはBJTテストの聴解セクションを主に使用したが、クラス活動の際にはそれぞれのビジネスシーンに合わせたモデル会話の聴解も行った。「口頭練習」については、それぞれのシーンを自社内・自社外に分け、出来るだけ多くのモデル会話をペア練習し、さらにそれらのモデル会話をベースに会話を自由作成し発表する練習も行った。学生の作成した自由会話は添削をし、間違いを直すだけでなく表現のバリエーションを加えた。さらに、頭で考えることなく会話が流暢に口から出るようにするために、いくつかの会話を記憶してクラス発表する活動も数回行った。

<春学期：新座>

本科目では、ビジネスシーンにおいて基本的な「自己紹介（他社紹介）」「依頼」「説明」「電話対応」、さらに応用として「プレゼンテーション」を取り上げ、それぞれの場面において必要な会話力、対応力が身に付けられるよう繰り返し練習を行った。具体的には、各場面で基本的なビジネス語彙や待遇表現を学習し、その場面において必要とされる表現をしっかりと口頭練習し、また関連する別の対応などの仕方も学習した。最終的には、ロールプレイや会話の作成、プレゼンテーションを行い、教員からフィードバックを受けることにより応用力を高めていった。さらに、ビジネス場面での聴解力を促進させるため、ビジネス日本語能力テストの聴解問題およびビジネス語彙の学習も並行して行った。

<秋学期：池袋>

授業の目標は、5つのビジネスシーンで（自己紹介・電話対応・依頼・提案/申し出・説明・プレゼンテーション）、正しい敬語を使いながら適切に会話進行ができるようになることである。授業進行は、「話す」力を伸ばすために口頭練習・ペアワーク・グループワークを中心に行った。ほぼ毎回の聴解練習は、当日の学習内容に関連したビジネスシーンの会話を用い、語彙や敬語表現も学習した。会話作成練習は二段階で行い、まず状況説明のみでパートナーと会話作成（この時点で文法的な指導は無い）、その後完成形の会話を提示する。これは、自分で作成した会話と提示された完成形会話を比較し、言えなかった表現を学生に再認識してもらうのが目的である。

最後に、ペア会話発表は、指定されたトピックで自由に会話を作成してクラス内で発表を行った。また、授業と平行して、表現力増強のためにビジネス語彙・表現クイズを行った。

結果と課題

<春学期：池袋>

クラス全体の雰囲気は、課題をきちんとやり遂げクラス活動に積極的に参加する、非常にまじめな学生ばかりだった。すでに高い日本語運用能力があったので、授業に対する期待値が高く、より多くの知識を吸収したいという姿勢だった。

敬語の習得はやはり難易度が非常に高かったようで、教科書のスキットから離れて自由会話を作成させると、間違いが増えてしまっていた。どのような表現を使ってよいか戸惑ったり、敬語を使いすぎてしまったり、カジュアルな表現と混ざってしまったり、という傾向がみられた。学生にとって間違いや

すい敬語表現・敬語を使いにくいビジネスシーンを、教科書だけではなく学生の間違いから発見して授業に取り入れていくことが必要であり、今後の課題だと思われる。

<春学期：新座>

履修生は、学部生2名、特外生1名で多少の日本語力の差はあるものの、基本的な日本語レベルは十分で、学習意欲も高く、授業に対しても積極的であった。ただ、全体的に非常にカジュアルな話し方が定着しており、尊敬語と謙譲語の使い分けにはかなり不安な面があった。簡単な内容でも敬語が含まれるフレーズは、表現が長くなる場合も多く、口がうまく回らなかったり、敬語がすぐに出てこなかったりすることが多かったため、繰り返し口頭練習を行った。

ビジネス場面に関する知識が少ないせいか、ロールプレイや会話作成ではモデル会話に頼る傾向があり、想像力に欠けるものがあった。それらの知識不足をカバーできるような内容をさらに検討したい。

<秋学期：池袋>

クラス全体としては、授業に出席していた6名全員が課題をきちんとやり遂げ、クラス活動に積極的に参加できた。多少日本語運用能力に差のあるクラスだったが、ペアでお互いに助け合いよい効果がでていた。

今後の課題は、敬語運用能力の定着である。頭で理解はできているものの、実際に会話で使用する際には頻繁に詰まってしまっていた。教科書のスキットでは流暢に口頭練習ができるが、自由会話で使いこなすまでには時間がかかるので、さらに多くの会話練習が必要だと思われる。また、学生にとって敬語が使いにくいシーンを、教科書だけではなく学生の周囲の環境から授業に取り入れていくことも必要であり、今後の課題だと思われる。

<ビジネス日本語口頭2>

担当者名：<春学期>高嶋幸太（池袋）<秋学期>佐々木藍子（池袋・新座）

授業コマ数：週1コマ

履修者数：（池袋）春学期 2名、秋学期 1名 （新座）秋学期 0名

使用教材：『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』『BJT 模試と対策』

目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

<春学期>

本授業の流れは以下の通りである。①語句クイズ、②聴解、③ビジネス日本語、④ロールプレイ・プレゼンに向けての発表準備。①では毎週ビジネスに関する語句の小テストを行った。②の聴解では毎週15問程度BJTの聴解パートを聞き取っていった。③ではテキストを使い、毎回キーフレーズを学びな

がらロールプレイを行った。④では2-3週に1度ある発表に向けての準備である。このようにいずれもビジネスに関するオーラルスキルを高めるべく、授業を構成した。

<秋学期>

本授業では、ビジネス日本語口頭1に引き続き、「アポイントメント」「業務引き継ぎ」「面会して交渉する」「個人客からの苦情」「プレゼンテーション」を取り上げ、授業を進めた。取り上げた場面は、会社内での同僚との会話も一部あったが、多くは客や取引先などの同僚以外との会話場面が中心であった。そのため、日本語の丁寧さだけでなく、ビジネスの慣習やルールを踏まえたコミュニケーションスキルの向上が求められるものであった。そこで、本授業では場面ごとに必要な語彙や表現に加え、その表現がなぜ使われるのかというビジネスルールや組織の仕組みなどの背景情報も合わせて学習を進めた。具体的には、各課ではプレタスクを行ったあとで、その場面でよく使用される表現や語彙を導入した。その際合わせてビジネスルールなども考えた上で、口頭練習へと進め、仕上げにロールプレイを行った。「プレゼンテーション」は、新商品の企画発表としたが、その際市場調査として立教生にインタビューを行い、プレゼンの資料として組み込むようにし、プレゼン内容に客観性を持たせるようにした。

結果と課題

<春学期：池袋>

履修者は2名と今学期では少人数でのクラスとなった。語句クイズや聴解などを通して、普段はあまり接する機会がないビジネス用語を多く学ぶことができたと思う。聴解やロールプレイなどでは、「わかりかねます」「上の者に相談してみます」などのような定型表現も多く導入することができた。また、履修者は宿題や課題も毎週きちんとやってきていたので、授業進行も大変スムーズであった。

今後の課題としては、適切な映像教材の導入が考えられると思う。本テキストにはCDしか付いていないため、内容に関連した映像教材もあれば、具体的にビジネスの場面が想像できると思う。

<秋学期：池袋>

履修生は、特外生1名だけであったが、ビジネス場面や日本の会社の仕組みについて非常に興味を持った学生であったため、導入する場面に合わせて、関連する情報を導入することができた。授業にも非常に意欲的で、質問も活発に見られた。この学生は日本語のレベルは十分であったが、早口で、丁寧さにかける表現の使用もあったため、シャドーイングを取り入れ、毎回10分程度行った。その結果、聞き取りやすさは少し改善されたように思う。日常の生活ではビジネス場面で使用するような会話は練習できないため、よい練習となったようである。

後半のプレゼンテーションでは聞き取りや質疑応答の練習となるよう、立教生に日本人ボランティアを1名依頼したが、病気や理由不明で最終プレゼンに来てもらえなかったため、仕上げの練習をすることができなかったのが心残りである。本授業では受講生が少なかったことで、学生に合わせ丁寧に指導することができたが、学生同士の学び合いが持てなかったのは残念であった。

<秋学期：新座>

履修者がいなかったため開講されなかった。

<ビジネス日本語 文書>

担当者名：<春学期>保坂明香（池袋）、<秋学期>嶋原耕一（池袋）、金庭久美子（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）春学期 7 名、秋学期 7 名、（新座）秋学期 0 名

使用教材：使用教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネス
メール・ビジネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』（スリーエー
ネットワーク）

目標

日本でのビジネスに必要な日本語能力（読解、作文）について学び、使えるようになる。

授業の方法

毎回の授業では、表現の確認・練習をしてからメールまたは文書を実際書いてみるという流れを取った。また、メールまたは文書の一つ作成し送付することを、毎回の宿題とした。各授業で学習項目となるメールまたは文書を実際書く前に、どのような文脈でそれを書くのか十分に理解させるよう意識した。特に企業間の関係（小売と製造、工場と商社など）に馴染みが薄い学生も多かったので、必要であればそれらの関係をパワーポイントで図示して、丁寧に説明した。また表現については、どのような表現を用いるのかに終始せず、なぜそれぞれの表現を用いる必要があるのか、主に相手への配慮という観点から考えさせるようにした。

結果と課題

<春学期：池袋>

教科書に「役立つ表現」として扱われている表現は、これまで理解が十分ではない表現だったようで、その課のビジネス日本語を学び運用していくうえで、よい確認作業とウォームアップに繋がったと思われる。

学生は授業内活動や課題にはよく取り組んでいたが、遅刻、欠席が多いクラスであった。学期中何度か注意したが、改善は見られなかった。ただ、今学期の学生は比較的日本語力が高かったようで、状況を理解できなかつたり読み違えたりすることはなく、スムーズに書く作業に移ることができた。

タスクは上述のようにペア、またはグループで行うことが多かったが、この活動は一定の効果があったと思われる。学生の知識の量は様々で、既にある程度のビジネス日本語の表現を知っている学生もいれば、全く触れたことがないという学生もいた。知識が少ない学生にとっては、正しさ以前に算出する

こと自体が困難であったため、定型句や表現を知っている学生から学ぶことができ、表現の幅が広がったようである。

学期前半には、解答に不適切な表現や内容が多く見られたが、学期の後半になると、ビジネスメールの書き方に慣れてきたようで、適切な表現を用いてメール、文書を書く様子が見られた。ただし、実際に用いられている表現は多岐に渡り、授業で扱えるのはその一部であるため、今後もインプットを増やし、様々な場面で対応できる日本語力を養ってほしいと考える。

<秋学期：池袋>

履修者には日本企業でのインターン経験者、就職活動中の学部4年生など、実際にビジネスメールを書いた経験がある者が多かった。そのためメールについては、それまでの自身の経験と結び付けながら、みな意欲を持って取り組んでいたように思う。それぞれの表現についても、フィードバックで言われたことを各自がきちんと消化し、着実に習得していく様子が見られた。ただビジネス文書については、議事録や出張報告、始末書など、馴染みの薄いものも多かった。みな一生懸命取り組んでいたものの、それらを学習する意義をどのように伝え、どのように意欲を持たせればいいのか、教師として今後の課題としたい。

<新座>

履修者がいなかったため開講されなかった。

2015年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B 授業記録

コースの概要

すべての特別外国人学生を履修対象とし、履修のための日本語レベルは問わない。日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

<Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名：<春学期>丸山千歌

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期5名

使用教材：自主開発教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

日本語の語彙や表記、慣用表現などについて、その背景にある文化的・歴史的なことがらに触れなが

ら学んでいく。授業は英語と簡単な日本語で行われる。講義も行うが、学生同士のディスカッションや調査なども頻繁に行うようにした。トピックは、学期初日に学生と話し合っで決め、扱ったのは、年中行事、コミュニティ言語、茶道、地域方言と社会方言、折り紙、マンガアニメなどであった。茶道はゲストスピーカーを招いて実施した。学期末には、学期中に扱ったトピックと関連させて学生自身の国や社会と比較するなどのプレゼンテーションを行った。

結果と課題

日本語初級の履修生と日本語中級の履修者が混在したこと、また学習者背景から英語を共通語に設定しにくい条件であったことから、英語と日本語の両言語を使用言語として展開した。講義についてはできるだけ受講生が主体的に考えることができるよう、受講生自身の国（地域）の状況を説明してもらうなど心がけた。また体験型の活動には茶道と折り紙、書道を行ったが、どれも受講生にとっては新鮮な経験になったようである。今学期は初めて日本の昔話を扱ったが、マンガアニメの中にある日本文化を発見できる活動にもなった。今後も、この科目での活動は、日本文化・社会への導入を行い、できるだけ受講生が教室の外に関わりが持てるような仕掛けを作るよう心掛けたいと考えている。

<Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名：<秋学期>金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：秋学期 10 名

使用教材：自主開発教材

授業の方法

日本語の語彙や表記、慣用表現などについて、その背景にある文化的・歴史的なことがらに触れながら学んでいく。授業は英語と簡単な日本語で行われる。講義も行うが、学生同士の話し合いや調査なども頻繁に行うようにした。トピックは、学期初日に学生と話し合っで決め、扱ったのは、紙の文化、方言、漫才・落語、書道、アニメ・まんが、食生活、俳句と短歌などであった。体験学習として、書道、かるたなどを行った。中間発表と期末発表で、学期中に扱ったトピックから学生自身の興味のあるテーマを選び、プレゼンテーションを行った。

結果と課題

日本語初級から上級にまでの履修者が混在したことから、英語と日本語の両言語を使用言語として展開した。講義の初日にトピックを選んだが、各自事前準備を行い、それをもとに毎回グループで自分の資料を紹介したり話し合いを行ったりした。事前にトピックについて準備することで話し合いを活発にすることができた。受講生の希望が多かったのは方言を使った会話だったが、東京にいながらにして地

方の言葉に触れるいいチャンスであり、日本語のアクセントやイントネーションについて学ぶことができた。また、アニメ・まんがはただ内容の面白さについて語るだけでなく日本人の行動や色彩センスについても発見があり様々な意見交換が行われた。また自分たちが創作した短歌や俳句を、書道で筆を使って色紙に書く体験活動も行ったが、非常に真剣に取り組んだ。日本語、日本文化への理解がさらに深まったと思われる。今後の課題として、事前準備も必要であるが、講義内容や体験をもとに行う事後活動の報告等の授業方法も考えていきたい。

2015 年度 日本語演習 授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習 1 は J2 レベル、演習 2 は J3 レベル、演習 3 は J4 及び J5 レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習 1 では「アニメ／日本の歌」、演習 2 では「映画／まんが」、演習 3 では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習 1～3 の詳細は以下の通りである。

<演習 1>

担当者名：平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 2 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

日本のアニメや歌を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、日本人の考え方などについての理解を深める。

授業の方法

<春学期>

「学校文化」をテーマとし、「お弁当」「掃除」「制服」、「部活動」、「入試」、「いじめ問題」等の学校にかかわるトピックを毎回一つずつ取り上げた。授業の前に、トピックの下調べや日本人へのインタビューを宿題として課し、クラスではそれを用いて導入を行った。その後、日本の状況がよくわかるアニメのシーンを視聴して気づいたことを話し合ったり、自国の状況を紹介しあったりした。さらに、なぜそうした違いが生まれるのかを考え、それぞれの国の考え方についてディスカッションを行った。

<秋学期>

秋学期も引き続き「学校文化」をテーマとし、「給食」「校則」、「部活動」、「入試」等の学校にかかわるトピックを取り上げた。授業の前に、トピックの下調べや自国の状況の調査を宿題として課し、クラスではそれを発表しあい、ディスカッションを行った。また、適宜日本の状況がわかるアニメのシーンを視聴し、社会的な背景や考え方について考察した。

結果と課題

<春学期>

今学期は受講者が2名と少人数のクラスであったが、2人とも熱心で、毎回、活発にディスカッションが行われた。今学期は先学期の反省を踏まえ、学生自身が調べたり、インタビューを行ったりする活動を多く取り入れたが、学生が主体的に取り組んだテーマはその後のディスカッションも踏み込んだ話し合いができ、事前活動の有効性が確認できた。今後もより深い考察ができるように、効果的な活動のあり方を模索していきたい。

<秋学期>

今学期の学生も非常に熱心で、事前課題への取り組みも素晴らしかった。そのため、クラスでは、一つ一つのテーマについて掘り下げて話をすることができ、また、各国の状況を比較しあうことで、考えを深めることができた。

ただ、話し好き、議論好きの学生が多かったせいか、話が脱線しそうになったり、議論がヒートアップしてしまったりすることがあった。一方で、ディスカッションのテーマが日本人の視点について考える問題の場合に、「日本人でないからわからない」と考えを止めてしまう学生もいた。その都度、軌道修正をし、議論が進むように工夫を行ったが、ディスカッションがより円滑に進むように上手にコントロールする必要性を感じた。今後の課題としたい。

<演習 2>

担当者名：藤田恵

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期3名、秋学期5名

使用教材：独自教材

目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの映画やマンガを取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

日本の衣食住を理解することを目標に授業を展開した。授業では、「衣」「食」「住」から、いくつかテーマを選定し、①日本文化の導入、②母国の文化との比較、③テーマに合った内容のマンガや映画をみる、④ディスカッション・発表という順で進めていった。②と④を行う際には、母国との違いや感想を述べるだけでなく、その背景や理由まで考えさせるように工夫した。また、③の映像を見る前に、様々な観点から映像が見られるように、写真を用いて、そこから気づいたことを述べる活動を取り入れた。

結果と課題

<春学期>

春学期の履修学生は、国籍の異なる3名であった。授業では、教員からの日本文化の紹介だけでなく、自国についての発表を多く取り入れたため、日本と自国だけでなく、クラスメートの国についても知る機会となったようである。その結果、自国について、より深く考えることができるようになり、学期の初めは、自国のことを述べるだけであった学生が、学期が進むにつれて、日本やクラスメートの国との歴史的背景や、文化の差に触れるまでになった。また、発表の場が多かったことについて、学生は肯定的に捉えており、3名とも学期末に日本語を話す力が向上したと自己評価をしていた。今後も学生の知見を深め、さらに日本語能力の向上を実感できる場となるように、授業内容の改善を続けていきたい。

<秋学期>

秋学期は、J3学生が3名、J3S学生が2名で、5名のクラスであった。学生間の日本語力にやや差が見られたため、日本語での発話が難しい場合は、英語の使用を認めた。これにより、学生の発話機会は均等になり、活動への参加意欲も保たれたと思うが、日本語での講義を期待していた学生にとってはやや物足りないものになってしまったように思われる。また、学生が日本語で発話する機会を教員が削ってしまったとも考えられるため、この点を反省点として挙げたい。クラスで扱ったテーマや作品は、学生の興味をひくものであったようで、毎回の課題を見ると、日本の文化と社会への理解が深まっていることが認められた。今後も日本語を道具として使い、日本の文化と社会を学ぶ演習授業の進め方について、検討と改善を進めていきたい。

<演習3>

担当者名：栗田奈美

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期6名、秋学期7名

使用教材：独自教材

目標

プレイスメントテストでJ4、J5レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語

の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<春学期>

小説『むじな』（小泉八雲）、『鼻』（芥川龍之介）、『キッチン』（吉本ばなな）、詩、短歌、俳句・川柳を扱った。小説は場面ごとに担当者を決め、毎回1名がレビューを行った。その後、該当場面の心理描写・情景描写を取り上げ、意見交換を行った。また、映画化された『キッチン』のDVDを鑑賞し、小説との違いについて話し合った上、各自興味を持った部分についてプレゼンテーションを実施した。詩は相田みつを、短歌は「小倉百人一首」、与謝野晶子、俵万智などを取り上げて紹介した。俳句・川柳は「サラリーマン川柳」などのウェブサイトから各自が気に入ったものを選び、毎回1人ずつ発表を行った。また、俳句・川柳を作成する課題を出した。

<秋学期>

小説『むじな』、『雪女』（小泉八雲）、『注文の多い料理店』（宮沢賢治）、『トニー滝谷』（村上春樹）、詩、短歌、俳句・川柳を扱い、『トニー滝谷』では映画化されたDVDを最後に鑑賞した。授業の進め方は春学期と同様である。

結果と課題

<春学期>

授業で扱う小説は事前に配布し、発表担当者以外も必ず読んでくるよう指示していたが、今学期は特に予習をしっかりしてくる学習者が多かった。今学期から小説を総ルビとしたため、事前準備がしやすくなったものと思われる。また、発話に苦手意識を持っているためか、学期初めはほとんど口を開かなかった学習者が、小説の内容理解が進むにつれて、後半には、滑らかとは言えないものの、堂々と自分の意見を述べるようになった。今後も学習者を「自分の考えを伝えたい」という気持ちにさせる内容の教材を、選択していきたい。

一方、一部の学習者の無断欠席により、発表が予定通りに進められないことが複数回あった。ストーリーの進行上、予定の変更ができないため、そうしたことのないよう、注意を促していきたい。

<秋学期>

難易度の高さをやや危惧しながら、今学期は初めて村上春樹の小説を扱った。短編であったためにじっくりと時間をかけることができ、また春学期同様、総ルビとしたことで、学習者は予想以上に健闘し、しっかりと内容理解をした上で、教師が驚くほどの様々な解釈を展開してくれた。また、最後に確認として鑑賞したDVDが原作に非常に忠実で、小説の原文がほぼそのままナレーションとなっていたため、良い復習となった一方、結末が若干異なっていたため、学習者も比較しながら鑑賞できたようである。期末タスクからも「村上春樹の小説を最初から最後まで原文で読んだ」という達成感が感じられた。

今学期はディスカッションも毎回非常に活発なものとなったが、性格的になかなかその輪に入れない学習者もいた。教師からも働きかけを行ったが、本人の自主性に期待するしかない部分もあった。今後はそうした学習者への対応を検討したい。

2015 年度 日本語中級 授業記録

<日本語中級 A>

担当者名：金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 10 名

使用教材：独自教材

目標

J4 から J6 の学生を対象とし、学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

授業は、読解を軸に、内容確認、グループ・全体ディスカッション、個人・グループ発表を行った。扱ったテーマは、「観光地」「祭り」「江戸しぐさ」の 3 つである。読解教材は、内容は同じであるが、学生の各レベルに合わせたものを準備し、授業外で読んでくることを宿題とした。また、読解で扱ったテーマに関する作文の宿題を 2 回出し、どちらもフィードバック後に、リライトさせた。毎回の授業には TA が参加し、ディスカッションメンバー、作文のフィードバック、学生のレベル差への対応など、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

教材がレベル別に用意されていることから J4 の学生もすぐにトピックを理解することができ、話し合いに積極的に参加することができた。教員と TA がクラスにいたことで、レベルが異なる学生への対応を丁寧に行うことができた。それぞれのトピックで各自選んだテーマを発表するが、見ている人にわかりやすくするために、難しい漢字にふりがなを振ったり、英訳を添えたり、イラストを描いたりして聴衆を意識した発表をすることができた。また発表に対し、積極的にコメントする学生が多く、次の発表ではそれが活かされたものとなっていたことが印象的である。グループ活動では、それぞれが自分の役割に対し責任を持つことで、さらに日本語の文法や語彙にも注意するようになり、意味のある活動であった。残念だったのは遅刻が多かったことである。全員が時間を守るという体制で臨んでほしい。

<日本語中級 B>

担当者名：谷 啓子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 7 名

使用教材：独自教材

授業の方法

VTR「クローズアップ現代」(NHK 総合)を素材に、「①若者の消費」「②未婚化」「③育メン」の 3 テーマから現代日本社会を考えた。各テーマの流れは、0 週目：VTR に出てくる語彙シートを配布、意味調べは次回までの宿題→1 週目：テーマに関わるウォームアップワーク→前半語彙シート確認とフォロー→VTR 視聴と内容確認→2 週目：後半語彙シート確認とフォロー→VTR/内容確認→ディスカッションである。

2 週目最後～3 週目に各テーマのまとめの課題を指示した。テーマ①と③については作文(「図表の表現」や「対比の表現」等のターゲット表現や文体を指示。字数はレベル別)、②についてはミニ発表とした。最終課題として、扱った 3 テーマから最も興味を持ったものを選び、日本と比較しながら母国の現状について紹介する口頭プレゼンテーションを行った。

結果と課題

今期は 7 名であったが、多国籍で(スペイン、インドネシア、アイルランド、ドイツ、アメリカ、トルコ)、発言も多様であった。現代日本をテーマにした VTR も興味を引いたようである。ディスカッションは 2 名・3 名の小グループに分かれ、教師とティーチングアシスタント(T.A.)が入る形をとった。

語彙リスト→ディスカッション→作文のつながりをよりよくするという昨年度の反省から、ディスカッションではなるべくテーマの語彙を使い、メモをとるよう促した。また、作文の表現シートや Power Point はよりシンプルで見やすいものに修正した。結果として、J4 でもテーマの語彙やターゲット表現を意識して作文を仕上げる学生も見られた。

最終プレゼンテーションはそれぞれにテーマを絞って興味深い発表となった。レジュメの作り方をこれまでより時間を割いて説明したこともあり、レイアウトや参考サイトの書き方に配慮する学生もいた。それぞれの発表を受けて最後は自然にディスカッションになり、考えを深めることができた。

残念ながら今期は欠席・遅刻者が多く、授業の進度に影響が出た。初期段階で、複数の連続欠席者に影響を受けた感がある。新座の 1 限ということで履修者たちからは 2 限以降を望む声も聞かれたが、初回オリエンテーションでも注意を呼びかけたい。また、欠席者への配布物の対応も煩雑であったため、今後はコーラスをより活用していきたいと思う。

<日本語中級 C>

担当者名：金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：秋学期 11 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解教材を軸に、内容確認、ディスカッション、発表、作文を行った。扱ったテーマは、「若者」と「女性」である。読解教材は、J4、J5、J6 それぞれのレベルに合ったものを用意し、語彙リストを添付した。作文は、読み物のテーマに沿ったものを宿題として2回出し、フィードバック後にリライトをさせた。また、毎回の授業にはTAが参加し、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

今年度は、「若者」と「日本の外国人」というテーマを扱った。この二つのテーマは、学生の興味をひくものであったようである。分担読解では3人一組で3つのグループに分かれ、それぞれが読んだ読み物についてグループ発表を行った。このグループ発表では読んだ読み物の内容紹介、自分たちの国の事情と意見、ディスカッションという流れで進むが、レベル差がありながらもお互いが助け合い、課題をこなすことができた。また1回目のグループ発表の際司会役を決め、話し方の指導を行ったため、2回目のグループ発表ではさらに上手に司会を行うことができた。最終発表では、扱ったテーマに沿って日本人や留学生にインタビューを行った結果について発表したが、事前にスライド発表のための話し方の指導を行ったため、本番では聞きやすい発表となった。「読む、話す、書く、聞く」の4技能をすべて有効に伸ばすことができたと思われる。今後の課題として、新たな話題を用意することと、各話題で行う活動のバリエーションを考えていきたい。

<日本語中級 D>

担当者名：谷 啓子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：秋学期 8 名

使用教材：独自教材

授業の方法

年中行事を中心に、日本の四季について扱った。自ら調べ、口頭発表やディスカッション、作文など様々なスキルを使うことで運用力を伸ばすよう計画した。映像素材として、NHKのVTR「しばわんこ 和の心」を部分的に使用した。

初日オリエンテーションでは、この授業に必要な旧暦の説明や日本の時代区分、日本地理について確認し、資料を配布。比較のために履修者の国の季節についてシートに記入してもらった。その後は「冬」「春」「夏」「秋」の順に進めた。

各テーマ（季節）は2～4回から成り、「ことば調べ」の宿題→発表→VTRで確認→グループディスカッション（録音してその場でフィードバック）→小課題（作文または発表）の流れである。「ことば調べ」は、季節や年中行事に関する語彙（例：鳥居）を1～2語担当し、シートに簡潔にまとめるものである。発表では画像などの視覚資料を用意してOHCで見せながらクラスメートに説明した。

グループディスカッションは、3～4人に1人、教師またはティーチングアシスタント（TA）がつく小グループで行った。各テーマについて用意されたディスカッションポイントについて話し、それを録音したものグループ内で聞き直した。その際、発話者には発話の意図を説明してもらい、教師やTAがより適切な表現をアドバイスしたり、皆で考えたりした。今期より司会を学生に振り、一人1回は担当するようにした。

小課題は各テーマに添った内容で、作文は翌々週提出、発表は翌週とした。この小課題には回ごとにターゲットとなる表現（例：図表の説明や引用表現など）を使うよう指示した。最終課題は中級Dで扱った内容から個々にテーマを見つけ、10分程度のプレゼンテーションを行った。

なお、この授業は評価の25%は授業外で学生が自主的に行うコーラス学習でつけられる。それぞれの学生は授業外の時間に、自分のレベルに合った文法・語彙学習をコーラスで行い、UPする。教師の方で提出されたものについて採点、返却した。授業の13回目にまとめのテストを行った。

結果と課題

履修者間にレベル差はあったが、日本の四季や年中行事というテーマは、短期間しか滞在しない特外の学生たちにとって興味深かったようで、積極的に参加していた。欠席や遅刻も少なく、発表やディスカッションに楽しんで取り組む様子が見られた。

ディスカッション時、司会用シートを用意することでレベル差はあっても司会を担当できるようにしたところ、皆はりきって取り組み、個々に工夫が見られた。また、ディスカッション中メモをとり機材を操作する教師・TA側にも余裕が生まれた。

前年度の課題であったディスカッション→作文のつながりだが、今期は意識的に作文に役立つディスカッションポイントにし、作文に使えるような補足資料を用意したところ、作文の内容が深まった印象を受ける。ディスカッションに時間をかけるほど学生の達成感も得られ、続く作文も深まるため、次期はディスカッションの時間をより多くとれるよう調整したい。

なお、全10回となるコーラス学習は初年度であったが、システム上のトラブルもなく概ねスムーズであった。

2015年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

コースの概要

Business Japanese I/Aは、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法

を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。
Business Japanese I は J4、 J5 レベル、Business Japanese A は J6、 J7 レベルの学生を対象とする。

<Business Japanese I>

担当者名：栗田奈美、佐々木藍子、高嶋幸太、小柳津成訓

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：春学期 8 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

この科目は、将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの 3 本柱で展開した。

本授業の主な流れは、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いたキーフレーズの導入ならびに会話練習、③帰りのロールプレイである。①と③では、出勤・退勤時にオフィスで交わされる日常会話を練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で適切に対応できるよう、導入と練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。さらに、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も行った。

学期中 6 回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは録画をし、翌日、フィードバックを行った。

結果と課題

授業では、キーフレーズならびに会話の流れが具体的に提示されていたため、中級レベルの学習者にとって注意すべきことが明確で、効率よく学習が進んでいたように感じた。また、ほとんどの学習者にとって、日本語だけを勉強するのではなく、プロジェクトという流れの中で、商談や会議のためのコンテンツの準備という内容も重視されていたことが、やる気と達成感を与えることができ、それがよい動機付けとなっていた。そのため、学習者はゲストセッションに向けてしっかりと課題に取り組んでおり、特に入念な準備をしていた学生は、その力を十分に発揮できていたと思われる。また、フィードバックでは、セッション内で学習者が使用した日本語の表現や、ゲストの発話において十分に理解できなかった

た箇所について確認するとともに、非言語情報などのビジネスマナーに配慮した指導を行い、次の回のゲストセッションへとつなげることができた。

一方で、国際経営学専攻の正規大学院生には、専門の学習との両立に苦勞する者も多く、今年度は残念ながら、コース途中で履修辞退をする学習者も出てしまった。また、学期途中で欠席が多くなる学習者も複数見られた。専門の授業の課題や宿題等が忙しく、日本語の練習がないがしろになってしまうと、本人にとっても授業が効果的でないものとなってしまう。そのためにも、適宜、本授業を通して「何ができるようになるか」を伝え、極力、学習者のモチベーションを持続させていくことが必要であると感じた。

また、多くのプロジェクト活動ではクリエイティビティが要求され、それにエネルギーが大きく費やされた結果、口頭表現へのアテンションが低くなってしまった学習者もいた。プロジェクトと日本語の上達に不可欠な地道な練習とを、いかに両立させるかという点も今後の課題である。

<Business Japanese A>

担当者名：金庭久美子、佐々木藍子、高嶋幸太、小柳津成訓

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：春学期 1 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの 3 本柱で展開した。

本授業では、ゲストセッションに向けて課題を設定し、その課題が達成できるようにさまざまな表現を導入し、実際の現場で使えるようにしている。本年度の課題は「新製品の売り込み」「新製品販売状況報告」「取引先への謝罪と説明」「問題の対応策の検討（社内会議）」「自社説明（プレス）」等である。

結果と課題

授業では、日常のビジネス会話、会議、商談、電話の内容を十分に理解し、適切に失礼なく応対できるよう導入と練習を行った。また対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、実践的な練習を行った。その際、非言語的な要素にも焦点を当て、不適

切な行動をとらないように練習を行った。現実のビジネスに近い状況を作り出すことにより、将来の職場をイメージした活動ができた。本年度は1名のみであったが、非常に熱心で積極的な学生であったため、このコースのよさを十分に理解し、力を伸ばすことができた。昨年度から引き続き開発している上級教材についてはまだまだ改善の余地はあるが、学生にとって役に立つものであったと思われる。引き続き検討を重ね、よりよい授業としたい。

2015年度「ビジネスデザイン研究科・21世紀社会デザイン研究科プログラム」授業記録

コースの概要

ビジネスデザイン研究科、21世紀社会デザイン研究科の教員との共同担当による当該研究科の留学生向け専門科目である。2015年度から新規に立ち上げた科目で、J5～7程度の日本語運用力を想定してデザインした。

<日本の法制度と規制>

担当者名：山中伸彦（BD研究科）、池田伸子（報告書執筆担当）

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期21名

使用教材：3つのセッションごとに課題図書を提示した。

目標

日本の法制度や規制について、特にビジネスや職業、労働に関連したトピックを取り上げ、それらに関する基本的な専門知識を修得すると同時に、より高度な日本語能力の向上を目指す。

授業の方法

「日本の司法制度」、「日本の商取引と商法」、「日本の雇用制度と労働法」をトピックとして取り上げ、それぞれについての基本的な知識を修得すると同時に、それらのトピックを語る際に使われる語彙や文型について学び、自らがそれらを理解するのみでなく、それらを用いて自分の考えを論じることができるよう課題に取り組む。

結果と課題

ビジネスデザイン研究科の学生17名、21世紀社会デザイン研究科の学生4人の計21名の履修者がおり、ほぼ全員が中国語母語話者であったため、教室で中国語を使う傾向が最初見られた。教室内では日本語でコミュニケーションするようという指示で、2回目の授業からは日本語で話をするようになったが、やはり同じ母語の学生だけの構成という形には課題があると感じた。

学習者の日本語能力にはばらつきがあったが、なんとか最後まで授業を進めることができたのは、やはり山中先生とのペアでいつも授業に参加した効果が大きかったと感じている。専門的な内容に議論が進んだ時に、山中先生からのコメントがあることが、この授業の効果を一層高めていると思う。

今回、学生たちにあらかじめ課題を出し、それをプレゼンさせながら進めるというやり方が一定の効果と学習者のモチベーションを上げることがわかったので、今回はその方法を軸として授業を進めたい。

<日本の産業と経済>

担当者名：宮下篤志（BD 研究科）、山辺真理子（報告書執筆担当）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 18 名

使用教材：3 セッションのゲストごとに読解資料を指示

目標

日本の産業発展史および日本経済の状況をトピックに取り上げ、それぞれについて知ると同時に、それらのトピックを語る際に使われる語彙や文型について学び、自らがそれらを理解するのみでなく、使えるような課題を行う。

授業の方法

「日本の産業発展史Ⅰ（近代～現在）」「日本の産業発展史Ⅱ～物流・日通」および「日本経済を取り巻く状況（電通）」の講義を軸として進めた。講義は、研究科の担当教員の他、ゲストスピーカーを招き、現場の状況や、現在動いているプロジェクト等についても多様な資料を駆使して説明してもらった。講義の前には事前学習として、それぞれのトピックについて、ゲストに指定された文献を用い基本的知識や専門的な語彙、および文型をタスクシートを使用して学び、講義の後には、内容の確認やディスカッション、レポート作成などを通して理解を深めた。資料の分担読解を含む事前学習、ゲストスピーカーによる講義、事後学習という流れの中でトピックへの理解を深めるとともに、各自の調査を組み合わせることで日本語でのアウトプットの機会を設けた。BD 研究科の教員は内容面、日本語教員は、事前・事後学習を中心に主に日本語面を担当した。

結果と課題

特別外国人留学生を含めて日本語中級レベルからの履修を可とした科目だったが、履修者全員が独立研究科の大学院生たちであった。院生たちは、それぞれに自分のテーマを持っているが、日本社会や専門の基礎となる知識、およびその知識を表現する日本語が十分に身に付いてないことも多い。1年次に、内容を中心としながら日本語運用力を鍛える科目を履修することで、それ以後の研究活動が実りの多い

ものになればと、授業運営に取り組んだ。1 回目のレポート提出後に、日本語のみでなく、構成にも課題が見えたので、2 回目以降のレポートでは、事前にアウトラインを作成、ピアレスポンスを経てからの執筆とした結果、最終レポートには大きな伸びが見られた。また、発表時のレジюме作成や構成も、回を重ねるごとに改善されていったが、学生同士が互いに高めあおうという意欲を見せてくれたおかげであろう。

授業終了時のアンケートで、自分にとって学びの大きかったテーマを尋ねたところ、3 つのテーマそれぞれに一定数の学生が集まり、多様な研究テーマを持つ学生にとって、3 つのテーマ設定が妥当であることが確認された。事前学習での読解資料は学生にとって必要であっても負担の大きいものではないかと懸念した通り、授業で難しかったことの筆頭に挙がっており、次にレポート作成が続いた。解決策として、読みのストラテジーを工夫したり、時間を掛けたりするしかないと頑張った様子が語られた。

専門につながる基礎知識と、調査、口頭発表、レポート面で力がついたら実感する学生がいる一方で、「まだまだ不十分である」「時間が足りない」と焦る学生もいる。様々なバックグラウンドを持つ学生たちが、その多様性を活かすためにも、専門分野の基礎知識と日本語を組み合わせる複数の授業を履修するシステムが必要かと思う。

<日本の社会と生活・文化>

担当者名：山中伸彦（BD 研究科）、山辺真理子（報告書執筆担当）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 11 名

使用教材：『マーケティング超入門』築瀬允紀監修 2011 創成社 他

目標

日本の社会や生活、文化について、特にビジネスや職業生活に関連したトピックを取り上げ、それらに関する基本的な専門知識を習得すると同時に、より高度な日本語能力の向上を目指す。

授業の方法

「日本社会の特徴（マーケティング・ブランディングの視点から）」「日本の生活とビジネス（競争戦略）」「日本の文化とビジネス（効果的な広告戦略）」をトピックとして取り上げ、それぞれについての基本的な知識を修得すると同時に、それらのトピックを語る際に使われる語彙や文型について学び、自らがそれらを理解するのみでなく、それらを用いて自らの考えを論じることができるよう、学生たちは課題に取り組んだ。

上記 3 つのトピックに関して、マーケティングの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーからの講義を軸として、研究科教員と日本語教員の協力により授業を進めた。講義の前には事前学習として、それぞれのトピックについて基本的知識や専門的な語彙や文型を学び、講義の後には、内

容理解やディスカッション、レポート作成などを実施し、事前学習、ゲストスピーカーによる講義、事後学習という流れの中での学習を進めた。

結果と課題

特別外国人留学生を含めて日本語中級レベルからの履修を可とした科目だったが、履修者全員が独立研究科の大学院生たちであった。院生たちは、それぞれに自分のテーマを持っているが、日本社会や専門の基礎となる知識、およびその知識を表現する日本語が十分に身に付いてないことも多い。院生たちは、各自の関心に絡めて、マーケティングの視点から日本社会について学ぶ機会を楽しんでいたようだ。

3つのセッションを通してゲストスピーカーからテーマを課されたレポートは、回を重ねるごとに論理的にも日本語的にも質が上がっており、第3セッションの課題としてのプレゼンテーション「母国の事例をポジショニング戦略の視点から分析する」は、内容もプレゼンテーション力も最終課題として大きな進歩が見えるものだった。

ただ、一部の文法や発音などの日本語力に課題を抱えていた院生たちについては、レポートの添削や時折のアドバイスでは大きな修正は叶わず、日本語的な分かりにくさを抱えたままであることが残念である。研究活動と並行して日本語科目の履修が有効であろう。

<日本の政治と行政>

担当者名：吉田敏浩（21世紀社会D）、山辺真理子（報告書執筆担当）

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期9名

使用教材：独自教材

目標

日本を対象として修士論文等の研究を進める上で必要となる日本の政治と行政に関する俯瞰的な知識の習得をめざす。さらに、日本の政治と行政に関する情報の調査方法を実践的に学習し習得する。

授業の方法

日本の政治と行政の制度と実態について、基礎的な文献（高校の教科書、『現代用語の基礎知識』等）や新聞記事等の資料を使用して学習した。教室のパソコンを使用し、インターネット上に公開されている資料や図書館に所蔵されている国や自治体の各種行政資料や統計などを検索し読解する方法を学習した。それらの情報収集を通じて、様々な課題の文章を作成した。授業内容の理解を深めるためにディスカッションを実施した。

授業は、研究科教員による4回の講義セッションの前後に、日本語教員が事前学習と事後学習を行った。事前学習では、配布資料の理解を促すために、タスクシートを使用しポイントを書き出すようにし

た。その後、母国と比較しながら理解したことを発表し、語彙や表現仕様の場面を作った。講義回で示されるインターネット上の多様な資料検索については、検索した各種資料の要約や資料を用いてのレポート作成を課し、その都度添削し全体でフィードバックを行った。

結果と課題

特別外国人留学生を含めて日本語中級レベルからの履修を可とした科目だったが、履修者全員が独立研究科の院生で、その大半は 21 世紀デザイン研究科に所属していた。初回授業で各自の研究テーマが披露され、研究科教員は折に触れて、そのテーマに役立つ情報を授業に組み込んでいた。この授業では、日本国憲法を読み、日本の行政機構等の知識を得るとともに、研究に役立つ資料の検索を実践的に身に付けることが研究科教員の主目的とするところであり、日本語教員はそれが効果的に行われるよう事前、事後学習を組み立てた。

学生のふりかえりコメントには、母国の憲法さえ読んだことがなかったが、タスクシートを元に日本と母国の憲法や行政機構等を比較し、それを発表することで理解が深まり、人に説明できる日本語を獲得したことが述べられた。また、研究に必要な情報の種類や所蔵場所、検索方法などが身に付き研究活動が進んだことにも複数人が言及していた。

多量の資料のポイントを押さえ、適切に要約する練習は、研究活動に大切であるが、半期の授業では 2 回しかできなかった。添削や解説した点が次のレポートに活かされている学生が大半であったが、一部に分かりにくさがなかなか改善されない学生が残ったのは残念である。

<日本の企業経営>

担当者名：宮下篤志（BD 研究科）、丸山千歌（報告書執筆担当）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 5 名

使用教材：大野耐一（1978）『Diamond Harvard Business Review』2010.1 月号、pp50-84. 他

目標

日本の企業経営に関するトピックに取り上げ、それぞれについて知ると同時に、それらのトピックを語る際に使われる語彙や文型について学び、自らがそれらを理解するのみでなく、使えるような課題を行う。

授業の方法

「日本的経営」「日本型サービス」「グローバル化と日本企業」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家による講義を設定し、事前学習と事後学習により内容理解を深めるとともに、日本語力の向上を目指して授業を進める。

結果と課題

特別外国人留学生を含めて日本語中級レベルからの履修を可とした科目だったが、履修者全員が独立研究科の大学院生たちであった。受講生の日本語力は中級レベルで、日本語力を向上させるとともに文献に現れる社会的背景や文化的背景についての情報が必要なレベルにあるが、将来起業することを考えている学生もおり、各テーマに熱心に取り組んだ。

レポートや事後課題から見えた日本語面での課題は、レジユメの書き方や発表のしかたに加え、レポートの課題として期待されていることを読み込み、それに応える形で書く技術の習得がある。口頭運用力については、ディスカッションは宮下先生のファシリテートによりうまく進んだが、担当した資料の読み込みと、自分なりの理解を日本語で伝える力をつけていくことも今後の課題であると思われる。研究活動と並行して日本語科目の履修を薦めたい。

2015年度 日本語基礎<Academic Japanese>/日本語 授業記録

コースの概要

日本語基礎<Academic Japanese>/日本語は、学部の正規留学生を対象としたコースであり、第二外国語として日本語を選択した留学生のみが受講する科目である。主に大学で必要とされるレポート作成、プレゼンテーションのスキル獲得を目指し、全体でゼロからレポートを作り上げ、最終回にはレポートを基にしたプレゼンテーションを実施する。レポート・プレゼンテーション作成のプロセスの中で必要な項目に触れ、練習・活動を展開することでスキルを獲得していく。

春学期の日本語基礎1では、文章表現、構成に関する基礎的な項目を学び、秋学期の日本語基礎2では、春学期の内容を踏まえてさらに高度なスキルを学ぶ。詳細な内容は以下に示す通りである。

日本語基礎1<Academic Japanese 基礎>/日本語1

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。具体的には、大学での授業参加に必要なスキル、わかりやすく話すためのスキル、レポート形式、機能別文型などについて学ぶ。

授業の方法

前半は大学でのレポート作成をめざし、レポートとは何か、テーマの絞り込み、マッピング、構成の作り方、文献検索の方法、引用のしかた、図表提示の仕方、文章の要約、文章表現やねじれ文、読点の使い方などを扱った。同時にミニスピーチを取り入れ、わかりやすく話すスキルを学んだ。

後半は、出来上がったレポートの添削を学生同士と教師で繰り返し、完成度の高いレポートを作成した。またレポートの内容を基にパワーポイントを使用してプレゼンテーションができるように進めた。

授業最終回では、プレゼンテーション、レポート作成に関する活動をふり返り、互いに半期の学びを確認した。

[文学・法学]

担当者名：長島明子／長谷川孝子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：14 名

使用教材：独自教材

結果と課題

これまでに日本語でレポートを書いたことがない学生ばかりだったため、課題に取り組む過程では、できるだけ個別にも対応し確認しながら授業を進めていった。ほとんどの学生が真面目に課題に取り組み、着実に進めていけたが、一方でなかなかテーマを決められず何度もテーマを変更した学生もいた。全体としてはレポート作成の全体の流れはつかめたようである。今後は論理的展開など構成を特に注意して指導していきたい。

プレゼンテーションについても、ほとんど初めての学生であったが、積極的に授業に参加し、2 回のミニスピーチと最終プレゼンテーションを通じて徐々に力をつけていく学生が多く見られた。集中して授業に取り組み、FB についても真剣に受け止めながら、クラスメートの発表と自らの発表から学んでいったように思う。春学期は、プレゼンテーションの準備や発表の全体像をつかみ、自分の弱点を知ることができたと思うので、次回は個々の弱点の克服、また、何よりも早めの準備や練習をすることを実行できるような指導が課題となるだろう。そして、内容についても、相手をひきつけるためにはどうすべきかをより深く考えていくとよいと思われる。

[経済・理]

担当者名：小島佳子／嶋原耕一

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：2 名

使用教材：独自教材

結果と課題

中国出身学生 2 名のクラスで、互いに助け合いながら非常に真面目に授業に取り組んでいた。授業の課題をこなしていく中で、これまでのレポートやプレゼンの知識をさらに深めていったようだった。2 人ともテーマに熱心に取り組むあまり、なかなかテーマ範囲を絞りきれず、レポートの焦点化が難しいようだった。しかし最終的には、大きな論理的飛躍もなく、前期としてはよく書けたレポートになった。

ただその分、プレゼン準備に時間をかけられなかったようで、焦点が絞りきれず、時間もかなりオーバーした最終発表になってしまった。学期中のミニスピーチでは素晴らしい発表ただけに、非常に残念だった。

そのため後期は、初期段階からテーマを絞り、説得力ある論理展開ができるよう指導していきたい。また、レポート内容を早めに固め、プレゼン準備にも充分時間をかけるようにしたい。

[社会・経営]

担当者名：嶋原耕一／清水澤子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：19 名

使用教材：独自教材

結果と課題

大学のレポートとプレゼンについて、アウトラインの書き方や論理の進め方、それらに必要な日本語の表現などに関する知識を順序だてて学んでいくことができたと思う。ただテーマの絞込みやアウトラインに時間がかかる人が多く、本論の書き方や構成の仕方を指導するのに、十分な時間があつたとは言いがたい。また 19 名クラスだったこともあり、一人一人に直接指導する時間も十分に取れなかった。今学期目標とした形式面については、最終的にほとんどの学生が整えることができたように思う。

プレゼンではミニスピーチ 1・2 でも全員が発表するのにかなりの時間がかかってしまった。最終プレゼンでは当初の予定の 2 週間をあらかじめ 3 週に組み直したが、発表準備が遅れ最終日になる学生もいたことから、最終日は 8 名の発表となり、昼休みに食い込んだ上に十分な質疑の時間が取れなかった。テーマの絞り込み・アウトライン作成に手間取った学生はレポート・プレゼンともに準備の時間が足りなくなり、十分なものとならなかったようだ。教師の側も次第に進度が異なってきた学生に十分な指導ができなかったことも事実である。もう少し適正なクラス規模であつたらと思うとともに、後期は内容面もさらに深めることができるよう、時間管理に気をつけ、多人数に対する指導を工夫しながら、授業に臨みたい。

[観光・映像]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：8 名

使用教材：独自教材

結果と課題

今期も、レポート、プレゼンテーションをほとんど経験したことがない学生たちの集団だったが、毎回の授業の課題をこなしていった結果、どのように課題を仕上げるかを詳しく学んでいった。また、授業に参加していた学生たちはどのようにすれば自分の考えをより分かりやすく説得力を持って表現できるかを理解し、具体的に学んでいったと思う。同じテーマであってもレポートとプレゼンテーションでは伝え方が変わってくることに気づき、工夫と努力が見られた。

今期は8名のうち1名が再履修の学生で、数回のみ出席にとどまり、国際センターと連絡を取りサポートしたが、来年度に履修を持ち越したことが残念である。それ以外の7名は、まじめに課題に取り組んだ。中国からの4名の学生のうち1名は4月に来日したばかりで、日本語の運用力に課題を抱えており、丁寧に指導する必要がある。韓国からの学生のうち1名は、引用と自分の意見の示し方にてこずっていた。ただ、どの学生も参考文献や統計資料を読み込み、三部構成のレポートを期限通りに完成させ提出した。また、口頭発表の授業においては、スピーチとプレゼンテーションを通して一定の条件の中で聞き手にわかりやすく主張を伝える方法や聞き手への配慮がいかにか大切にすることを学んだ。

授業に参加していた学生たちの学期末の振り返りでは、この授業で学んだことが別の授業に生かされ役立っていることが語られ、日本語基礎が学生にとって有効に機能していることが確認できた。後期は前期に習得したことを活かし、更にレベルアップを図りたい。

[心理・福祉]

担当者名：山辺真理子／川端芳子

授業コマ数：週2コマ

受講者数：7名

使用教材：独自教材

結果と課題

レポート、プレゼンテーションを全く経験したことがない学生もある学生も、毎回の授業の課題をこなしていった結果、どのように課題を仕上げるかを詳しく学んでいった。また、どのようにすれば自分の考えをより分かりやすく説得力を持って表現できるかを理解し、具体的に学んでいったと思う。同じテーマであってもレポートとプレゼンテーションでは伝え方が変わってくることに気づき、工夫と努力が見られた。特に口頭発表においては、日常の口頭表現力があってもアカデミックな発表を論理的に進めるためには、的確な表現を身に付け、事前に十分な準備が必要であることを学んだ。

コミュニティ福祉学部2名、現代心理学科3名、スポーツウェルネス科2名の計7名は、すべて男子学生で韓国出身3名、中国出身4名と互いの異質性を意識した感じでスタートしたクラスだったが、プレゼンテーションやレポートの輪読を通じて学び合い認め合う仲間意識が育っていった。数冊の文献を黙々と読み、基礎知識を蓄えたのち、テーマを絞っていく学生と初めてのレポート作成に戸惑っている

学生がいたが、多様なテーマ設定にお互いを楽しんでいたようだ。今期の授業を通して、各学生の視野も広がったのではないかと思う。後期は前期に学んだことを活かし、更にレベルアップを図りたい。

日本語基礎 2 <Academic Japanese 基礎>/日本語 2

目標

日本語 1 で学んだ基本的スキルを定着させるとともにその応用を目指す。具体的には、日本語 1 よりさらに実践的なスキルを身に付けるため、プレゼンテーションスキル、資料検索の方法、テーマからレポートのまとめ方について学ぶ。

授業の方法

前半は日本語基礎 1 で扱ったレポート作成の内容をもとに、要約、引用、図表解説などの復習をすると共に、対比と比較、列挙、同意と反対、変化の形容、課題・帰結の提示などを取り上げ、より論理的で正確な表現ができるようにした。また、分かり易く話すためのスキルとして、時事問題に関するミニスピーチ、パワーポイントを使った図表の説明を実施した。

後半は、レポートのアウトライン、序論、本論の一部をその都度発表し合い、構成や論旨の見直しを繰り返すことで、完成度の高いレポートが作成できるようにした。口頭発表の授業においては、レポートの内容を基にパワーポイントを使用してプレゼンテーションを行った。春学期より分かり易いプレゼンテーションを目指すために、図解の仕方、発表の構成、口頭能力スキルを学んだ。なお、秋学期のレポートテーマは自由とした。

[文学・法学]

担当者名：長島明子 / 金庭久美子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：8 名

使用教材：独自教材

結果と課題

プレゼンテーションは、各自が先学期に学んだことを踏まえ、課題に取り組んでいった。人前で話すことに慣れ、余裕ができたことで、アピール力が増し、内容が聞き手によく伝わるようになった。最終プレゼンテーションでは、発表のしかたやスライドなどに工夫が見られた。ただ、何人かの学生は欠席や課題の提出が遅れ、指導が十分にできなかった。今後はこのような学生に対して、早い段階から準備するよう、指導していきたい。

レポートに関しても、先学期よりも一段階上を目指して書き進めていった。「レポート全体で何が言いたいのか」を初めの段階からよく考え、途中経過の時点でも毎回話し合うことで、一貫性と構成面で

見事に上達した学生が多かった。そして、内容面も、個性的で興味深いものにすることができた。しかしながら、プレゼンテーションと同様、欠席が多い学生は課題に真剣に取り組むことができなかった。今後も、途中で力尽きてしまう学生の問題をどうするか、教師間で話し合いながら指導していこうと考えている。

[経済・理]

担当者名：小島佳子／清水澤子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：2 名

使用教材：独自教材

結果と課題

春学期から引き続き中国人留学生 2 名のクラスであり、途中モチベーションが下がることもあったが、二人で励ましあいながらレポートを完成させる様子を見ることができた。モチベーションについては、この授業を履修することで何ができるようになるのか、教師としてもっと伝えていく必要性を感じた。テーマの絞込みには時間がかかったが、学生数が 2 名だったことで、十分に時間を取りテーマを検討することができた。テーマを他の学生や教師と検討する時間は、なかなか他の授業では取れないと思うので、学ぶことも多かったと思う。

レポートでは、引用や図表の書き方など、授業で学んだことがなかなか生かせておらず、その都度指摘してきたため、最終的には学んだことを使ったレポートが書けるようになった。しかし、使った引用や図表の妥当性があまり熟慮されておらず、残念だった。今後は、形式ばかりでなく、妥当性までを十分指導していきたい。

また、プレゼンテーションでは、内容を整理し文字で提示することはできていたが、図や表の作り方であまり工夫が見られなかった。効果的な情報の伝え方、提示の仕方についての指導を、今後の課題としたい。

[社会・経営]

担当者名：小島佳子／清水澤子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：14 名

使用教材：独自教材

結果と課題

春学期に学んだことを確認したり発展させたりしながら、多くの学生がレポートの書き方とプレゼン

テーションの仕方を着実に学ぶことができたと思う。ただモチベーションが低く休みがちになる学生もいたため、この授業を履修することで何ができるようになるのか、教師としてもっと伝えていく必要性を感じた。また18名クラスだったため、一人一人の進捗状況を見て直接指導する時間が取れず、遅れている学生のフォローが難しかったことも課題である。時間配分や授業の進め方を、工夫していきたい。

プレゼンテーションでは、パワーポイントでの提示の仕方に力を入れすぎ、内容がおざなりになっている学生もいた。もう少し発表前に学生の進捗状況を見て回り、内容についてもフィードバックすることができればと思う。レポートが進んでいる学生は、やはり内容面でもすばらしいプレゼンテーションを見せてくれた。また18名のクラスで時間配分という課題はあったものの、学生がクラスメートのプレゼンテーションを多く見ることはできたのは、よかったと思う。情報の伝え方や工夫が必要な点など、他のプレゼンテーションから学ぶことも多かったと思われる。

[観光・映像]

担当者名：山辺真理子／川端芳子

授業コマ数：週2コマ

受講者数：5名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期に学んだレポート作成とプレゼンテーションの方法をふまえ、各自が興味のあるテーマを自由に選び、再度、課題に取り組んだ。前期で不十分だった点の反省を活かし、全体的には余裕を持って作業を進められたと思う。

レポート作成においては、興味を持っているテーマについて順調に書き進めていく学生がいる一方で、大きなテーマに向き合い、自分で焦点を絞り論理的に展開することに苦労した学生もいたが、長期欠席の再履修の学生を除き、みなレポートを完成させることができた。どちらの学生もレポート作成を通して、テーマ選びや全体の構成、使用データの取捨の重要性を学べたようである。また、授業のふりかえりでは自己流の書き方では論理的で説得力のある文章が書けないことがわかったという感想が多く聞かれ、テキストで学んだ論文作成の表現・方法を用いて資料解説や全体の組み立てを考えることの必要性も実感できたようだ。今後のレポート作成に活かしてほしい。

口頭表現においては、ほとんどの学生が学んだことを一つずつ身に着けながら最終プレゼンテーションにつないでいき、十分に準備された完成度の高いプレゼンテーションを行った。一部に体調不良等で、不十分なプレゼンテーションを行った学生もいたが、総じて初年次教育としての、学びは達成したようだ。登録は8名だったが、再履修の学生が1回のみのお出席で履修放棄してしまったことは残念である。年度末のふりかえりでは、他学生のプレゼンテーションや自分のプレゼンテーション録画から多くの学びを得たことや自分なりの進歩を実感できていること、今後への抱負が語られ、学びの基礎固めができた

ことが確認された。

[心理・福祉]

担当者名：山辺真理子／川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：7 名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期で学んだレポート作成とプレゼンテーションの方法をふまえ、各自が興味のあるテーマを自由に選び、再度、課題に取り組んだ。前期で不十分だった点の反省を活かし、全体的には余裕を持って作業を進められたと思う。

レポート作成においては、どの学生もテーマに関する資料収集や文章全体の構成、内容の検討に大変熱心に取り組んだ。自分の帰結の論拠となる資料探しに時間がかかり、執筆作業がなかなか進まない学生もいたが、全員レポートを完成させることができた。授業のふりかえりでは、単に書きたいテーマで書くのではなく、形式や適切なデータをそろえ、ある条件のもとで自分の論を展開して書くことの重要性を学んだという感想が聞かれ、レポート作成の基本を身に付けることができたと思う。今後の文章作成に活かしてほしい。

口頭表現においては、ほとんどの学生が学んだことを一つずつ身に着けながら最終プレゼンテーションにつないでいき、十分に準備された完成度の高いプレゼンテーションを行った。ミニスピーチの題材やパワーポイントスライドの構成にもさまざまな工夫がされ、論理的な構成力の伸びが表現されていた。プレゼンテーション時には、積極的に質問や意見交換をし、互いを尊重しつつ学びあう姿勢が見られた。年度末のふりかえりでは、他学生のプレゼンテーションや自分のプレゼンテーション録画から多くの学びを得たことや自分なりの進歩を実感できていること、今後への抱負が語られ、学びの基礎固めができたことが確認された。

2. Placement Test 実施報告

【春学期】

春学期 プレイスメントテスト実施日

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1. 新規(筆記テスト): | 2015年3月26日(木) |
| 2. 新規(面接): | 2015年3月27日(金) |
| 3. 継続(筆記テスト): | 2015年3月30日(月) |
| 4. 特別措置: | 2015年4月8日(水)・9日(木) |

2015年度春学期

| | | 新規 | | 継続 | |
|----------------|-------|----|----------|----|----------|
| | | 特外 | 正規 院生 | 特外 | 正規 院生 |
| プレイスメントテスト受験辞退 | | 1 | 0 | 4 | 1 |
| プレイスメントテスト① | | 9 | 0 | 5 | 2 |
| プレイスメントテスト② | 受験 | 37 | 15 | 46 | 5 |
| | 受験不要* | | | 1 | 1 |
| 受験者合計 | | 61 | | 58 | |
| 日本語科目履修者 | | 45 | 8 | 44 | 4 |

* 受験不要: ・すでに全カテゴリーでJ8レベルに達しているため

前期プレイスメントテスト結果 * 網掛2クラス体制

| | |
|-----|----|
| J0 | 7 |
| J1 | 8 |
| J1S | 10 |
| J2 | 4 |
| J2S | 2 |
| J3 | 2 |
| J3S | 2 |

| | | | | |
|--|-------|----|----|-------|
| | 文法・文型 | 読解 | 作文 | 聴解・会話 |
|--|-------|----|----|-------|

| | | | | |
|----|----------------|----|----|----|
| J4 | 9 | 10 | 8 | 8 |
| J5 | 20 | 17 | 22 | 19 |
| J6 | 20 | 11 | 23 | 19 |
| J7 | 21 | 15 | 17 | 22 |
| J8 | 8 (うち条件付き 8 名) | | | |

<春学期総評>

プレイスメントテストは特に問題なく実施された。プレイスメントテストの結果、J6 作文が大幅に定員を超過したため、2 セクション体制で授業を展開した。J4 聴解会話は 2 セクションでの展開を計画していたが、1 セクションで展開する変更を行った。

【秋学期】

秋学期 プレイスメントテスト実施日

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1. 新規(筆記テスト): | 2015 年 9 月 8 日(火) |
| 2. 新規(面接): | 2015 年 9 月 9 日(水) |
| 3. 継続(筆記テスト): | 2015 年 9 月 10 日(木) |
| 4. 特別措置: | 2015 年 9 月 17 日(木) |

| 2015 年度秋学期 | | 新規 | | 継続 | |
|----------------|-------|-----|------|----|------|
| | | 特外 | 正規院生 | 特外 | 正規院生 |
| プレイスメントテスト受験辞退 | | 6 | 0 | 2 | 0 |
| プレイスメントテスト① | | 35 | 3 | 0 | 1 |
| プレイスメントテスト② | 受験 | 65 | 9 | 17 | 9 |
| | 受験不要* | | | 1 | 3 |
| 受験者合計 | | 112 | | 27 | |
| 日本語科目履修者 | | 95 | 7 | 16 | 10 |

* 受験不要: ・すでに全カテゴリーでJ8レベルに達しているため

秋学期プレイスメントテスト結果 * 網掛 2 クラス体制

| | |
|-----|----|
| J0 | 28 |
| J1 | 10 |
| J1S | 6 |

| | | | | |
|-----|-----------------|----|----|-------|
| J2 | 11 | | | |
| J2S | 7 | | | |
| J3 | 9 | | | |
| J3S | 8 | | | |
| | 文法・文型 | 読解 | 作文 | 聴解・会話 |
| J4 | 5 | 6 | 5 | 7 |
| J5 | 16 | 13 | 16 | 18 |
| J6 | 18 | 15 | 15 | 15 |
| J7 | 15 | 12 | 16 | 20 |
| J8 | 16 (うち条件付き 6 名) | | | |

<秋学期総評>

プレイスメントテストは特に問題なく実施され、特に時間割変更も生じなかった。

国別に見た場合の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。

2015 年度春学期

| | 国籍 | 人数 |
|---------|---------|----|
| 特別外国人学生 | アイルランド | 2 |
| | アメリカ | 12 |
| | イギリス | 1 |
| | インドネシア | 3 |
| | ウガンダ共和国 | 1 |
| | オランダ | 4 |
| | カナダ | 2 |
| | 韓国 | 5 |
| | サウジアラビア | 2 |
| | スウェーデン | 1 |
| | スペイン | 2 |
| | タイ | 2 |
| | 中国 | 13 |
| | 中国(台湾) | 5 |
| | 中国(香港) | 5 |

2015 年度秋学期

| | 国籍 | 人数 |
|---------|---------|----|
| 特別外国人学生 | アイルランド | 2 |
| | アメリカ | 19 |
| | インドネシア | 2 |
| | オーストラリア | 1 |
| | オーストリア | 1 |
| | オランダ | 3 |
| | カナダ | 5 |
| | 韓国 | 6 |
| | シンガポール | 1 |
| | スウェーデン | 3 |
| | スペイン | 3 |
| | スロバキア | 1 |
| | タイ | 2 |
| | 中国 | 21 |
| | 中国(台湾) | 3 |

| | | |
|----------------------|----------|-----------|
| | ドイツ | 9 |
| | トルコ | 1 |
| | ニュージーランド | 1 |
| | n | |
| | ノルウェー | 2 |
| | フィリピン | 1 |
| | フィンランド | 1 |
| | フランス | 10 |
| | ベトナム | 1 |
| | ベルギー | 2 |
| | マレーシア | 1 |
| | | |
| 特別外国人学生 合計 | | 89 |
| 正規留学生 (大学院) | タイ | 1 |
| | 台湾 | 2 |
| | タンザニア | 1 |
| | 中国 | 4 |
| | フランス | 1 |
| | ベトナム | 1 |
| | 南アフリカ | 2 |
| 正規留学生(大学院) 合計 | | 12 |

| | |
|--------------------|-----|
| 2015 年度春学期日本語履修者合計 | 101 |
|--------------------|-----|

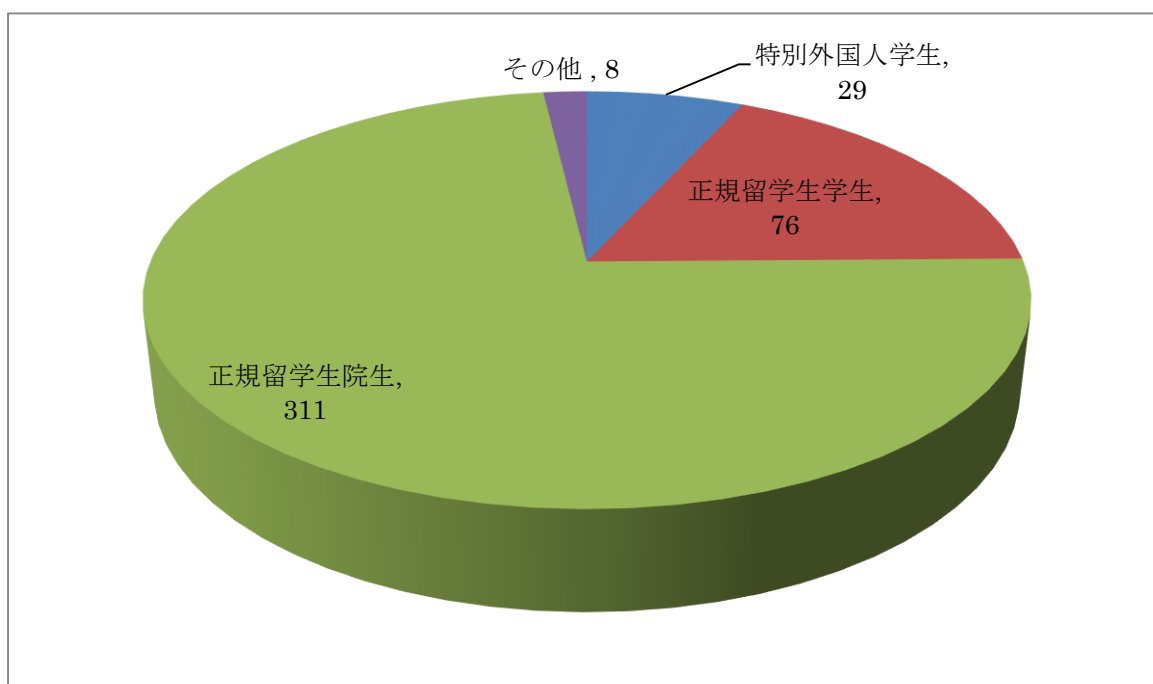
| | | |
|----------------------|----------|------------|
| | 中国(香港) | 2 |
| | 中国(マカオ) | 1 |
| | デンマーク | 10 |
| | ドイツ | 13 |
| | ニュージーランド | 3 |
| | ノルウェー | 1 |
| | フィリピン | 2 |
| | フィンランド | 3 |
| | フランス | 15 |
| | ベルギー | 1 |
| | マレーシア | 1 |
| | ロシア | 1 |
| 特別外国人学生 合計 | | 127 |
| 正規留学生 (大学院) | アメリカ | 1 |
| | ウガンダ共和国 | 1 |
| | タイ | 2 |
| | 台湾 | 2 |
| | タンザニア | 1 |
| | デンマーク | 1 |
| | ドイツ | 1 |
| | フランス | 3 |
| | ベトナム | 2 |
| | 南アフリカ | 2 |
| モロッコ | 1 | |
| 正規留学生(大学院) 合計 | | 17 |

| | |
|---------------------|-----|
| 2015 年度秋学期 日本語履修者合計 | 128 |
|---------------------|-----|

3 2015年度 日本語相談室実施報告

2015年度 日本語相談室利用状況(2015年4月10日～2月4日)

【相談者所属別利用件数】



これまで日本語相談室の予約は事務局で対面で受け付ける方式を取ってきたが、2016年度から web 予約システムを導入した。その結果、日本語相談率の稼働率は、2011年度比で294.4%、2014年度比で178.9%と飛躍的に伸びた。学生への周知は、昨年度と同じように、学生への直接の呼びかけに加えて、日本語相談室についての教員向けのちらしを作成するとともに、国際センター委員会で各部局の先生がたに日本語相談室の広報を行った。

相談者の所属別でみると、これまで同様に正規大学院留学生の利用がもっとも多く、またその割合が大きくなる傾向も続いている。正規大学院生は、日本語科目を履修しない学生が多いが、ゼミ発表、修士論文、博士論文など日本語による発信活動が、研究活動の重要な部分を占めていることから日本語支援へのニーズが高く、繰り返し利用する傾向がある。指導教員が日本語相談室利用を促すケースが見られるようになってきているようで、月別利用件数を見ても、正規大学院生がコンスタントに利用している様子が見て取れる。

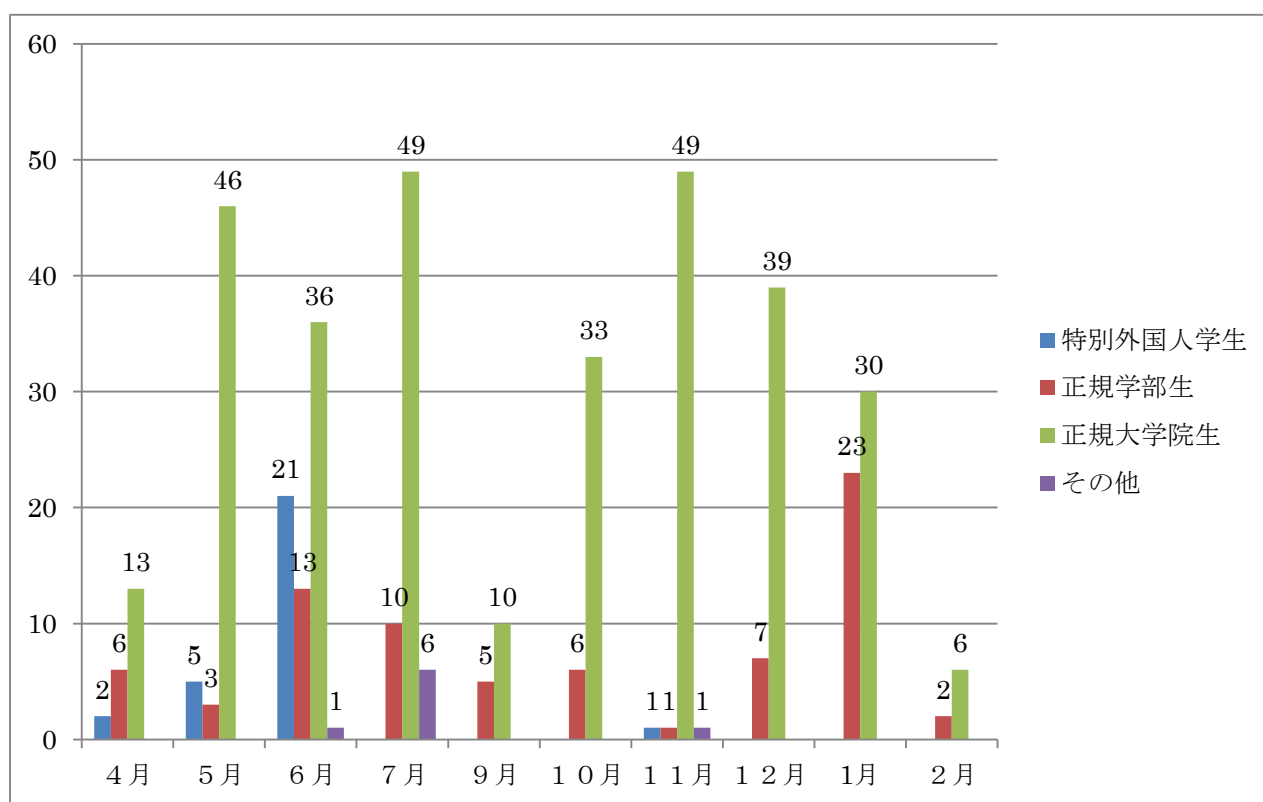
特外生については、春学期に日本語教育センター主催の留学生のための日本語スピーチコンテストが

あることにより、相談件数が多い傾向があるが、2015年度も同じ傾向が見られた。特外生は半年から1年在籍する留学生たちである。スピーチコンテストなど定例のセンター企画を一つの機会ととらえて、授業外の日本語学習サポートを周知し、また利用を広げていくようにしていきたい。

正規学部留学生の相談件数は、2014年度は51件であったのが、2015年度は76件と数字を伸ばし、ここ数年増加傾向が見られる。学期末の利用が多いという傾向は2015年度と変わらない。2015年度も、引き続きホームページでの周知に加え、ニュースレターによる広報を展開したことによる効果かと思われる。正規学部留学生の日本語科目履修生については、2016年度からスピーチコンテストへの参加が認められるので、さらに利用件数が増える可能性がある。

【月別推移】

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 合計 |
|---------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|-----|
| 特別外国人学生 | 2 | 5 | 21 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 29 |
| 正規学部生 | 6 | 3 | 13 | 10 | 5 | 6 | 1 | 7 | 23 | 2 | 76 |
| 正規大学院生 | 13 | 46 | 36 | 49 | 10 | 33 | 49 | 39 | 30 | 6 | 311 |
| その他 | 0 | 0 | 1 | 6 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| 月別合計 | 21 | 54 | 31 | 65 | 15 | 39 | 52 | 46 | 53 | 8 | 424 |



【学部・研究科別 相談キャンパス別／利用者実数・利用件数】

学部・研究科別の利用状況を見ると、学部生はここ数年の傾向と同様に文学部、社会学部の利用件数が多いのに加え、現代心理学部の学生の利用が多くなった。大学院生はどの研究科も利用件数が伸びているが、特にビジネスデザイン研究科、21世紀社会デザイン研究科の学生がよく利用したようである。2015年度から両研究科の科目を日本語教育センター教員が共同担当したことにより、学生にも教員にも日本語相談室の存在と利便性が認識された可能性がある。

【所属別利用件数】

| | | 実質 利用 人数 | 合計 利用 回数 | 相談キャンパス | |
|------------|-----------------|----------------|----------------|---------|----|
| | | | | 池袋 | 新座 |
| 特別外国人学生 | | 24 | 29 | 29 | |
| 正規 学部生 | 文学部 | 10 | 16 | 16 | |
| | 経済学部 | 2 | 2 | 2 | |
| | 社会学部 | 14 | 28 | 27 | 1 |
| | 法学部 | 3 | 6 | 5 | 1 |
| | コミュニティ福祉学部 | 1 | 2 | 2 | |
| | 経営学部 | 4 | 7 | 2 | 5 |
| | 現代心理学部 | 6 | 15 | 3 | 12 |
| 正規 大学院生 | 文学研究科 | 13 | 36 | 35 | 1 |
| | 観光学研究科 | 11 | 33 | 11 | 22 |
| | ビジネスデザイン研究科 | 14 | 30 | 21 | 9 |
| | 異文化コミュニケーション研究科 | 17 | 84 | 72 | 12 |
| | 21世紀社会デザイン研究科 | 15 | 56 | 55 | 1 |
| | 経営学研究科研究科 | 14 | 63 | 55 | 8 |
| | コミュニティ福祉学研究科 | 5 | 9 | 2 | 7 |
| 特別外国人学生 | 計 | 24 | 29 | 29 | |
| 正規学部生 | 計 | 40 | 76 | 57 | 19 |
| 正規大学院生 | 計 | 89 | 311 | 251 | 60 |
| その他 | 計 | 1 | 1 | 1 | |

| | | | | | |
|--|----|-----|-----|-----|----|
| | 合計 | 153 | 424 | 345 | 79 |
|--|----|-----|-----|-----|----|

* 新座キャンパスでの利用は、春学期 27 件のうちテレプレゼンスは3件、対面は 24 件、秋学期 48 件のうちテレプレゼンスは 14 件、対面は 34 件で利用。

池袋、新座の各キャンパスに所属する学生の利用状況を見ると、新座キャンパスの利用が 2013 年度は 2 件、2014 年度は 26 件であったのに対し、2015 年度は 79 件と利用が増えた。新座キャンパスにおいても日本語相談室が認知されつつある。

【曜日・時限別 利用件数および相談内容の内訳】

相談内容としては、卒業論文、修士論文、博士論文と、レポート、授業内での発表に関する相談のほか、エントリーシートの添削など就職活動に関連する相談が多かった。相談件数が激増する中で、本学の学生生活の中でもアカデミックな活動に対する支援が大きな割合を占めていることには変わりはないが、就職活動のための日本語相談としての機能も重要になりつつある。

2015 年度春学期

(池袋キャンパス)

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-----|----|----|----|----|----|
| 2 限 | 26 | 20 | 25 | | 25 |
| 3 限 | 11 | | | 18 | 17 |
| 4 限 | | | 3 | 21 | 18 |

(新座キャンパス)

| 月 | 火 | 水 |
|---|----|---|
| | 14 | |
| 3 | 10 | |
| | | |

2015 年度秋学期

(池袋キャンパス)

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-----|----|----|----|----|----|
| 2 限 | 23 | 16 | 23 | | |
| 3 限 | | | | 18 | 20 |
| 4 限 | | | 24 | 15 | 22 |

(新座キャンパス)

| 月 | 火 | 水 |
|---|----|---|
| | *4 | |
| 6 | 22 | 8 |
| | 12 | |

*火曜日 2 限は、2015 年 10 月 13 日から池袋テレプレゼンスとして開室した。

【相談内容別内訳】

| | |
|--|----|
| | 件数 |
|--|----|

| 相談内容 | 春学期 | 秋学期 | 計 |
|------------------------|------------|------------|------------|
| 卒業・修士・博士論文（研究計画書を含む） | 26 | 111 | 137 |
| 就職活動（エントリーシート添削など） | 98 | 2 | 100 |
| レポート添削（授業、ゼミ等） | 25 | 35 | 60 |
| スピーチコンテスト | 28 | 0 | 28 |
| 奨学金・研究費申請書類添削（面接練習を含む） | 8 | 24 | 32 |
| 発表指導（授業、ゼミ等） | 18 | 4 | 22 |
| 学会発表・予稿集・投稿論文 | 4 | 9 | 13 |
| 学習方法指導 | 0 | 2 | 2 |
| 日本語能力試験対策指導 | 1 | 0 | 1 |
| その他 | 5 | 23 | 28 |
| 合計（除くキャンセル） | 208 | 205 | 413 |

注： 学期 5 件、秋学期 5 件の無断キャンセルがあったが、表中には含めない。

日本語相談室担当者コメント

<池袋>

開室以来、日本語相談室の利用件数は年々増加しているが、Web 予約システムを導入したことにより、さらに利用者が増え、春学期は 213 件、秋学期は 210 件の利用があった。

主な相談内容については、昨年同様、スピーチコンテストの原稿や論文やレポートの添削も多かったが、特に顕著だったのは、春学期、就職活動の開始時期が後ろ倒しになった影響で、エントリーシートの添削が格段に増加した点である。利用者は、計画的に相談室を利用し、何度も添削を受けることで、エントリーシートの完成度を上げていくとともに、就職活動に必要な日本語能力を身につけていった。

また、今年度は、事前に相談資料を提出しやすくするために、相談室の入り口に提出用のポストを設置した。その結果、学生の利便性は高まったが、昨年度の課題として挙げた、大量の論文を一度に提出する点については今年度も課題として残った。そこで、次年度の改善に向けて、予約受付のメールの中に、内容や分量によっては、数回の相談が必要な場合もある旨の記述を加えることにした。

<新座>

今年度は新座キャンパスにおける周知が行き届き、春学期 24 件だったのが、秋学期には 38 件に増えた。また、秋学期の新座キャンパスの利用数は池袋キャンパスにおける利用数とほぼ同数になった。利用内容も多岐にわたり、論文指導、奨学金申請書類の添削、学会発表、レポート添削等のために利用さ

れている。利用した学生からは来年度も引き続き、来室したいという声があり、今後も池袋同様の利用が見込まれる。

<テレプレゼンス>

今年度はテレプレゼンスの利用が増え、テレプレ室での利用が 33 件（テレプレ利用 15 件、対面 18 件）であった。アンケートでは、テレプレを実際に行った学生からは満足したとの回答があり、利用しなかった者もテレプレを知っていると答え、次回は利用したいと答えている。学生のニーズも高くこれからはテレプレゼンスが活用されていくものと思われる。ただし、テレプレゼンスを行うためには画面に映し出す原稿のやりとりをしなければならない。今年度は整備されておらず、実際に指導が始まるまで時間を要した。今年度の反省を踏まえ、メディアセンターに設備の拡充を要望し、次年度はこの問題が解決される見込みである。

【2011 年度—2015 年度 利用件数推移】

| | 2011 年度 | 2012 年度 | 2013 年度 | 2014 年度 | 2015 年度 |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 特別外国人学生 | 26 | 45 | 62 | 46 | 29 |
| 正規学部生 | 29 | 18 | 33 | 52 | 76 |
| 正規大学院生 | 89 | 90 | 86 | 138 | 311 |
| その他 | | | | 1 | 8 |
| 合 計 | 144 | 153 | 181 | 237 | 424 |
| 増 減 | 100 | 106.3 | 125.7 | 164.6 | 294.4 |

日本語教育センターが設置された 2011 年度の相談件数を 100 とした場合、2012 年度以降着実に利用件数を伸ばしてきたが、ウェブ予約システムを導入した 2015 年度は 2011 年度比 294.4 と大きく数字を伸ばした。昨年度と比較しても約 1.8 倍の利用があった。来室学生に対する丁寧な指導と、上述の学生および教員に向けた広報活動に加え、web 予約システムの導入が、利用者にとって利便性が上がったことが推察できる。

ウェブ予約システムの導入は、教職員の業務の合理化も視野に入っていたことから、2015 年度はウェブ予約システムの運用についての検討を、FD の課題として取り組んできた。実務委員会打ち合わせ、および FD 委員会に、課題の共有を解決方法の検討を行い、学生と教職員にとって利便性が確保され、かつ合理的な運用方法をほぼ確定することができた。

4. 2015 年度 立教漢字検定実施報告

| | 試験日 | 申込締切日 | 申 込 | | 受 験 | | 合 格 | |
|-----|---------------|--------------|----------|-----|----------|-----|----------|-----|
| | | | | | | | | |
| 第1回 | 5月13日 (水) | 4月15日 (水) | 特別外国人学生 | 18名 | 特別外国人学生 | 17名 | 特別外国人学生 | 9名 |
| | | | 上級 | 3 | 上級 | 3 | 上級 | 2 |
| | | | 中級 | 11 | 中級 | 10 | 中級 | 5 |
| | | | 初級 | 4 | 初級 | 4 | 初級 | 2 |
| | | | 正規学部留学生 | 5名 | 正規学部留学生 | 2名 | 正規学部留学生 | 2名 |
| | | | 上級 | 3 | 上級 | 2 | 上級 | 2 |
| | | | 中級 | 2 | 中級 | 0 | 中級 | 0 |
| | | | 正規大学院留学生 | 6名 | 正規大学院留学生 | 5名 | 正規大学院留学生 | 4名 |
| | | | 上級 | 4 | 上級 | 4 | 上級 | 4 |
| 中級 | 2 | 中級 | 1 | 中級 | 0 | | | |
| | | | 第1回申込合計 | 29名 | 第1回受験合計 | 24名 | 第1回合格合計 | 15名 |
| 第2回 | 7月1日 (水) | 6月3日(水) | 特別外国人学生 | 6名 | 特別外国人学生 | 5名 | 特別外国人学生 | 4名 |
| | | | 上級 | 1 | 上級 | 1 | 上級 | 1 |
| | | | 中級 | 5 | 中級 | 4 | 中級 | 3 |
| | | | 正規学部留学生 | 3名 | 正規学部留学生 | 1名 | 正規学部留学生 | 1名 |
| | | | 上級 | 2 | 上級 | 1 | 上級 | 1 |
| | | | 中級 | 1 | 中級 | 0 | 中級 | 0 |
| | | | 正規大学院留学生 | 3名 | 正規大学院留学生 | 3名 | 正規大学院留学生 | 3名 |
| | | | 上級 | 3 | 上級 | 3 | 上級 | 3 |
| | | | 第2回申込合計 | 12名 | 第2回受験合計 | 9名 | 第2回合格合計 | 8名 |
| 第3回 | 10月28日 (水) | 9月30日 (水) | 特別外国人学生 | 15名 | 特別外国人学生 | 7名 | 特別外国人学生 | 5名 |
| | | | 上級 | 3 | 上級 | 2 | 上級 | 2 |
| | | | 中級 | 3 | 中級 | 2 | 中級 | 1 |
| | | | 初級 | 9 | 初級 | 3 | 初級 | 2 |
| | | | 正規学部留学生 | 1名 | 正規学部留学生 | 0名 | 正規学部留学生 | 0名 |
| | | | 中級 | 1 | 中級 | 0 | 中級 | 0 |
| | | | 初級 | | 初級 | | 初級 | |
| | | | 正規大学院留学生 | 1名 | 正規大学院留学生 | 1名 | 正規大学院留学生 | 1名 |

| | | | | | | | | |
|---------|-----------|-----------|----------|---------|----------|----|----------|----|
| 第4回 | 12月16日(水) | 11月25日(水) | 上級 | 1 | 上級 | 1 | 上級 | 1 |
| | | | 中級 | 0 | 中級 | 0 | 中級 | 0 |
| | | | 初級 | 0 | 初級 | 0 | 初級 | 0 |
| | | | その他 | 0名 | その他 | 0名 | その他 | 0名 |
| | | | 第3回申込合計 | 17名 | 第3回受験合計 | 8名 | 第3回合格合計 | 6名 |
| | | | 特別外国人学生 | 9名 | 特別外国人学生 | 4名 | 特別外国人学生 | 4名 |
| | | | 上級 | 2 | 上級 | 0 | 上級 | 0 |
| | | | 中級 | 1 | 中級 | 0 | 中級 | 0 |
| | | | 初級 | 6 | 初級 | 4 | 初級 | 4 |
| | | | 正規学部留学生 | 1名 | 正規学部留学生 | 1名 | 正規学部留学生 | 1名 |
| | | | 上級 | 1 | 上級 | 1 | 上級 | 1 |
| | | | 正規大学院留学生 | 1名 | 正規大学院留学生 | 1名 | 正規大学院留学生 | 1名 |
| | | | 上級 | 1 | 上級 | 1 | 上級 | 1 |
| | | | 中級 | 0 | 中級 | 0 | 中級 | 0 |
| その他 | 0名 | その他 | 0名 | その他 | 0名 | | | |
| 第4回申込合計 | 11名 | 第4回受験合計 | 6名 | 第4回合格合計 | 6名 | | | |

2015年度もこれまで同様に4回実施した。2014年度にひきつづき、第3回と第4回の実施日を休暇前に設定した結果、申込者数に対する実際の受験者数の割合は一定程度保たれた。

2015年度の特徴としては正規学部留学生や正規大学院留学生の受験がどの回でも見られるようになったことが挙げられる。ホームページやニュースレターを通して漢字検定を広く周知することにつとめ、教室などでの呼びかけを行うなどした結果、漢字検定の存在や意義が広く認知されるようになってきたように思われる。

5. 2015 年度 日本語自主学習用図書貸し出し実施報告

日本語教育センターでは、1回3冊、2週間までの図書の貸し出しを行っている。以下は、今年度の貸し出し記録である。

利用件数は昨年度よりやや下回ったが、新座キャンパスでの利用や研究者・講師による利用があった。

貸し出し教材の内容は、日本語能力試験対策のほか、ビジネス日本語の教材の利用が見られた。

自主学習用図書の貸し出しは、日本語教育センターが展開する他の事業と比較すると大きな役割を果たしているとは言えないが、図書館やインターネットなど、利用者の日本語教育教材へのアクセスのしかたが多様化する中で、一定の役割を果たすと考えられる。来年度以降も、ホームページやニュースレター、また教員からの紹介など機会をとらえて、本サービスについての広報を積極的に行い、利用を促す努力をしたい。

【所属別記録】

| | 利用者数 | 貸出冊数 |
|-----------|------|------|
| 特別外国人学生 | 6 | 18 |
| 正規学生 | 6 | 16 |
| (新座) 正規学生 | 1 | 1 |
| 研究者・講師 | 2 | 5 |

【貸し出し図書一覧】

| | 貸出書名 | 貸出回数 |
|---------|--------------------------------|------|
| 特別外国人学生 | 日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 文法 | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N2 文法 問題集 | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N2 文法 総まとめ | 2 |
| | 日本語能力試験対策 N2 漢字 語彙 | 2 |
| | 日本語能力試験 スーパー模試 N2 | 2 |
| | 日本語能力試験 N1・N2・N3 新傾向解説と完全予想模試 | 2 |
| | パターン別徹底ドリル日本語能力試験 N1 (英語) | 1 |
| | CD2 枚付 日本語能力試験 模試と対策 Vol. 2 N1 | 1 |
| | 日本語能力試験 模試と対策 N2 | 3 |
| | 日本語能力試験 模試と対策 N3 | 2 |
| | 日本語文型辞典 (ベトナム語版) | 1 |

| | | |
|-----------|-------------------------|---|
| 正規留学生 | 漢字検定 2 級学習ノート | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 語彙 | 2 |
| | 漢字・語彙が弱いあなたへ | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N1 文法 問題集 | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N1 文法 総まとめ | 3 |
| | 日本語能力試験対策 N1 漢字 語彙 | 3 |
| | 日本語能力試験対策 N2 文法 総まとめ | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N3 文法 語彙 漢字 | 1 |
| | 日本語能力試験 スーパー模試 N1 | 1 |
| | しごとの日本語 メールの書き方編 | 1 |
| | しごとの日本語 電話対応・基礎編 | 1 |
| 研究者・講師 | 日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 文法 | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 漢字 | 1 |
| | 日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 語彙 | 1 |
| | 日本語能力試験 スーパー模試 N2 | 1 |
| | 日本語能力試験 スーパー模試 N4・N5 | 1 |
| (新座) 正規学生 | 日本語文型辞典 | 1 |

6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2015年6月27日に『立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー』を開催し、当日は18名の留学生が登壇した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/3rd.default.aspx>を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第4回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行したほか、日本語教育センターのニュースレターや大学の広報媒体でも広く成果を報告した。

7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

2015年12月4日に、日本語教育センター主催で「日本語教育センターシンポジウム2015」を開催した。テーマは2014年度のシンポジウムにひきつづき、現在日本語教育センターが取り組んでいるプログラム評価をテーマとして取り上げた。具体的には大学の国際化と日本語教育におけるプログラム評価ー過去・現在・未来ーというテーマを設定し、第1部は、田丸淑子氏（元 国際大学大学院国際関係学研究科教授）に「日本語教育のプログラム評価の過去について」という題目で、つづいて池田伸子氏に「大学の国際化の観点から期待する日本語教育センターのプログラム評価」という題目で、そして山口和範氏（副総長、国際化推進機構長、経営学部教授）に「大学の国際化の観点から期待する日本語教育センターのプログラム評価」という題目でお話しいただいた。つづいて第2部の討論は、西原鈴子氏（国際交流基金日本語国際センター長）、小澤伊久美氏（国際基督教大学日本語教育課程 課程准教授）、そして長尾 眞文 氏（国連大学サステイナビリティ高等研究所 客員教授/プログラム・アドバイザー）からコメントを頂戴し、フロアを含めた全体討議を行った。

実施の詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/symposium/>

で報告した通りで、当日は学内の教職員と学生のほかに、学外の方々、53名の参加があった。

当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える5』として刊行した。

8. 日本語教育センターニュースレター発行報告

昨年度にひきつづき「日本語教育センターニュースレター」を発行した。昨年度改善の必要性を感じた日本語相談室や教材貸し出しなどを意識的に取り上げるとともに、留学生に関する教職員の方の声を載せるなどした。日本語未習の学生に対応するため日英併記の記事を設けたり、漢字検定全レベルを制覇した学生の特集記事を設けたりした。詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/>

を参照されたい。

9. センター員活動報告

池田伸子

著書

1. 『日本語教師を目指す人、日本語教育現場で働く人のためのディスレクシアハンドブック』、2016年（試用版）
2. 『新界標日本語 総合教程(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民・丸山千歌主編、編集を担当)
3. 『新界標日本語 練習冊(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民・高村めぐみ主編、編集を担当)

論文

1. 「多様なニーズに対応可能な日本語教員養成プログラムの開発—態度変容に関する予備的考察—」『日本語教育実践研究』第3号、2016年、1-19頁.
2. 「日本語教育プログラム運営における開発型評価活用の意義と可能性」『日本語教育実践研究』第3号、2016年、立教大学日本語教育実践学会、20-31頁. (小澤伊久美、丸山千歌との共同執筆)

研究発表

「日本語教育プログラム運営における開発型評価の意義と可能性」(小澤伊久美、丸山千歌との共同によるポスター発表)『2015年度日本語教育学会秋季大会 予稿集』、於沖縄国際大学、2015年10月11日、333-334頁.

研究助成

1. 2015.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「ディスレクシア学習者に対する実現可能で個別的な日本語教育支援体制の構築」（研究代表者）（課題番号：15K02657）
2. 2013.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学国際化に対する日本語教育プログラムの貢献の評価—参加型評価によるモデル立案—」（研究分担者）（課題番号：25390599）

丸山千歌

著書

1. 『新界標日本語 総合教程(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民との共同刊行)
2. 『新界標日本語 練習冊(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民・高村めぐみ主編、編集を担当)

論文

1. 「学習者要因の分析①—PAC 分析を活用した研究—」『日語教学研究』外語教学与研究出版、2016年、362-384 頁.
2. 「日本語教育プログラム運営における開発型評価活用の意義と可能性」『立教日本語教育実践研究』第3号、立教大学日本語教育実践学会、2016年、20-31 頁. (小澤伊久美、池田伸子との共同執筆)

事例報告

「日本語教育の立場から学生の多様性を考える」『大学教育研究フォーラム』21、立教大学全学共通カリキュラム運営センター、21-24 頁.

研究発表

1. The Japanese-language learners' responses to reading materials: Their change and the influence of study overseas experience prior to Japan. (Co-presenter with Ikumi OZAWA, 2015 MMIRA Regional Conference, Ritsumeikan University (Osaka-Ibaraki Campus), Sep. 19th, 2015. (Poster Session) .
2. 「日本語教育プログラム運営における開発型評価の意義と可能性」(小澤伊久美、池田伸子との共同によるポスター発表)『2015年度日本語教育学会秋季大会 予稿集』、於沖縄国際大学、2015年10月11日、333-334 頁.

講演

1. 「現地語としての日本語教育プログラムをいかにデザインするか」教育部 2016 年度基礎言語及び多文化能力育成プロジェクトワークショップ、於輔仁大学 (台湾)、2016 年 1 月 22 日 (招待講演)
2. 「PAC 分析法を活用した日本語教育研究の動向」教育部 2016 年度基礎言語及び多文化能力育成プロジェクトワークショップ、於輔仁大学 (台湾)、2016 年 1 月 23 日 (招待講演)
3. 「日本語教育の理論と教育実践—4技能の指導と can-do statement を中心に—」2016 全国高校日語系主任及日語骨干教师论坛、於華東師範大学、2016 年 3 月 12 日 (招待講演)

研究助成

2013.4～現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (C)) 「大学国際化に対する日本語教育プログラムの貢献の評価—参加型評価によるモデル立案—」 (研究分担者) (課題番号: 25390599)

平山紫帆

著書

1. 『新界標日本語 総合教程(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民・丸山千歌主編、編集を担当)
2. 『新界標日本語 練習冊(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民・高村めぐみ主編、編集を担当)

論文

「第4章 学校文法における形容詞・形容動詞」中山緑朗・飯田春巳(監修)沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一(編)『品詞別学校文法講座 第三巻 動詞・形容詞・形容動詞』pp. 83-112、明治書院、2015年

藤田恵

著書

1. 『新界標日本語 総合教程(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民・丸山千歌主編、編集を担当)
2. 『新界標日本語 練習冊(3)』復旦大学出版会、2016年、(徐敏民・高村めぐみ主編、編集を担当)

研究論文

1. 「視覚に障害をもつ日本語学習者の学びを支援するネットワークの構築にむけた基礎調査」(河住有希子、秋元美晴、北川幸子、浅野有里との共同執筆)『日本語教育方法研究会誌』Vol.22 No.2、日本語教育方法研究会、2015年、6-7頁
2. 「視覚に障害をもつ日本語学習者を取りまく学習環境の現状と課題 ―授業を担当する教師を対象とした調査より―」(秋元美晴、浅野有里、河住有希子、北川幸子との共同執筆)『恵泉女学園大学紀要』第28号、恵泉女学園大学、2016年、143-155頁
3. 「日本語教育におけるインクルーシブ教育の実現に向けた一授業の提案 ―点字五十音図を素材として―」(河住有希子、浅野有里、北川幸子、秋元美晴との共同執筆)『日本語教育方法研究会誌』Vol.23 No.1、日本語教育方法研究会、2016年、印刷中

研究発表

1. 「インクルーシブ教育のための日本語教員用ハンドブック作成への試案 ―点字を使用する日本語学習者への学習支援―」(河住有希子、秋元美晴、浅野有里との共同ポスター発表) 2015年度日本語教育学会春季大会、於武蔵野大学、2015年5月31日
2. 「視覚に障害をもつ日本語学習者の学びを支援するネットワークの構築にむけた基礎調査」(河住有希子、秋元美晴、北川幸子、浅野有里との共同発表及びポスター発表) 日本語教育方法研究会第45回研究会、於立命館大学、2015年9月19日(日本語教育方法研究会奨励賞受賞)
3. 「聴覚情報を用いて日本語を学ぶ視覚障害学習者への学習支援 ―教師用ハンドブック『きく日本語』

の作成—」(秋元美晴、河住有希子、浅野有里、北川幸子との共同ポスター発表) 2015年度日本語教育学会秋季大会、於沖縄国際大学、2015年10月11日

4. 「日本語教育におけるインクルーシブ教育の実現に向けた一授業の提案—点字五十音図を素材として—」(河住有希子、浅野有里、北川幸子、秋元美晴との共同ポスター発表) 日本語教育方法研究会第46回研究会、於国際交流基金日本語国際センター、2016年3月19日

金庭久美子

著書

1. 『新界標日本語 総合教程(3)』復旦大学出版社、2016年、(徐敏民・丸山千歌主編、編集を担当)
2. 『新界標日本語 練習冊(3)』復旦大学出版社、2016年、(徐敏民・高村めぐみ主編、編集を担当)

研究論文

1. 「話すことの指導—中級レベルの会話指導—」『日本学研究叢書 日語教学研究』外語教学与研究出版社、2016年、292-316
2. 「作文教育における体裁の指導の必要性—日本語学習者の作文・メールの体裁の調査より—」(査読有)『ことばの本質を求めて—小出慶一教授退職記念論文集』埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊1、2016年、158-169
3. 「書き言葉における日本語学習者の文体の使用状況—『YNU 書き言葉コーパス』を用いて—」(金蘭美との共同執筆)ときわの杜論叢第三号 横浜国立大学国際戦略推進機構、2016年(印刷中)
4. 「「聞き手参加型聴解」の教材開発」(山森理恵・奥野由紀子・鎌田修との共同執筆)『ヨーロッパ日本語教育 20』第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集、2016年(印刷中)
5. 「OPIにおける話題転換の方法—上級話者と中級話者に対するテストの関わり方に着目して—」(西部由佳・岩佐詩子・萩原孝恵・水上由美・奥村圭子による共同執筆)(査読有)『日本語プロフィシエンシー研究』4号 日本語プロフィシエンシー研究会、2016年(印刷中)

研究発表

1. 「OPIにおける話題転換の方法—OPIにおける話題転換の方法—」(西部由佳・萩原孝恵・水上由美・奥村圭子・岩佐詩子との共同発表) 第10回国際OPIシンポジウム、於函館国際ホテル、2015年8月2日
2. 「聞き手参加型聴解」の教材開発(山森理恵・奥野由紀子・鎌田修との共同ポスター発表) 第19回日本語教育シンポジウム ヨーロッパ日本語教師会、於ボルドーモンテニュー大学、2015年8月28日
3. 「作文の評価基準における—考察—メール文の自動採点に向けて—」(金蘭美・橋本直幸との共同発表) 韓国日本語学会 第32回秋期国際学術発表会 於韓国放送通信大学、2015年9月19日

4. 「レベル差のあるクラスのための教材開発—『やさしくな—れ』を利用した教材作成—」（川村よし子との共同発表）韓国日本語学会 第 32 回秋期国際学術発表会 於韓国放送通信大学、2015 年 9 月 19 日
5. 「メール文の web 自動採点システムの開発—タスク内容の検討—」第 46 回日本語教育方法研究会ポスター発表 於国際交流基金日本語国際センター、2016 年 3 月 19 日

研究助成

1. 2015.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「タスク別書き言葉コーパスを利用したメール文の web 自動採点システムの開発」（研究代表者）（課題番号：15K02658）
2. 2015.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「多義語の意味の自動特定機能を組み入れたやさしい日本語による読解支援環境の構築」（研究分担者）（課題番号：15H03219）

栗田奈美

著書

1. 『新界標日本語 総合教程(3)』復旦大学出版社、2016 年、（徐敏民・丸山千歌主編、編集を担当）
2. 『新界標日本語 練習冊(3)』復旦大学出版社、2016 年、（徐敏民・高村めぐみ主編、編集を担当）

研究論文

1. 「本動詞から複合動詞後項への意味拡張動機づけ—類義表現「～きる」「～ぬく」「～とおす」を例に—」『日本認知言語学会論文集 第15巻』pp. 398-410、2015年

研究発表

1. 「ビジネス日本語クラスにおけるゲストセッションの成果と課題—複眼的評価を目指して—」（ポスター発表）第 24 回小出記念日本語教育研究会、於国際基督教大学、2015 年 7 月 4 日

10. 2015年度 F D記録

(1) 担当者連絡会など

①2015年度FD委員会(2015年7月17日、9月4日、2016年2月19日、3月1日 計4回)

昨年度定めた、日本語教育センターのFD委員会規定にのっとり、計画的に開催した。

詳細は以下の通りである。

- a.2015年7月17日(金)実務委員会終了後〔場所〕マキム第1会議室〔参加者数〕10名〔議題〕2015年度のFD活動の課題(WebPT開発、日本語相談室Web予約システム)と日本語教育のプログラム評価活動について
- b.2015年9月4日9:00-16:00〔参加者数〕22名〔議題〕日本語教育科目運営について、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、日本語教育センターシンポジウムほか
- c.2016年2月19日 9:00-16:00〔参加者数〕9名〔議題〕2015年度のFD活動の課題(WebPT開発、日本語相談室Web予約システム)、来年度のFD活動の課題ほか
- d.2016年3月1日 9:00-16:00〔参加者数〕26名〔議題〕日本語教育科目運営、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、日本語教育センターシンポジウムほか

②実務委員会打合せ(4月6日、5月11日、6月15日、7月13日、9月21日、10月26日、11月30日、1月25日、2月15日、計9回)

センター長、センター員と事務局を構成メンバーとして、1か月に1回ペースで開催し、日本語教育プログラム運営上の実務的な議題について話し合った。

(2) 日本語相談室オンライン予約システムの運用についての検討

2015年度から、日本語教育センターの教育活動の一つの柱となる日本語相談室はオンライン予約システムを導入した。オンライン予約システムの導入の結果、各月の利用件数は前年度のほぼ倍となり、利用者にとっての利便性が格段に上がったことが推察される。

運用上課題となった案件は担当者が記録し、実務打ち合わせなどの会議上で共有し解決を図ってきた。また第1回、第2回のFD委員会でも議題に取り上げ、各学期に表れた課題とその解決方法について共有した。共有された課題は、春学期が12件、秋学期が7件、合計19件であった。これらに適宜取り組むことにより、利用者、教職員双方にとって合理的な運用体制ができつつある。テレプレゼンス室の利用体制については、メディアセンターとの連携により来年度早々に改善する見込みである。

(3) ウェブによるプレイスメントテストの開発

2016年度からの本格実施をめざし、ウェブによるプレイスメントテストの開発に取り組んだ。開発方

針や経過は実務打ち合わせ、実務委員会、センター運営会議で適宜共有してきたが、第1回、第3回のFD委員会でも議題に取り上げ、また第2回、第4回では報告という形で兼任講師とも進捗と課題について共有してきた。秋からの3回の試行を経て、テスト実施時間と判定精度が適切なレベルに落ち着いたことを確認し、テストの実施体制の準備、問題差し替えによるコンテンツの改良も行い、本格実施に臨む体制を整えた。

(5) 2015年度の学生による評価アンケート結果（特別外国人学生対象J0～J7）

日本語教育センターでは、特別外国人学生用日本語科目について、J0からJ7レベルの日本語科目を履修したプログラム修了予定学生（帰国予定学生）を対象に日本語プログラムに関するアンケートを実施している。2014年度にひきつづき、国際センターの協力によりウェブによるアンケートを実施し、春学期70名、秋学期（集計中）から回答を得た。

質問内容は以下の通りで、自由記述以外は、5:はい 4:まあそうである 3:どちらともいえない 2:あまりそうでない 1:いいえ の5段階の選択式で回答を得た。

- | | |
|----|---|
| 1 | 以前より日本語を聞いて理解できるようになった。 I can listen and understand Japanese better than before. |
| 2 | 以前より日本語を話すことができるようになった。 I can speak Japanese better than before. |
| 3 | 以前より日本語を読んで理解できるようになった。 I can read and understand Japanese better than before. |
| 4 | 以前より日本語で書く力が伸びた。 I can write Japanese compositions (or reports) better than before. |
| 5 | 以前より多くの日本語の単語を使えるようになった。 I expanded my Japanese vocabulary, and use it in my spoken/ written Japanese. |
| 6 | 以前より多くの文型を使えるようになった。 I can speak/write Japanese using different sentence patterns. |
| 7 | 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びた。 My ability to discuss and give a presentation in Japanese improved. |
| 8 | 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信がついた。 My confidence to discuss and give a presentation in Japanese increased. |
| 9 | 宿題は日本語の勉強の役に立った。 The homework helped me to learn Japanese. |
| 10 | 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになった。 The Japanese class's activities help me think about Japanese social and cultural issues. |

11 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確だった。

My teachers gave clear instructions and explanations in class.

12 日本語で話す機会が十分にあった。

I had enough time to speak in Japanese during each class.

13 立教の日本語科目数に満足している。

I am happy with the variation of the Japanese classes of Rikkyo University.

14 1クラスの学生の人数は適当だった。

The number of students per Japanese class was appropriate.

15 立教の日本語プログラムに満足している。

Overall, I am happy with the Japanese course of Rikkyo University.

自由記述

立教の日本語プログラムでいいと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was good.

立教の日本語プログラムで改善すべきだと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was not good, and any suggestions for improvement.

アンケート結果は以下の通りとなった。

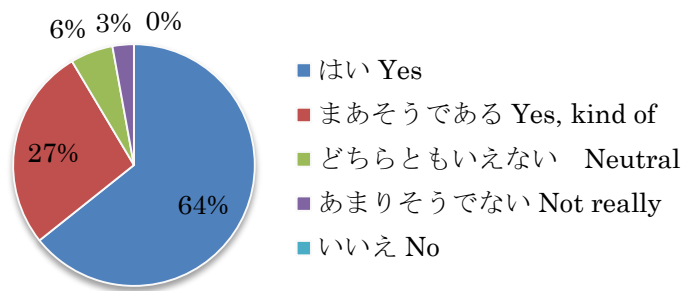
春学期は、4 技能の向上、語彙力の向上、発表する力およびディスカッションする力および自信、教師のインストラクション、クラス人数の適正さなどに対する評価が非常に高い。科目数への満足度や日本語プログラム全体への満足度はやや高い。科目数の満足度については、2016 年度よりビジネス日本語口頭の先修制を撤廃し、ビジネス口頭 A,B 科目として刷新することや、総合日本語 6-8 を新設する取り組みにつなげた。その中で、Q10 の日本の文化や社会に対する理解については、肯定的にとらえられ問題はないと思われるものの、他よりは値が低い。どのレベルでも日本の文化・社会への理解を深める活動を取り入れることが可能なので、ひきつづき工夫していきたい。

自由記述では、教師の対応やインタラクティブな授業運営、教師の専門性、日本語による日本語クラスの展開、少人数クラス、複数のレベルにまたがって展開する中級日本語、ビジネス系の日本語科目など科目特性を前面に出した科目について具体的で肯定的な評価があった。漢字検定やスピーチコンテストなどの事業に対しても肯定的なコメントが寄せられた。一方で、1 回の授業の学習内容が多い、プレイスメントテストで自己評価よりも低く判定された、課題・宿題が多い、日本の文化に関する科目を増やしてほしい、学生間の活動を多くしてほしいといったコメントがあった。

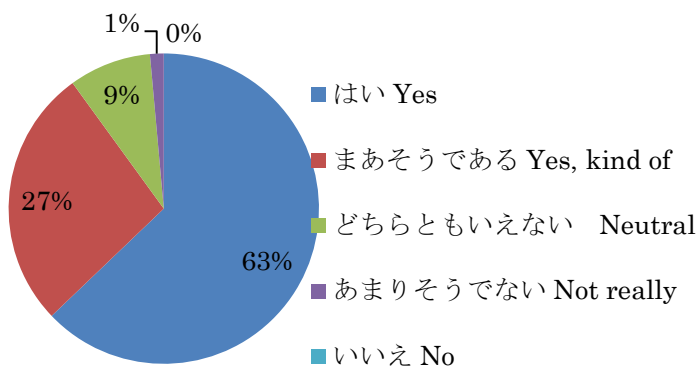
【2015 年度春学期プログラム修了予定学生アンケートの結果の内訳】

(数値は%)

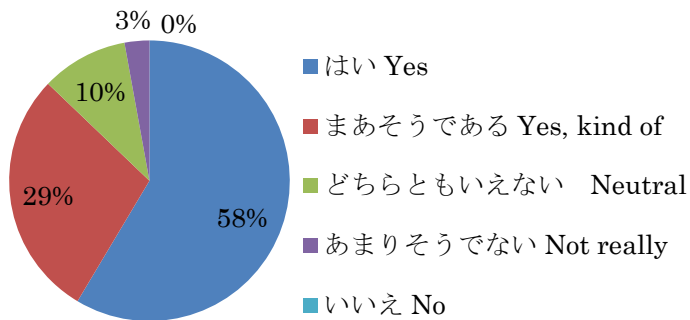
1. 以前より日本語を聞いて理解できるようになりましたか？



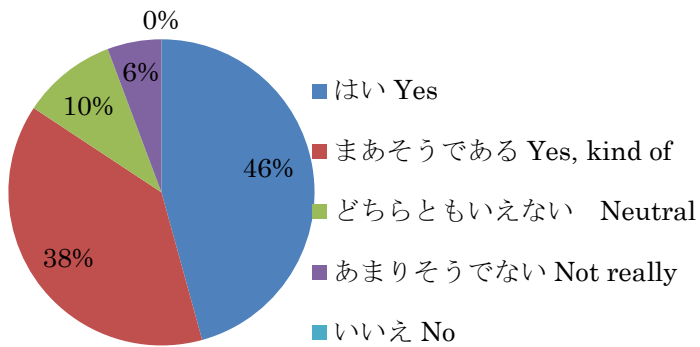
2. 以前より日本語を話すことができるようになりましたか？



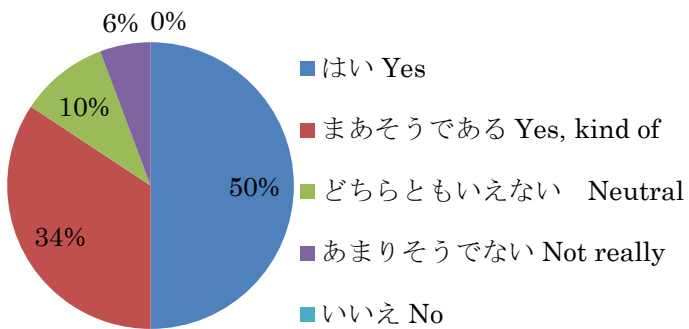
3. 以前より日本語を読んで理解できるようになりましたか？



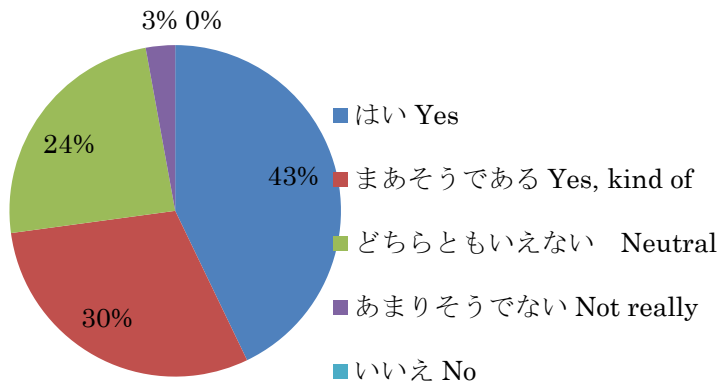
4. 以前より日本語で書く力が伸びましたか？



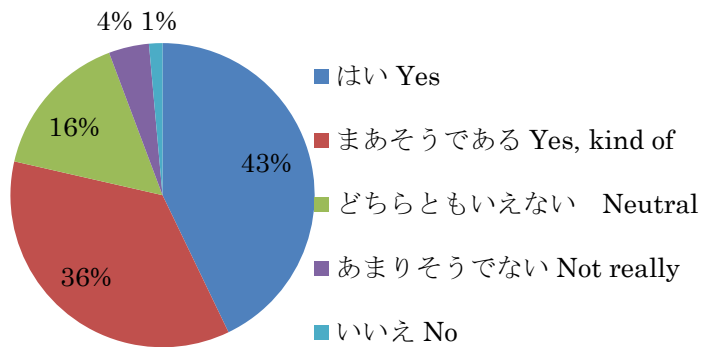
5. 以前より多くの日本語の単語を使えるようになりましたか？



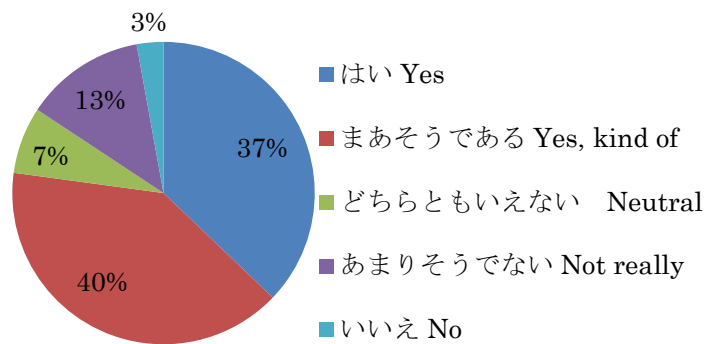
6. 以前より多くの文型を使えるようになりましたか？



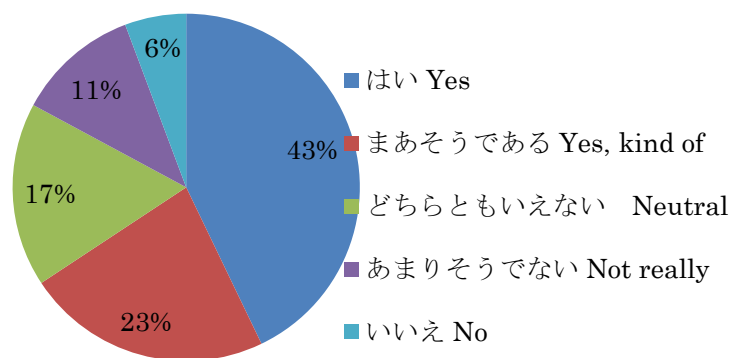
7. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びましたか？



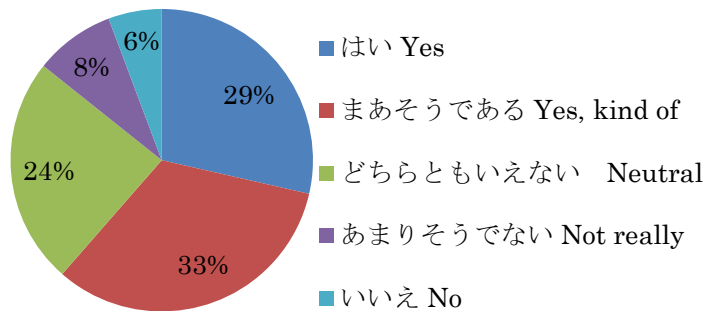
8. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信ができましたか？



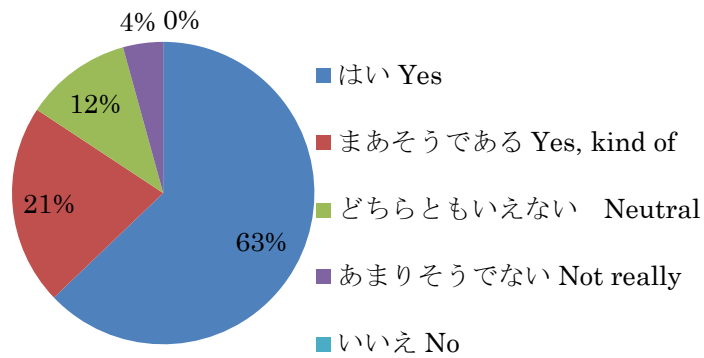
9. 宿題は日本語の勉強の役に立ちましたか？



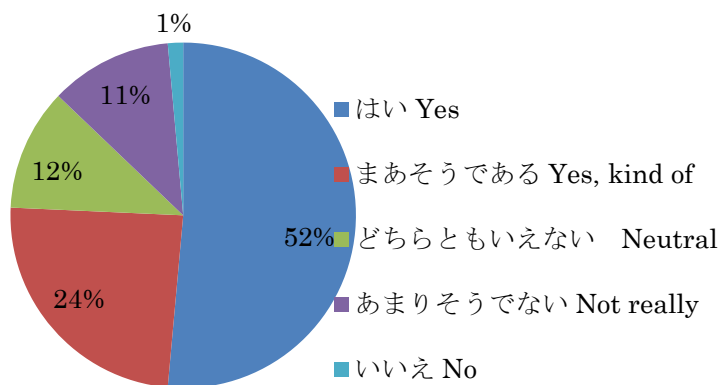
10. 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになりましたか？



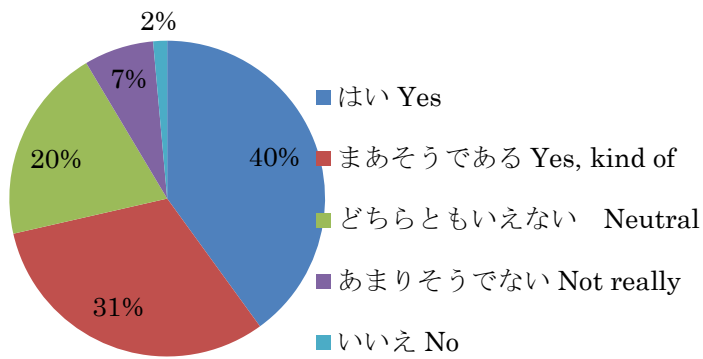
11. 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確でしたか？



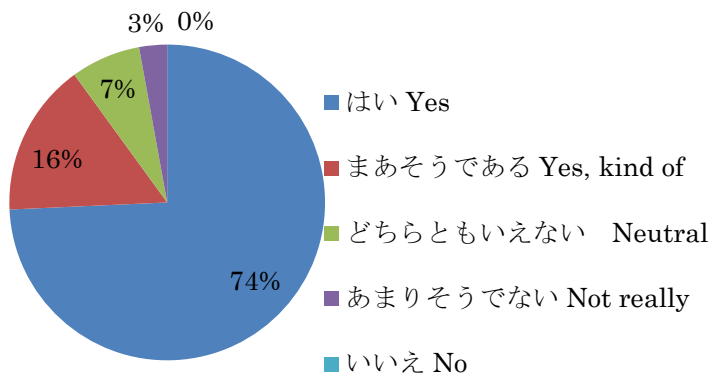
12. 日本語で話す機会が十分にありましたか？



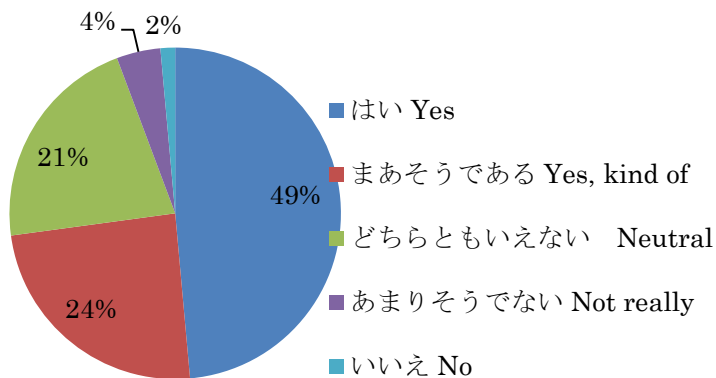
1 3. 立教の日本語科目数に満足していますか？



1 4. 1クラスの学生の人数は適当ですか？



1 5. 立教の日本語プログラムに満足していますか？



【2015年度秋学期プログラム修了予定学生アンケートの結果】

集計中

(6) 2015年度の学生による評価アンケート結果（全カリ言語B、自由科目）

正規留学生が履修する全学共通カリキュラム言語B 日本語科目「日本語基礎Ⅰ／Ⅱ」および自由科目（特別外国人学生用J 8科目と同時開講）については、各学期末に科目履修者全員を対象に授業評価アンケートを実施した。結果は全学共通カリキュラムの授業評価アンケート報告書に掲載する予定である。これが刊行された後に日本語教育センター部分を転載する。

（7）2016年度の課題と計画

課題1：ウェブによるプレイスメントテストの運営についての検討

2015年度に開発したウェブによるプレイスメントテストは、2016年度から本格的に実施する予定である。このテスト開発は、留学生が増加した場合でも、効率よく、適切な判定を行うことと、運営の際の負荷増大を避けることを目的としている。本格始動の年となる2016年度は、判定作業についての検証を行うとともに、このシステムのより効果的な運用について検討を行う。

課題2：新規科目および新規プログラムについての検討

2016年度からの新規科目「大学生の日本語」（言語B 日本語科目）および「ビジネス口頭A、B」（自由科目）、そして、6月末から7月にかけて実施予定であるサマーコースのカリキュラム設計、運営についての検討を行う。

2015年度 日本語教育センター運営体制

運営委員会

| | | |
|--------|----------|--------------------------------|
| センター長 | : 丸山 千歌 | (異文化コミュニケーション学部教授) |
| 副センター長 | : 長谷川 修一 | (文学部教授) |
| 運営委員 | : 佐々木 一也 | (全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、文学部教授) |
| 運営委員 | : 杜 国慶 | (国際センターから、法学部教授) |
| 運営委員 | : 奥村 隆 | (センター長指名による、社会学部教授) |

実務委員会

| | | |
|--------|--|--------------------|
| センター長 | : 丸山 千歌 | (異文化コミュニケーション学部教授) |
| 副センター長 | : 長谷川 修一 | (文学部教授) |
| センター員 | : 池田 伸子 | (異文化コミュニケーション学部教授) |
| センター員 | : 奥村 隆 | (社会学部 教授) |
| センター員 | : 平山 紫帆 | (教育講師) |
| センター員 | : 藤田 恵 | (教育講師) |
| センター員 | : 金庭 久美子 | (教育講師) |
| センター員 | : 栗田 奈美 | (教育講師) |
| 事務局 | : 森上 美子 | |
| 事務局 | : 佐藤 和子 (2015/11/30 まで)、山崎真紀子 (2015/12/1 から) | |

兼任講師

| | |
|--------|--------|
| 猪口 綾奈 | 谷 啓子 |
| 小柳津 成訓 | 谷淵 麻子 |
| 神元 愛美子 | 長島 明子 |
| 川端 芳子 | 長谷川 孝子 |
| 小島 佳子 | 西内 沙恵 |
| 小森 由里 | 東平 福美 |
| 佐々木 藍子 | 保坂 明香 |
| 嶋原 耕一 | 御子神 佳奈 |
| 清水 澤子 | 山内 薫 |
| 高嶋 幸太 | 山辺 真理子 |

2015 年度日本語教育センター会議開催記録

| 月 | 日 | |
|----|----|---------------|
| 4 | 6 | 第 1 回実務委員会打合せ |
| | 10 | 第 1 回実務委員会 |
| | 15 | 第 1 回運営委員会 |
| 5 | 11 | 第 2 回実務委員会打合せ |
| | 15 | 第 2 回実務委員会 |
| | 20 | 第 2 回運営委員会 |
| 6 | 15 | 第 3 回実務委員会打合せ |
| | 19 | 第 3 回実務委員会 |
| | 24 | 第 3 回運営委員会 |
| 7 | 13 | 第 4 回実務委員会打合せ |
| | 17 | 第 4 回実務委員会 |
| | 22 | 第 4 回運営委員会 |
| 9 | 21 | 第 5 回実務委員会打合せ |
| | 25 | 第 5 回実務委員会 |
| | 30 | 第 5 回運営委員会 |
| 10 | 26 | 第 6 回実務委員会打合せ |
| 11 | 6 | 第 6 回実務委員会 |
| | 11 | 第 6 回運営委員会 |
| | 30 | 第 7 回実務委員会打合せ |
| 12 | 4 | 第 7 回実務委員会 |
| | 9 | 第 7 回運営委員会 |
| 1 | 25 | 第 8 回実務委員会打合せ |
| | 29 | 第 8 回実務委員会 |
| 2 | 15 | 第 9 回実務委員会打合せ |
| | 19 | 第 9 回実務委員会 |
| | 24 | 第 9 回運営委員会 |

実務委員会打ち合わせ：センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師）、事務局

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2015 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2015)

2016 年 3 月発行

編集兼発行者 日本語教育センター
発行責任者 丸山千歌
発行所 立教大学日本語教育センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
Tel: 03-3985-4202